

---

# Aura - Lucent

国見炯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A u r a - L u c e n t

### 【Nコード】

N 2 2 4 8 L

### 【作者名】

国見炯

### 【あらすじ】

美少年（青年）に見える主人公・鈴風 凜一（ ）が異世界に飛ばされた事から始まる物語です。基本は主人公最強の逆ハーです。人間や人外が種族問わずに登場予定。けれど一番の人外は恐らく主人公（予定）。最初は糖度、ほぼナシです。サイト【幻夢処】でも載せてます。 5 / 1 0 タイトルを変更しました。

【A u r a - L u c e n t】人物紹介（前書き）

人物紹介は随時更新していく為、ネタバレを含みます。

## 【Aura - Lucent】人物紹介

【鈴風 凜 - すすかぜ りん -】

- ・ 主人公 20歳
- ・ 身長は166cm。細い。女性らしい曲線はない。
- ・ 性格は無頓着。異世界にきて言い出した言葉は「面倒」。
- ・ 美少年・美青年好きの姉に育てられ、目指されたのはゲームの王子様。器用貧乏勇者？にならない ように、日々特訓？の毎日だったが、あっさりと出来てしまう為、それ程苦ではなかった。
- ・ 主、という声が響いた直後意識を失い、異世界の湖に浮いていた。

取り合えず本人は異世界に馴染む為、知識を日々吸収中。現在、元の世界に戻りたい、という言葉 は言っていない。

## 【フェルディナント・ロータス】

- ・ 騎士 19歳
- ・ 身長は182cm。無駄な肉はついていない。
- ・ 赤い髪と眼を持つわけありっぽい人。
- ・ 実は短気で、裏表のない人。懐にいった人間には甘い。が、中々いれない。
- ・ 凜の料理が気に入っている。特に調味料は神業だと尊敬している。

## 【ヒース・ロンド】

- ・魔法士 22歳
- ・身長は184cm。フェル同様無駄な肉はついていない。
- ・緑の髪と眼を持つわけありっぽい人Part2。
- ・裏表はあり、どんな相手だろうと笑顔で人と接する。

### 【アーフィイ】

- ・色々不明。髪の色は黄緑。
- ・凜の性別を見破ったある意味女慣れ？している。
- ・クロイツの友人。
- ・感情がすぐ表に出るタイプで、嘘はつけない。
- ・ヒースとフェルを恨んでいる(?)

### 【陛下】

- ・最強らしい。
- ・登場予定はもう少し先。

### 【琥珀】

- ・白金の髪と目を持つお兄さん。
- ・アーフィイ同様色々謎の人。
- ・凜の名前を発音できて、尚且つ様付けで呼ぶ。
- ・まだ傍観者という立場らしい。
- ・好きなもの。ひたすら凜。

### 【テノ】

・茶色がベースの前髪の一部に金のメッシュが入ったような髪の色。眼は金茶。

・魔法師団・団長。

・魔法の腕は確かだが、それとなくヒースを恐れている？

・気さくなお兄さん。に見える人。

### 【クロイツ】

・漆黒の髪と目を持つ本来は無口な青年。

・アーフィイの友人。

・凜の何かを感じ取っている人。

・ヒースとフェルに対しては特に何も思っていない。

## プロローグ

身体を動かすのは好きだった。  
小さい頃から好きだった。

勉強も嫌いじゃない。

知らないことを知る。発展させる。

そういつた事にも興味を覚え、率先して行っていた。

知らなければ損だ！なんてはつきりと言い切ってしまう逞しい姉  
に育てられたからかもしれない。

美形大好きな姉。

気弱な、でも笑顔が優しい兄。

そして、男に見える妹。

美形は強く優しくかつこよく頭脳明晰にあれ！

姉の口癖だ。

それでもこつこつも言っていた。

どんな時でも冷静に。

慌てず取り乱さずに女の子を護ってあげるのよ。

所詮生物の考える事。

生物が考えて突破できない事はない。

そう言っていた。

「言つてたよなあ」

ぷかぷかと水に浮かびつつ、ありえない月を眺めながら呑気に呟く。

夜空に浮かぶ二つの月。

銀色と金色の双月だ。

少なくとも地球上でこんな光景が見られるという話しは聞いた事がない。

「しかし…自分も荷物も濡れまくりだ」

珍しい月を眺める事をやめ、立ち泳ぎの要領で身体を浮かせる。

周りは木々に覆われ、現在地を確認する事は出来ないが、現在地がわかった所で理解は出来ないだろう。

自分の住んでいる地域にこんな場所は存在しない。

まるでどこその亜熱帯風景を切り取ってきたかのような光景。

「ピラニア・・・とか、ワニ、が出そうな場所だね。実物は見た事ないけど」

その時はその時か。

妙にさっぱりとした感覚で頷くと、とりあえず岸に向かって泳ぎ始めた。

その日はいつも通りだったのだ。

大学の講義は午後から。

友人と待ち合わせをしてご飯を食べて、いつも通り講義を受けてじゃーね。気をつけて帰ってね。

そう言つて友人を見送つて、自分も電車に乗り込んだ。

それから・・・



それから？

記憶が途切れたような気がする。

「（眠った・・・熟睡？ いや…声が聞こえた）」

何か途切れる瞬間、 主 という声を聞いた。

だからといってそれが事態の解決に繋がるわけじゃない。  
寧ろ人から主、なんて呼ばれる心当たりもない。

姉の教育で、ファンクラブなるものは存在していたが。  
主とファンクラブは別物だろう。

土のある場所まで泳ぐと、濡れて重みが増した鞆と自身を力ずく  
で岸へと上げ、そこで漸く息をついた。思う事は冬の装いじゃなく  
て良かった、という事だろうか。

何処かずれた事を考えながら辺りを見回すが、当たり前のように  
人の姿は一切ない。

寧ろこの時間にこんな場所を歩く人がいたらそれも怖い。が、人  
に会わない事にはどうしようもない。

「すいませーん。誰かいませんかー？」

予想外に響く自分の声。

「誰だ！？」

「おっと、予想外」

自分のだした声に応えるように、間髪いれずに聞こえた声と物音。

声だけ聞くと若い。

「何故こんな場所にいる！ 答える！！」

無遠慮に首筋に突きつけられた、喉にあたる冷たい感触。

ズキン、と痛む所を見ると、剣先で傷をつけたらしい。

手で傷の確認をしたいが、目の前の男は許してはくれなさそうだ。

「（しかし・・・ありえない格好だなあ。ゲームのキャラみたいだ。

本人は至って真面目そうだから・・・）」

異世界ってやつか。

何処までも冷静に、自分を殺すかもしれない男を見つめた。

「フェル。その物騒な剣、しまいなよ。

予言は害在る者じゃない。不確定なだけで。

お兄さん、名前を教えてください。」

突然現れたように見える男。

剣を突きつけた男　フェルを退かし、目の前へと立つ人好きの  
する笑みを浮かべる男。

胡散臭い笑み。

正直に思う。

自分と同種か・・・

内心嫌そうに、ため息を落とした。

「鈴風　凜。多分、この世界じゃない所から来たと思うよ。」

言っている凜でも思う。

頭がおかしいのかと。

そう疑われても仕方のない言葉。

「すごく冷静だね。喉、怪我させられてるのに。

自分は殺されないとか思っちゃってる？」

やっぱり性格は悪そうだ。

リンは、声には出さずに呟く。

「いえ。喉は痛いですよ・

異端を目の前にした人間の行動なんて、何処でも一緒だと思うの  
で……」

ここで1回言葉を区切ると、

「どうせならサクツとしてほしいですね。

この世界に目的があるわけでもないし、オレから引き出せる情報  
もないですし」

苦笑を滲ませる凜と、苦笑いを浮かべた男。

決定権は笑みを絶やさなない男の方が持っていそうだと思うが、凜  
はそれ以上は何も言わずに黙って男たちを見つめた。

恐らくというよりは絶対、この男の好感度は下がりまくっている。  
凜と同種というのものもあるかもしれないが、気に入るような会話も  
していない。

「（面倒だな……結論が出てるなら、早くしてくれないかな）」

ここには護るべき女の子も、完璧な自分を見せなきゃならない姉もない。

物心ついてから当たり前のように演じていた自分。

それを初めて脱ぎ捨て、抜け殻となった状態。

力を抜くとこんな感じになるというのは凜にとっては初体験だったが、だからといってどうにかなるわけでもない。

開いていた目を、ゆっくりと閉じた。

折角なら、ふかふかの布団で眠りたかった。

そんな事を思いながら……。

## はじめまして異世界・1

ゲームや小説にあるトリップもの。

可愛い主人公がかっこいい男性と恋をしたり。  
魔法を使ったり。  
魔王を倒したり。

異世界で何で日本語が通じるの??  
文字なんて書けないでしょ。  
地球上ですらわからないのに、どうして??

姉に言ったら、それは女の子の夢なのよ!と少女マンガやゲームを渡され、理想の王子様を勉強させられた。

そついえばそうだね。  
さつき、普通に会話してた。

異世界でも日本語なんだ。  
共通なんだ。  
ごめん。オレが間違ってたよ。

「……って、あのミミズ文字、日本語じゃないよね」

目を開けて最初に飛び込んできた掛け軸らしきもの。正直言つて「ごちゃごちゃとミミズがのた打ち回ったかのようにしか見えない。

だが、この世界の文字だろうと思う。妙な確信。

キヨロキヨロと辺りを見回せば、自分のおかれた状況がありえないという事に気付いた。

シングルサイズのベットのの上。

誰にいない静かな部屋。

机の上には美味しそうな朝食。

「・・・・・・・・」

普通に考えればこれは普通の部屋だ。

しかし、凜がおかれた状況を考えるとこれは普通ではなく、どうしたものかと首を傾げる。

元々の自分の部屋よりも広い異世界の部屋。朝食の隣には新聞紙らしきものも置かれているが、ミミズ文字が読めるはずもなくあっさりと放置を決め込む。

服に手をあててみるが、濡れた形跡さえない。

「魔法つてやつかな。・・・しかし、独り言が多いな」

顎に手を持っていき、考えるポーズ。状況を把握しても、今出来る事といえばたかが知れている。

「二度寝・・そうだ。二度寝だ。やった事ないけどやってみよう」

こういう時は寝てしまうのが一番だ。

首に巻かれた包帯を左手で確認しながら、もう一度ベットに横たわる。

次に起きたら、家のベットでありますように。

そんな事を願いながら目を閉じようとしますが、この部屋に近付く足音にそれは叶わない夢だったため息をついた。そんなささやか

で慎ましい夢も叶えられないらしい。  
流石次元単位の異端者だ。

そんな事を暢気に考えていたら、大きな音をたてて開けられる扉。  
瞬間、赤色が目に飛び込んだ。

「(昨日の物騒な方だ)」

そして後ろには腹グロ。

「(二人いた...)」

表情一つ動かす事なく入り口を見つめていた凜に、赤髪の男は遠慮なくベットまで近付くと、凜の視線に自分のモノを合わせた。

「名前は？」

「(昨日名乗ったけど...) 鈴風凜です」

男の名前をたずねようとし、やめた。

この世界に迷い込んで気が抜けたのか、そこまで興味がわからない。知りたいと思う気持ちが何処かへいつてしまったのか、凜はただ、聞かれる事だけに答えた。

「(力がない眼だな...) リーン...か。手当てはさせたが、まだ痛むか？」

名前の事にはあえてつつこまず、首の包帯を触りながら、

「大丈夫です」

につこりと笑みを浮かべておく。

「そうか。これからの話しをさせてもらうが、後日、リーンにはあるお方。まあ、黙ってても仕方ないか。陛下と会ってもらおう。これからの事や疑問やわからない事があつたらその時陛下に聞いてくれ。」

それまでのリーンの身の安全は俺が保障する」

いいのか悪いのか判断に迷う言葉に、凜は重たい口を開いた。

「いいんですか？ 陛下に会わせちゃっても・・・」

その辺りの階位は地球とかわらないだろうと思うが、ふと思う。そんな人物と異世界人を二人つきりで会わせるわけがない。

沢山の兵に囲まれて尋問されるのだろうかと考え、無意識に胃の辺りを手のひらで押さえつけていた。

「問題ない。陛下は最強だ。あの方には傷一つ負わせられん」

だから心配するな、と豪快に笑う男。フェルに凜は感情の籠っていない瞳を向けた。この世界の最強がわからないのもあるが、殆ど言葉をかわしていない。むしろまったく相手に保護される理由もわからない。

「フェルディナント・ロータス。俺はヒース・ロンド」

すると、突然後ろで様子を伺っていた緑の髪の男。ヒースが自己紹介を始める。

「陛下との謁見は対一で行われる。その理由としては陛下が強いという事。もう一つは人が多いと分散されてしまう場合があるという事。」

分散といっても攻撃が分散されるわけじゃない。

後は：俺はフェルの補佐として君の保護に携わる。接する機会は増えるだろう」

「・・・」

「そっか。そういえば名乗ってなかったな。俺の事はフェルって呼んでくれ。一応騎士をやっている。ヒースは魔法士な」

明るい場所で見るとよくわかる。フェルディナントの人懐っこい笑み。

ヒースも常に笑みを浮かべているが、対照的でつい笑みが漏れた。

「・・・」

「仲・・・いいんですね」

対照的に見えて、お互いが動きやすい位置を取る。



職業の違いかもしれないが、ヒースがフェルディナントの補佐をし易い場所へと立っているように見えた。

「俺たちを見てソレを言ったのは、お前が初めてだよ」

顔を伏せていた為表情を伺う事は出来ないが、暗い声だった。

音はフェルディナントのものだが、響きには翳りがあり、同一人物迷いそうになるが、フェルディナントしかありえない。

「対照的に見えますよね。真っ直ぐと腹グロそうで」

伏せていた顔を上げ、満面の笑みで言い切った言葉に、フェルディナントが吹き出した。

「は・・・は・・・腹グロ！！」  
「・・・・・・・・」

「まさしくその通り！！ コイツ腹黒でさあ。人当たりがいいから誰も気付かないんだぜ。」

初対面でコイツの腹黒についてイテエ！！」

フェルディナントが飛んだように見えた。

ヒースがあげていた片足を下ろしている所を見ると、蹴ったのだろうと思うが、フェルディナントより細いヒースが蹴り飛ばした事に凜は驚いた。

「（魔法つてやつなのかな）」

凜にはよくわからないが。

「足の裏に魔力を纏わせて蹴ったんだよ。この方が余分な力を使わなくて済む」

「省エネですね」

「省エネ？」

「ヒースさんが言った、余分な力を使わない、です」

言葉は通じるが、やはり異世界。言葉の壁はあるらしい。

「ふーん。面白い響きだね」

凜の世界の事に興味がわいたのか、蹴り飛ばしたフェルディナントの事は既に眼中外である。

「フェル。リーンに街を見せてみよう。面白そうだ」

「・・・先に俺に謝れ。流すな。俺じゃなかったら首の骨でも折ってるだろ」

右手を首筋にあて、首を左右に動かす。

その動作から蹴られ慣れている事がわかるのだが、

「（慣れていいの??）」

思わず、心の中で苦笑してしまう。

## はじめまして異世界・2

用意された朝食を食べ終え、凜は改めて部屋の中を見回した。異世界といっても、今の所特別目をひくような珍しいものはない。

ゲームに出てくる宿屋を少し豪華にした、そんな雰囲気だ。

時計、ベット、棚、カーテン。パソコンはないものの、その代わりとばかりに存在を主張する、30cm程の水晶。

これは珍しい。

用途はわからないが。

「それは魔道具だな。市販品で安いけど、結構使える」

「魔道具？」

流石ファンタジー。聞きなれない道具に興味の視線を向けた。しかもこれが市販品で安いというのだ。その事にも驚く。

「離れた場所にいる相手と話せるんだ。ここに紋が彫りこまれているだろ？これと同じものが対の魔道具にも彫られてる」

食後のコーヒーを飲んでいるフェルディナントが説明してくれる。

「便利ですな」

電話みたいなものだと思うが、異世界にそれと似たようなものがあるとは思わず、素直に感嘆の声をあげた。

「これぐらいの大きさだと登録は結構出来るな」

そこまではフェルディナントも把握していないのか、言葉を濁す。

「現在60箇所。その大きさだと100は登録可能だね」

ヒースの方が知っているのか、フェルディナントの言葉に補足をいれる。

性格なのか、それとも魔法士という職業の差なのか。イメージだが、騎士よりは魔法士の方が魔道具に詳しい感じがした。

凜にとってみたら魔法士というモノがよくわからないので、イメージでしかなかったが。

「もっと小さいモノだと一対一の会話も出来るな。小型化がどれ

だけ進んでるか知らないけど」

「.....」

水晶の通信機にあまり興味がないフェルディナントの言葉に、ヒースが無言のままコップを投げつけた。

「つと...」

それをあつさりを受け止め、尚且つ宙に舞った水さえもコップで受け止め、何事もなかったかのように机の上へと置く。

「物は大切に」

「割れないようにしたよ」

「俺の頭が割れるだろ、それ。まったく...」

悪びれないヒースに、フェルディナントがひいた。

やっぱり仲が良い。

それが表に出ていたのか、ヒースは凜に視線を移すと、

「腐れ縁だよ。フェルの面倒みたのは俺だし」

「ん？」

ヒースの言葉に、思わず首を傾げていた。

「流石におむつはかえなかったけどね」

「どうやら、ヒースの方が年上らしい。」

見た目だけでいうならフェルディナントの方が年上でもおかしくないが、見た目に関しては人の事は絶対に言えないので、黙っておく。

その様子で察したのか、ヒースは自身を指差すと、

「22歳。フェルは19歳。リーンは？」

「20歳。もうじき21だけど」

「フェルぐらいかと思ってた」

それはあまりかわらないんじゃないじゃ？

それが、素直に表情に出てしまう。

「そういえばそうだねー」

にこつと、誤魔化すように幼く笑うヒースに、凜は静かにため息をおとした。

昨日見た腹黒の笑みとは明らかに違う笑い顔。

素で呆けたのだろう。

「まあ、二人とも若く見えるよな」

ヒースと凜の会話に割り込むように、フェルディナントがあっさりまとめる。

確かに若く見える。二人とも。だが、フェルディナントが老けているわけではないのだ。決して。

そこで、凜の動きが不自然に止まった。

「（今・・・素で笑った・・・）」

地球ではありえなかつた事。

それが、一日前に会ったばかりの人間相手に笑つたのだ。

驚きというより自身に驚愕を覚え、凜は瞳をギュツと力任せに閉じた。

「リーン？」

心配そうな声の上から降ってくる。

「なんでもないですよ」

それを、隠すように、笑顔で言い切つた。

すっかり冷めたコーヒーをいつきに飲み干すと、凜は自分が使つた食器を片付け始める。

「これ、どこに片付ければいいですか？」

「そのままでもいい。片付けにくるから。（線・・・をひかれたか？）」

「フェル。やっぱり外に行こう。異世界との違いにも興味があるしね。」

リーンはそれでいい？（仕方ないよ。たった一日。しかも名乗つたのはさっきだ。俺たちも様子を伺つてる。お互い様だね）」

フェルディナントとヒースが身に着けている外套の小さな飾りが、

ほのかな光を放つが、二人に視線を向けていなかった凜は気づかなかった。

通信用の魔道具が、水晶だけではないという事に、気づかなかった。

「興味はあるけれど・・・この格好で大丈夫かな？」

異世界の街に興味はあるが、その前に心配事が一つ。

それを尋ねてみると、頭のとっぺんからつま先まで、じいとい二人に見られ居心地の悪さからつい距離をとってしまう。

「俺のマント・・・よかヒースのか」

「そうだね。これを使えば大丈夫だよ」

ヒースは自分の肩にかけてあったマントをとると、それを凜へと手渡す。

淡い緑のマント。翡翠色。

渡されて気づいたのだが、2人ともマントは二枚重ねらしい。フェルディナントよりもヒースのマントといったのは、単にマントの色の差だろう。

ヒースは翡翠色と濃い緑。フェルディナントは赤と黒の二枚重ね。つけ方に悩んでいると、ヒースは自分が渡したマントを受け取り、慣れた手つきで凜の身体に巻き始める。マントというよりは、ローブといった装い。

身長の違いで仕方ないのだろう。身体全身を包むように足元まですっぽりと覆われたマントによって、この世界で目立つ凜の服装は完全に隠された。

「リーンの服は夜まで待つてな。作らせてるから。それに気に入ったのがあつたら買えばいいか」

「夜？」

フェルディナントの言葉に、凜は動きを止めて顔を凝視してしま

「ああ。とりあえず何着か用意させてるから」

当たり前のように言われた言葉に、心底困ってしまう。だからマントで急場を凌ぐようとしていた理由がわかったが、それと服を作るのは別の話だ。

「お金を持っていないので、遠慮したいのですが…」

通貨がどんなモノかは知らないが、日本と同じという事はないだろう。

つまり、今の凜は無一文。

凜の至って真面目な本音に、フェルディナントは笑いながら、

「イーのイーの。衣食住の世話は俺の義務って事で気にするな…って言っても気にしそうだな。

気にするなら、そうだな。異界の料理が食べてみたいから、作ってくれるとありがたいな」

「そうだね。市場で使えそうなものでも買ってこようか。そういえば…リーンは作れる？」

肝心な事が抜けていた事に途中で気づいたヒース。

「大丈夫。作れるよ」

姉の教育方針で、料理の腕はかなりの分類に入る。

備えあれば憂いなし。なんて笑いながら言われたが、まさしくその通りだった。

お返しその1・料理に決定。

材料の不安はあったが、朝食は美味しく食べれたので大丈夫だろう。多分。

はじめまして異世界・3 (前書き)

短めです。



### はじめまして異世界・3

情報交換もどきと食材調達のために街へと出た。

ゲームの街並みを想像していたのだが、どちらかというと日本の朝市といった感じだろうか。道の両脇にこれでもか、という程並んでいる。

凜が想像した通りの建物もあるが、それは武器や魔道具や衣服といった店になっていているらしい。買い手を限定するものは建物。買い手を限定しないもの。つまりはお手軽な値段のモノは市になるらしい。

この世界の単価は、銅貨がカーカ。銀貨がシーマ。金貨がイーマという単位になっている。金額としては1カーカは100円。1シーマ1000円。1イーマ10000円と言った所だろうか。

売られている野菜を見ながら、日本に置き換えて考えてみるが、一文無し状態の凜には今の所関係はなかったりもするのだ。むなしい事実だが。

夕飯の為の材料費にフェルディナントから小袋に入った10イーマを渡されたが、迷わず金貨一枚だけを手に取り、残りを返した。流石に一食分に10万程のお金は使いたくない。

「つかっちゃっていいのになあ」

凜の態度が控えめにうつったのだろう。しみじみと呟くフェルディナントの言葉をさらっと流す。

「自分で稼いでないのに贅沢なんかしたくないよ」

節約生活が基本になる異世界で、今から贅沢を身に着けてどうしろというのか。

「それよりも、どういう料理が好きなの？」

凜は料理の味付けにはうるさいが、好き嫌いはない。味付けに煩

いといつても食べれないわけじゃない。どちらかというに出汁がきいた味の方が好みだが、そうじゃなくても食べれてしまう。

「俺もヒースも嫌いなモノはナイ・・・な」

「そうだね。ゲテモノ料理以外は食べれるね」

まったくもって参考にならない好み。

しかもゲテモノ？と凜の瞳に戸惑いの色が浮かぶと、ヒースは辺りを見回し、とある店を指差した。

「あれ」

「あれ？」

ヒースの言った場所へと視線を向ければ、吊り下げられる蚕のような物体。

しかもサイズは規格外の2リットルのボトルサイズ×2個。

「後、あーいう感じ？」

そこにフェルディナントも付け足す。

「・・・」

蚕もどきから視線を移し、凜は静かに首を横へと振る。

スライムみたいな物体が縄でぐるぐる巻きにされて吊り下げられている。色は蛍光ピンク。

「珍味らしいよ」

フェルディナントの何が言いたいかわからない言葉をつけるが、凜は何とも言いがたい表情を浮かべると、両手を交差させ、顔の前でバツ印を作った。

「あんなの、色からして受け付けないよ」

食卓に並ぶ事も正直勘弁してほしい食材。

凜としては、アレを食材と呼ぶのはかなり抵抗があるのだが、この世界では食材扱いだから仕方ない。きっと、ナマコのようなものなのだろう。

無理やり納得させると、試食をさせてもらいながら市場をまわる。食材の味と、調味料の確認。売られている料理。

その場で調理している場合は足を止め、その光景をしっかりと記

憶した。

器具の使い方と調味料の使う順番を覚え、それを味見してイメージを固める。

「どんな料理を作るんだ？」

凜の様子を見ていたフェルディナントが、幾分声を弾ませ凜に尋ねるが、

「美味しいかはわかりませんよ」

しっかりと釘をさしておく。

過度な期待は困るのだ。

りんごの形をしたキャベツに、疑問を抱かずにはいられない。

「大丈夫大丈夫。じゃ、ドンドン買おつか・・・リン？」

てつきり食材を見ているのかと思ったら、凜の視線は少し離れた店へと注がれていた。

「興味がある？」

いつの間にか買ったのか、手に紙袋を持ったヒースが凜の背後に立つ。

背後に立たれると落ち着かない気分させられるが、興味があるので凜は素直に頷いた。

「染め粉だよ」

「染め粉？」

「髪の色をね、変えたりするんだ」

「そうなんだ。確かに色々いますよね」

原色系は黒と白を除いて全部あったような気がする。

「実際ある髪の色を元に染め粉を作ってあるんだけどね」

「・・・いるんですか」

流石異世界。

悔りがたし。

「染めたい？」

フェルディナントの言葉に、凧はいいえ、と短く言葉を返した。

「（染め粉があるのか・・・うん。安心した）」

そう思ったのは、やっぱり秘密。

そして何かがあると感じいた二人だったが、それを問うような事はしなかった。

「・・・リン。買うのはどんどん籠にいれてけよ。荷物持ちは任せとけ」

沈黙を嫌ってか、フェルディナントは持っていた籠を上へと上げる。

取りあえず料理を作ってもらってそれを食べる。  
今はそれでいいのだ。

凧に金貨を渡した割りに、フェルディナントも目についた物をドンドンと買い込み、結局金貨はフェルディナントとヒースの懐から出ていく事になった。

活躍の場を失って、凧のズボンのポケットにおさまっている小さな袋。

使われる事のないままあふれそうな食材を押し込め、かなり重くなったはずの籠をフェルディナントは片手で軽く持ち上げると、  
「リン。俺はこれを置いてくるよ。ヒースは籠買ってきて」

どうやらまだ買い物続ける気らしいフェルディナントの言葉に、凧は待ったとばかりに歩き出すヒースのマントを掴んだ。

「まだ買つんですか??」

籠は、スーパールのプラスチックの籠ぐらいの大きさはある。それがいっぱいなのだ。

「後は果実な。やっぱり食後の甘いものは別腹だろー」

豪快に笑い、ここで待っててな、と凜の頭を撫でるフェルディナントと、何故かフェルディナントに倣うヒース。

凜の頭を撫でると、迷子にならないように、と言葉を残して走っていく。

「頭は撫でなくていいのに」

多分、弟が出来たような気分なのだろう。

根本的から間違っている、なんて指摘はしないけど。

「まあ、ここで待ってるか」

壁際までいくと、そこで一息つきながら市で賑わっている人々の声を聞いていた。

異世界といっても、市の賑やかさは変わらない。

「賑やかだなあ」

二人がいないと、途端に静かになる凜の世界。

これに慣れると厄介だな、なんて自分に釘をさす事も忘れない。

「そういえば…籠は何処に置きにいったんだろう」

呑気にそんな事を考えていたら、突然肩を掴まれたような衝撃が走る。

「!?!」

凜の背後は壁。

誰かに掴まれるはずがないのだが、そのまま後ろへと引き摺りこまれるように身体が壁へとめり込んでいく。

流石ファンタジー。

身体全身を打つような衝撃が走っていたが、凜の脳裏に浮かんだ言葉はそれだった。

## はじめまして異世界・4

衝撃がはしった。

体験した事のない痛みが、肩から全身へと突き抜ける。

あまりの痛み息が詰まり、呼吸もままならない。

ヒュツと、嫌な音が口から漏れた。

「誰？」

目が霞み、視界がぼやける。

地面に倒れた凜の身体は悲鳴をあげ、指先一つ動かす事が出来ない。

だが、凜はそれらを全て覆い隠すように、ハッキリとした声で尋ねた。

誰？と。

フードを深く被った、凜をここへ連れ込んだであろう人物は上から見下ろしたまま、

「 に、大切にされているんだな」

まだ幼さの残る声で、忌々しげに吐き捨てる。

声からして男。

凜は聞き取れなかった言葉に疑問を感じながら、男を見上げる。

相変わらず身体は痛みで悲鳴を上げているが、凜は精神でそれらを

押さえつけ、身体を起こした。

だが、男の口から発せられた言葉はこの上なく物騒な言葉。

「命が惜しかったら、あの罪人たちから離れろ」

一方的に言葉が叩きつけられ、凜はこれでもかという程眉間に皺を寄せた。

凜自身、感情を表に出すタイプではない。

その凜がはつきりと、不快という表情を露にし、自分とさほど身長が変わらない男を見つめた。

「あいつ等は罪人だ。罪人は…あいつ等は…死が相応しい」  
そうでなければならぬと、男は言う。

俺たち2人を見て、それを言ったのはお前が初めてだよ。

その時、フェルディナントの言葉が凜の脳裏を過ぎる。

「……………」

無意識に、拳を握り締めていた。

出会ってたったの一日。

喉の怪我はフェルディナントがつけたもので、ヒールの言葉は性格が悪かった。だが、ここまで一方的に言葉を吐き捨てる事もしなかった。

凜が逃げれる、面倒だけど良いか、と思える距離を保ってくれたのだ。この世界に入り込んだ異分子を、陛下の命だけど保護という面倒な役割を果たそうとしてくれているのだ。

何かを感じる事を面倒だと思っていた心に、少し、熱が灯る。

「これが……原因か」

思わず、声に出していた。

時間が経てば経つほど、わかる事は増えていく。

この国の陛下に謁見を許されれば尚更だろう。

フェルディナントとヒースの2人に対しても、例外ではない。

ギリツと奥歯をかみ締めたい衝動に駆られるが、凜は地球でしていたようにそれらを全て奥へと押し込めると、

「俺は君の事情なんて知らないけどさ。」

一方的に受けた暴力に対しては反抗心が疼くよね」

極めて軽く、笑みを浮かべた。

「そんな君の言う事を聞くぐらいなら、俺はあの2人を選ぶね。」

一方的に叩き付けたら自分は痛くもないし、楽だろうけどさ……



生憎、俺はそれを踏みにじるのが嫌いではないんだ」

その表情が形作るのは笑みだったが、その目の奥は決して笑ってはいなかった。底冷えするような冷たさを宿し、目の前の男に笑いかける。

事実を知った後は、それは当人同士の問題だろ。と、飽きれるのだが、それは後の話し。

「なっ！ あいつ等は悪だ！！ 悪に与するならお前も敵だ！！！」  
驚愕に目を見開き、喚き散らす男に、凜はわかりやすく肩を竦めてみせた。

頭に血が上って我を忘れた男。剣を振りかざし、一直線に凜に向かって殺す気で向かってくる。

距離は一瞬。

凜には身を守るモノは何もない。

男の剣は間違いなく、凜を真っ二つに出来るはずだった。

「!?!」

「ごめんね。こんな優男に見えるけどさ・・・護身術はそれなりなんだよね」

相手を侮り、我を忘れ、わかりやすく一直線に向かってきてくれる男への対処は、簡単だった。

振り下ろされるよりも一瞬早く、斜め前へと足を踏み出し男の真

横へと身体を潜り込ませる。上から振り下ろされた剣はその勢いのまま地面に弾かれ、衝撃に男がうめき声をあげた。

剣を落とし、無防備な男の身体へと容赦なく一撃を放つ。

凜に力はない。

女性よりは遥かにあつても、やはり男性には劣るのだ。

それを補う為に、どんな状況でも急所をつけるように訓練した。

一撃で相手沈められるように。

「ツツツ!!!」

声にならない声をあげ、男は意識を手放した。

意識を失った身体は重力に逆らう事なく下へと向かうが、それを受け止めゆつくりと地面に横たわらせる。

フードから覗く男の顔は、やはり幼いものだった。

「さて・・・と」

年下を遠慮なくぶちのめした、という事実には罪悪感がないわけではない。

だが、それよりも何よりも状況確認が必要だと辺りを見回すが、明らかに街中ではない異空間。

「・・・・・・・・・・」

男が目覚める以外、どうしようもないらしい。それだけは解かる。固い地面の上に寝転がらせておくのもどうかと思い、凜は腰を下ろした自分の膝へと男の頭をのせた。

口ではあんなふうに言ったが、実際凜の怒りは持続しない。

怒る事に慣れていないのだ。

「中学生ぐらいかな」

暇つぶしに男の頭を撫でてみた。

「黄緑の髪。流石は異世界。染めたのより綺麗だね」

自然な、染めていない手触り。

相変わらず左肩は痛みを訴えてはいるが、奥に押し込め表には出さずに隠しておく。

「目は何色なのかなあ」

凜を襲った相手だが、何故かすっかりと警戒する心がそぎ落とされ、凜は可愛がるように頭を撫で続けた。

どれぐらい経ったのだろうか。

膝の上で、小さく身じろぐ男。

「……ん？」

男が薄く開けた目を上へと向けると、凜の顔。

その状況の意味がわからず、男は啞然と呟いた。

「な……んで？」

立ち上がるうと左手で押さえたものは凜の膝。何を思ったのか勢いよく掴んだ手を後ろへと引っ込め、瞬間バランスを崩し、頭が凜の膝からずり落ちた。

ゴンッ。と痛そうな音が辺りに響き渡る。

「お……お……女ッッ！！！」

そんな痛みは気にならないのか、顔を真っ赤に染め上げ、驚きに見開かれた瞳を凜へと向けたまま男は叫んだのだった。

## はじめまして異世界・5

顔を真っ赤にして叫ぶ黄緑の色を持つ男に、凜はハッキリと分かりやすく溜息を落としてみせた。

「そうだね。生物学上はね。それが、何か関係があった？」

小さい頃から性別の括りは正直、好きではなかった。

凜自身がこうだったからなのか、女の子からやっかまれる事はなかったのだが、逆に男からやっかまれたのだ。

その時の定番の台詞は「女のくせに」。

自分に向けられる性別の関係する言葉に嫌悪感を抱き始めたのは、そういった事の積み重ねなのかもしれない。

「でも、膝だけでよく分かったね。鍛えてたのに・・・脂肪がついたかな」

この世界に来てからたった1日、という認識は凜だけのものであって、ひよっとしたら時空に数日、数週間という単位でさ迷っていたのかと不安になる。

「ああ・・・そっか。触りなれてるのかな」

流石は異世界。

最近定番になった言葉を音には出さずに呟きながら納得した凜に、男はものすごい勢いで首を横へと振り始めた。

「慣れてない！！　ただ・・・わかるだろ！？　男よか柔らかいし！！」

死ぬべきだ、なんて言っていた男は何処にいったのか。

うるたえ過ぎて疲れたした男に、凜は追い討ちをかけておく。

「そっち系？」

「!!!! 違う!!!!」

「どつちでもいいよ。オレには関係ないし」

最後の言葉は、からかうというよりも面倒から出た言葉。

追い討ちを掛けた割りに、面倒くさがりな心はやはり健在で、凜はあっさりと匙を投げる。

「キミドリさん。そろそろ帰りたいんだけど？」

この時点で凜には無害な男と認定された通称キミドリ。

「キミドリって・・・俺はアーフィイだ」

何かを諦めたのか、アーフィイと名乗った男は肩をおとし、疲れきった表情で名乗る。

敵だと言い切ったアーフィイは、凜の膝枕と性別ですっかりと敵意と削がれたらしい。

無害、という評価を覆す事なく落ちていた剣を鞘へと納め背負う。今だけかもしれないが。

「そう。オレはリーン」

アーフィイの名を聞いたので、凜も一応名乗っておく。

本名ではないが、この世界では凜の名前は発音し難いみたいなので、これで問題ないだろう。

「リーンか。変な奴だな」

脅した相手を前に、逃げる所か膝を貸す。

そんなアーフィイの評価を、凜はあっさりと否定した。

「逃げなかったんじゃないかって、逃げられなかったんだよ。」

この国に来たばかりで、魔法とか知らないし。こんな場所に連れてこられても帰れないんだよね」

暗闇が支配する異質な空間。

不思議と怖いという感覚はないものの、凜には出口がわからない。

「魔法を知らない？」

「うん。知らないけど」

魔法を知らないといった時のアーフィイの驚愕には気付かなかった。

この世界に居ながら魔法を知らないというのがどういう意味を持つのか。

魔法を扱える存在は小数であつても、魔法を知らない存在はいないという事。

生まれながらに魔法の恩恵を受けているこの世界。  
空気と同じぐらい当たり前の存在。

それを、凜は知らない。

「……………」

何かを思案するようにアーフィイは口を嚙むと、散漫な仕草で凜のフードを指差し、

「それ、アイツ等のだろ？ アイツ等なら、それで辿ってこれる」  
顔を歪め、言葉を吐き出す。

心底忌々しげに。

「……アーフィイ。そういえばさ、オレも敵なんだよね」

徐に、凜が言葉を紡いだ。

「……………」

何が言いたんだ？と視線を向けてくるアーフィイに、笑みを返す。  
「面倒だから、もう逢いたくないって事だよ」

ヒースとフェルディナントに向けられる敵意。

それについては良い気分はしないが、事情を知らないので凜自身はなんとも言えないのが本音。

かといって、まだあの2人から離れる気はしない。  
そしてアーフィイに対しても、敵意を向けたとは思わないのだ。

つまり……。

逢わないのが一番。

「面倒だし、疲れるからね」

ヒースのマントを握り締め、アーフィイから離れる為に歩き出す。  
マントで居所がわかるなら、ある意味誘拐犯のアーフィイの近く  
にいるべきではないし、鉢合わせる事は避けたい。

凜の考えを知ってか知らずか、アーフィイは凜を止めなかった。

そして、凜も止まらなかった。

姿が見えなくなるまで。

その存在を感じなくなるまで。

何処まで続くかはわからない闇を歩き続ける。



## はじめまして異世界・6

姿が見えなくなるまで歩こう。

そう思って歩いていたら矢先、落とし穴に落ちたような浮遊感が凜の身体を包み込む。

落ちる、というよりは宙に漂う、といった感じだったが。

どれぐらい落ちたのか。

凜が歩いていた地面だったものは既に確認出来ない程遙か遠くの高い場所。

アーフィイから離れる、という目的はあっさりと達成は出来たが、まだ底は見えず、未だに漂い続けている。

瞬間、マントに熱が籠ったような気がした。

「・・・ヒース??」

凜の身体を包み込むヒースのマントが、熱を帯びたまま凜の身体を優しく包み込む。

これで居場所がわかる、というのは実は怖い事だと思っただが、今は助けの目印になるという事で、取り合えずそれには目を瞑っておく。

トンツと、地面らしき底に足が着く。

そして、目前には暗闇に浮かぶ白。

人の手が、真っ暗の中に浮かんでいた。

「（・・・手だけって、ちょっと不気味だね）」

その手がマントを引っ張っていなかったら、ヒースだとは思わなかっただろう。

日本だったら間違いなく逃げるんだろうなどと、そんな事を考えながら凜はその手を取った。

瞬間、強く握り返される。

凜よりも硬く、骨ばった手。凜の手も余計な脂肪が付いているわけではないが、握るとやっぱり違つと実感する。

「「リーン」」

余りの眩しさに目を開けていられず、固く閉ざしていると、気遣うような声が耳に届いた。フェルディナントとヒースの声。

この世界で、始めに会った人物たち。

やはり、お互いがまだ探り合うような関係だが、2人に頼らなくてはたどり着いてしまったこの世界で生きていける気がしない。

「（まだ・・・ね）」

知識も常識も圧倒的に足りない今だからこそ、慎重に。

「すごいね。これって魔法？」

「ああ。けど、どうしてこんな穴に落ちたんだ??」

フェルディナントの疑問の声に、

「穴??」

素直に首を傾げた。

穴に落ちた感覚はないのだ。

「時空の歪みだよ・・・誰かに、会わなかった？」

別の存在を感じ取っているヒースに、凜は首を横に振ると、

「真っ暗で、よくわからなかったよ」

平然と、嘘をついた。



「まー。合流出来て良かったよ。果実はヒースが買ったし・・・帰ってリーンの飯でも食べるか」

始めに肩の力を抜いたフェルディナントが、その場の空気を吹き飛ばすように、何事もなかったかのように話し始めた。

気まずい雰囲気はこれで終わり。

フェルディナントの眼の奥に宿る光が、そう語っている。

この中で一番年少である存在に話題を変えられ、ヒースと凜は互いに顔を見合わせ肩を竦めた。

どうも、フェルディナントには世話になりっ放しだ。

その恩返し、というわけではないのだが、その日の夕食はハンバーク（・・・らしきもの）。

聞いたり見たりして判明したのだが、この世界の料理は基本、シンプルなのだ。

調味料は塩と胡椒が主流。

後は、ハーブが少し。

食材は切って焼くが主な食べ方。

「王様とか、そういう人たちは何を食べてるの？」

ハンバーグをこねながら聞いてみると、

「希少価値のある肉とか魚とか調味料とか。後野菜だな」

フェルディナントからシンプルな返答をもらう。

「この世界の事を知っていけばわかると思っただけど、この世界で人がこうして生活するようになったのは、ここ300年程の話しな

んだよ。まだ発展途上っていう所かな」

今だったら儲かるよ、というヒースの何かを含んだ笑みに、そうだね　と軽く返事を返しておく。

300年でこれだけ文明が栄えたのは早いのか遅いのか。

「（今度はソース作りに挑戦しよう。作り方は・・・うん。なんとなく）」

あやふやなものがあるが、中濃ソースやウスターソース。その他色々の調味料は必須だろう。

本当に商売が始められそうだなと、マヨネーズに感激するフェルディナントを横目で見ながら、そんな事を思った。

初めての料理はハンバーグらしきもの。

概ね好評。

けれど、一番はマヨネーズだった・・・

## はじめまして異世界・6（後書き）

相変わらず糖度は少なめ、というよりまったくなくない状態です。

サブタイトルのはじめまして異世界はこれで終了です。

次回からはサブタイトル変更と時間がもう少し進むかと思えます。

幕間くフェルディナントのとある1日。(前書き)

フェル視点のお話です。

小話で、本編には関係ないお話になっております。



## 幕間／フェルディナントのとある1日。

初めての異世界の料理。それはハンバーグというものだった。

この世界の料理はシンプルで、リーンが作ったように手をかけて料理をする人間は見た事がない。

何処かの国では少しずつ料理の幅を広げてはいるらしいが、この国ではまだそこまで手をつけられてはいないのだ。

この国の風習、というものが、関係しているのだけれど。

そんな中、手の込んだ料理は美味しいというのを、初めて知った。

焼いて塩胡椒で食べるのも勿論好きだが、リーンの料理に慣れると辛いかもれない、なんて事も考えたりする。

ハンバーグを作った後も、異世界の料理を振舞ってくれた。レシピという料理本も作成して、誰でも作れるようにしてくれているらしい。が、やっぱりリーンの作った料理の印象が強すぎて、他の誰かが作ったものは劣る気がするのだ。

だからリーンの料理に慣れると、美味いけど、辛い。

既にガツチリと俺の胃袋を掴んで離さないリーンの料理だったが、その中でも更に俺の心を捉えて離さないもの　マヨネーズ。

これも作り方は至ってシンプル。

でも、初めての味。

これは陛下に報告するべきか・・・？

いや、リーン関係の報告書は、ヒースが作ってるから俺は別に・

・作成する必要はないのだ。

だけど、態々ヒースがそんな事を自ら買って出るのは珍しい。やれば出来るのだが、基本、ヒースは細々としたものが好きじゃない。

あんな細かい魔方陣を平気で作成する人間が、書類の細かいのは好きじゃない、なんていうのだから意味がわからないが。

そんなヒースが、態々書類作成を自分の意思で行っているのだ。気に入ったんだろうなあ。リーンの事を。

年上だけど、俺も弟が出来たみたいで嬉しいんだけどな。

お互い嘘はつくし。

隠し事はするし。

本音は中々言わないし。

今は腹の探りあい状態なので、ほぼ、言わないが。

それでも、話してて、面白い。

そういうタイプは、ヒースで慣れてるから気にならないし。

そついや、ヒースはあれを、なんて報告したんだろうな。

市でリーンを一人にし、姿を消した件。

リーンは言わなかったが、アレは、連れ去られた。

それぐらいは言われなくてもわかる。

あの時、リーンがいなくなったってというのは、さほど問題じゃない。

ヒースのマントを身につけていたし、それだけで身の安全は保障されたはずだった。のに、それを打ち破る濃い闇の気配。

リーンを包み込むように、その存在を主張していた。

けれど、それにリーンは気付かなかった。

本当は気付けるはずなのに、自分に害がないから気付かないのか  
どうなのか。

寧ろリーンは魔法の勉強をした方がいいんだろうな。本当に。

そうすれば、今の状態を自分で制御出来るはず、なんだけど、  
人が気にしていないものをどうやって制御するのかどうか。

魔法に疎い俺にはわからん。

多分ヒースがなんとかするだろ。

トントン。

と、思考を中断するノックの音。

リーンの気配に、珍しいなと思う。

大体、俺が書齋に籠ってる時は仕事だ。書類整理なんかをやった  
りしてる。

それを知ってるからリーンはお茶以外では近づかないけれど・・・  
お茶の時間にはまだ早いな。

「フェル・・・今いい？」

控えめな声色。

「どうぞ」

どうしたんだろうと思いなながら扉に向かって言うと、控えめに扉が開かれ、その隙間からリーンが顔を出す。

「どうした？」

声に出して聞いてみる。

「マヨネーズを配ろうかと思うんだけど、材料を使ってもいい？」

配るのか。

まあ、好評だったし。

家族に食べさせたい、なんていう事を言うてから、それでだろうとは思うけど、態々確認なんかしなくてもいいのにな。

面倒くさがりやなのに、律儀に確認しにきたリーンに俺は笑みを返した。

「アレは美味かったしな。配りたいって頼まれたんだろ？」

材料は気にせず使って配って、そのついでに俺にもサラダを作ってくれたら嬉しいな」

本当に美味かったから、身内に配りたいっていう気持ちは分かる。今この屋敷にはいないが、俺も世話になった人たちだし、それに惜しむつもりもない。

どんどん配っていいぞ。と、笑って話した。

「ありがとう。サラダは今夜ね。」

後、お礼つてわけじゃないけど、おやつを作ったから・・・一段落ついたら食べてみる？」

「今食べる」

即答した。

丁度区切りもついたし、書類作成所か別の事を色々考えていたし、ここで糖分を取るのは大歓迎だ。

「仕事は大丈夫？」

心配そうな眼差し。

「ああ。殆ど終わってるよ。これからまとめだから、今の内に糖分補給って事で」

その方が効率もあがるだろうし。

音もなく俺の隣を歩くリーンと話しながら、その細い肩をじいっと見ていた。

随分小さくて細い。

もう少し筋肉つけないとな。これじゃあ好きな女が出来た時困るだろ。

この時の俺は、リーンの真実には気付かず、本気でこんな事を考えていた。

本当に、弟が出来たみたいで嬉しかったのだ。

ちなみに、今日のおやつはホットケーキというやつらしい。  
上にのっかったバターとメープルシロップという魅惑の甘味一式  
を口にしながら、俺は感動に打ち震えていた。  
やっぱり全てが初めての味。

「俺・・リーンに餌付けされてるよなあ」

なんて笑ったら、リーンも笑った。

リーンが女の子だったら、絶対嫁にしたいよなあ、なんて冗談交  
じりに言葉を紡いだら、やっぱりリーンは笑ってた。

「フェルは胃袋に弱いんだね」

って言われたけど、否定は出来ないから黙っておく。

ホント美味いんだよ。

慣れちゃまずいけど、美味くてどうしようもないしなあ・・・

と、ホットケーキを食べなかつたヒースに愚痴ってたら杖が飛ん  
できた。

相変わらず手の早いヤツだ。

ああ。そっぴやヒースも弟みたいだよな。

リーンとヒースってタイプが似てるし。

そんな事を考えていたら、今度は樽が飛んできた。

………そろそろ仕事に戻るか。

次は何が飛んでくるかわからないし。

遠くで蠢く巨大な何かを視界の隅におさめながら、俺は慣れた動作であっさりと戦線離脱を果たした。

まったく、手のかかる弟が多いよなあ……。

この世界にたどり着いてから2週間。

少しは生活にも慣れてきた。

相変わらずフェルディナントの下で保護され、陛下との謁見は実現されない状態。だが、この世界で暮らす為の知識を得る為に皆から助けられ、最近では許可証も発行された。

制限はあるものの、王宮の一部を歩ける許可証。

ちなみに、フェルディナントの屋敷は王宮の敷地内にある。フェルディナントに限らず、臣下の一部は広大な王宮の庭の外れの方に屋敷を持っていた。

その為、一人で街に出る事は出来ないが、王宮の敷地内の一部を歩ける権利を得た。とはいっても、フェルディナントとヒースが裏で動いたらしい事だけはわかる。

首に掛かる透明の鉱石で出来ているカード型の許可証を光に翳し、凜は自身を戒めた。当たり前だが、問題は起こさない。

それを念頭においた上で、凜は屋敷と図書館の往復にしか許可証を使っていなかった。

いつものように屋敷から図書館へ向かう道のり。

途中にある闘技場のような広い空間。図書館へ行くのにはここが近道になるので、凜はこのルートを使用しているが、観覧席の上にある通路で足を止め、すり鉢状の底になっている闘技場の中心部に視線を落とした。



そこには、昨日までとは違う面々が揃っている。

見慣れた風景といえば、剣や槍を振るう兵士や騎士らしき人物たち。だが今日は、ローブらしきものを身に纏い、騎士や兵士とは明らかに違う空気を持つ存在たちが何かをしている。

「ヒースだ・・・」

独特の空気を纏う集団の中心部にいる人間。凜にとっては馴染み深い色彩を持つ存在。

王宮内で沢山の人たちを見ていたが、ヒースやフェルディナントの色彩はやはり珍しい。辞書と本を両手に抱え、この世界の知識を吸収する過程で何故珍しいか、という理由はわかってはいる。が、やはり圧倒的な数の差を見ると実感するのだ。

だからといって、それで凜の何かがわかるわけではない。フェルディナントには最近餌付けしている気がするし、ヒースに至っては凜が答えられないようなこの世界の質問をして、凜の勉強の後押しをしているのだ。宿題という名の調べ物を強制的に。

出会った当初から変わらない。相変わらず良い性格である。

「・・・・・・・・」

無言のままヒースを見つめるが、首を振り図書館へと向かって歩き出す。

あの集団のやっている事に、興味が無いわけではなかった。

寧ろ、凜が今一番覚えたいのはアレ。この世界に来てから翻弄された魔法という力。それについて面白くないという感情が大半だったが、興味がそれを上回る。

「（・・・・・・・・魔法の概念がわからないから、何をしてるかわからない）」

「

興味はあるが、感覚がわからない。

魔力を具現させ、変換する。それが魔法と呼ばれるモノらしい。が、凜には魔力自体がわからない。幾ら知識を蓄えたとしても、魔力というモノがわからない凜にはそれを引き出す事が出来ないのだ。

図書館に向かって歩いていて足を止めた。

屋敷に戻って聞いてこようかな、なんて事をふと思う。

2週間の間に、フェルディナントの屋敷の使用人とは仲良くなった。

女の子は可愛いし、この世界では男性とも仲良くなれた。日本では女の子に囲まれる生活には慣れてはいたが、それと反比例するかのよう男性からは嫌われまくっていたのだ。

理由としては、好きな子が凜のファンクラブに入ったとか。その程度の理由。

異様な程モテていたのだが、その代わりに、気を許せる存在は身内を除いて一人しか居ない。

表面上では笑顔で接しながら、その奥では何処までも冷めていた。

細めた瞳を閉じると、凜は軽く頭を振った。

暗い思考。

常に自分と共にあるモノ。

何処か一線を引く、という根底に植えつけられた感情は当たり前のように、凧の中に存在するが、今はそれを表に出して良い時期ではない。

ほんの少し面倒だと思っ心を押しのけ、日本にいる一握りの大切な人たちを思い出す。

きっと、心配している。

姉はきっと、王道トリップね！なんてにんまり顔で言いそうだが、友人はそうもいかないだろう。

凧と似ているといえば似ている友人。

女性なのに、男の格好をすれば美青年に見えてしまうのだ。

凧と同様、ファンクラブがある程度には男前。

性格は凧とは違い、基本女の子。

2週間前に別れた友人を思い出し、珍しく感傷に浸る凧を、演習中の輪の中心部にいたヒースが眺めていた。

遠見の魔法で、凧の表情の細部に渡って確認する事が出来る。その凧の表情は、ヒースが初めて見るものだった。

「……まあ、当たり前だよね」

見ず知らずの世界に来てしまった上に、帰り方がわからない。しかも、会うと言っていた陛下との謁見は未定。日取りは陛下が最善の日を選ぶと、ヒースたちは知っている。ヒースが信じられるのは、陛下自身を知っているからに他ならぬい。

だが凜は？

知るわけがない。  
会った事がないのだから。

「ヒース様」

後ろから聞こえた声。

「どうしたの？ 石の精製は出来た？

出来たなら次の段階で・・・そうだな。魔力付加をつけてみようか？」

「!？」

満面の笑みで口を挟む間も与えられず言われた言葉に、ヒースを呼んだ男は表情を蒼白へとかえ震え上がった。かに見えた。

「そりゃないっすよ。自分の魔力を結晶化させるだけでも大変なんすよ？」

ヒース様は簡単にやっちゃうっすけどね」

「それじゃあ、何？」

笑みを崩さずに問う。

「さつきから足を止めてるあの人はフェルディナント様が保護してる人つすよね？」

興味がありそうつすよ。近くで見学してもらったらどうつすか？」  
「……………（そういえば、フェルの屋敷の衛兵とは仲が良かったか）」

緘口令はひかれてはいない。

案の定衛兵経由で凜の事を知ったとは思うが、決断が難しい。招けば、確実に接点が増えるのだ。

「あの人が歩いていると目立つんすよね！。

あの容姿ですし。ヒース様と一緒に居て美形だなあ、なんて思ったりしないんすかね？」

許可証を発行した時点である程度予想はしていたが、それを遥かに上回る事が今の会話から伺える。

「（茶色の色彩だから油断してたな）」  
一般的な色。

魔力も高くない、市民の大多数がその色を持って生まれる。

悩むが、凜の眼に浮かぶ興味の色。

ヒースは何処か観念したように、魔法を発動させた。

「……リーン、良かったら、こっちにおいで」

右手の親指を人差し指をこすり合わせ、魔力を具現させると同時にそれを変換する。

「ああ・・・魔法か。どういう魔法があるんだろ。やっぱり興味があるな」

突然脳裏に響いたヒースの声。

あんな場所に行っていていいのかという迷いはあるが、折角の言葉を断るのは勿体無い。

「ちょっと待ってて」

行くと意思表示をすると、階段をリズム良く下りる。観客席の一番下の通路につくとそのまま手摺に手を置き、あっさりと飛び降りた。

高さは3m程度。この世界では1mの事を1ミウというらしい。

「リーン」

何故か怖い笑みを浮かべるヒースが手招きをしてくるが、凜はヒースの表情に怯む事なく笑みを返しておく。

それに、ヒースではなく、ヒースの近くにいた男の顔色が変わる。

「（・・・うわっすね。マジで。でもちょっと興味がでてきたっす）」

マイペースに近づいてくる凜を視界に捕らえ、男は呟く。

その瞳に宿る光は興味。

今までとは違った意味を含んだ眼差しを、男は凛へと向けていた。

怖い笑みを浮かべたヒースと、興味深げに凜を見つめる男。

ヒースの額に薄っすらと青筋が浮かんでいるような気がするが、凜は気にせずに自分のペースで歩いてヒースの前へと立つ。

「訓練中みたいだけど、大丈夫？」

「大丈夫じゃなければ呼ばないけどね。それよりもリーンにはアレが見えなかった？」

ヒースが指差すのは階段。

「見えた。あそこにあるんだ。今度からは気をつけるね」

軽口をたたく凜に、この場にいる全員の視線が集中するが、本人は気にせずに会話を進めていく。

「・・・まあ、いいけど。テノ、リーンに基礎を教えといて。俺は結晶化の方を教えるから」

「はい？」

突然言われた言葉に、テノの口からは間抜けな声が漏れた。

「リーン。テノはこうみえて魔法師団団長なんだ。大体の事は教えられると思うから、沢山質問してやって」

肝心のテノの了承を得ないまま、言う事だけを言ったらさっさと二人から離れていく。

「・・・」

「大丈夫ですか？」

無言のテノに、思わず聞いていた。



「あー。うん。大丈夫っすよー。ヒーソ様の笑顔は強烈っすから逆らえせん」

「（やつぱ笑顔は怖いんだ・・・）それじゃあお言葉に甘えさせてもらって・・・オレはリーソって言います。魔法っていうもの自体わかってないので、その辺りを教えてくれると嬉しいです」

凜も笑顔を絶やさないが、テノに対してはあまり効果がないかな、なんて事を考えながらも癖になってしまった笑顔を浮かべ、頭を下げる。

「頭は下げなくていいっすよ。俺の事はテノって呼んで下さいっす。身分はまあ、この団長なんかをやらせてもらってるっすが……それよりも珍しいっすねー」

魔法の基礎を知らないなんて。

だが、それを口には出す事はしなかった。

凜を頼まれるという事はある程度信頼されているという事。

魔法自体がよくわからないなんていうありえない事でも、テノは疑問は口にせず、産まれながらに備わっている知識を言葉へと変える。

「魔法ってのは簡単に言うっすね。魔力を具現、変換、放つの三工程からなるんすよ」

「魔力の具現？」

「そーっす。身体の内にある魔力を表に出す事を具現って言うっすね。魔力っていうのはあやふやで形のないモノなんで、具現しただけじゃ意味がないんすよ。そんなあやふやなモノに形を与える為にイメージする事が重要になるっすね。」

呪文がある魔法は手っ取り早いっす。呪文があるモノに関しては既に誰かが開発したもので、それを唱えて放つ条件さえ揃ってれば、呪文によって自動的に具現、変換、放つが行われるっすよ。

素人さんや開発できないタイプの人間は、既存の魔法を使うっすね。簡単なんで」

「具現、変換、放つ・・・が基礎なんだ」

テノの言葉を繰り返して声にしてみる。

言葉だけを聞くと単純だが、実際はそんな簡単なものではないのだらうと思う。

「人には適正があるんで、魔法を使えなかったり、変換出来ない属性があったりするっすよ。

魔法が使えないってのは論外っすが・・・属性の適正については火が得意な人は水が苦手という具合に、正反対の属性は難しいっすね」

「初めに、自分の適性を知る事も大事ですか？」

どうやって知るのかはわからないが、魔法が使えなかったり、使用不可の属性の魔法をおうと頑張ってみても、使えないまま終わるだけだという事はわかる。

凜は自分の手に視線を落とすと、次にテノを見つめた。

「適正は・・・ヒース様が教えてって言ったんで、魔法は使えるっすよ。あの人ぐらいになるとわかるんで。まあ、魔法を使える適正は4・500人に一人っすかね。今はもっと減ってるっすが、それはまた今度」

人懐っこい笑みを浮かべ、あっさりと適正がある事を凜へと告げる。

どうしてヒースが魔法を教えて、といえば適正がある事になるのかがわからないが、

とりあえずその言葉を信じる事にした。

そんな凜を見ながらテノは足元に生えている草を少しだけ切ると、凜に腰を下ろすように視線で促す。

「？」

「見てて下さいっす。切れた葉っぱに対して癒しを行う場合はっす

ね。

この右手に魔力を具現させて、それを癒しへと変換させ、対象つまり葉っぱに向かって放つつす」

凜の目の前で説明をしながら、切った葉を癒していく。

「（魔力って具現しただけだと見えにくいんだ）」

テノに言われたから、そこに魔力が具現された気になっているのか、本当に見えているのか判断に迷う。

「（イメージ・・・イメージか）・・・テノさん、右手にこれぐらいの球体を魔力で作れますか？」

手のひらに収まるように指先で丸を書いてテノに伝える。

「作れるっすよー。はい、どーぞ」

凜の頼んだ通りにやってくれたらしい。ヒースが言った通り優秀な人なんだろうなと思うが、今はそれよりも作ってもらった球体へと集中する。

両手で包み込むように触れたり、球体をなぞってみたりと思いつくままに魔力へと触れながら確認していく。

ピタツと、指先に何かが触れる感触。

武道に通じるものがあるのかもしれないと呟きながら、意識してテノの手の上から魔力を受け取る。

「!？」

「さっきヒースが言った結晶化って、やっぱりイメージですよね」

凜は両手で包み込んだテノの魔力だったものを片手に持ち替えると、回転を加えるイメージを脳裏へと浮かべ、親指と人差し指をすりあわせた。

指先でボールを回すように、回転を与えていく。

「ここから更にイメージを具体的なモノへと変えて・・・か」

コインを弾くように人差し指を動かし、魔力を霧散させる。

「ありがとうございます。ヒースに、伝言を頼んでもいいですか？」  
「……………」

テノは不自然に固まっていた表情をそのままに、凜を見つめた。

喉が乾いて言葉が出てこない。

驚き、というより驚愕。

だが、自分がどれだけの事をやったのか理解していない凜は、テノの驚愕には答えずにただ言葉を待っていた。

そんな凜の眼差しを受け、テノはゆっくりと呼吸を繰り返すと、

「どうぞっすー」

いつも通りの表情を浮かべ、間延びした声をいつものように発した。

「図書館に寄ってから帰ります。って、お願いします」  
「お願いしますと同時に頭を下げる。」

その際、テノが何かを思案するような表情を浮かべていたのだが、頭を下げていた凜はそれには気づかず、会った時と同じ笑みを浮かべるテノにしか気づかなかった。

「了解っす。ヒース様には伝えとくんで、行っちゃっていいっすよ」

もう一度軽く頭を下げる凜に手を振りながら、笑みのまま脳を回転させる。

凜の滞在時間は10分程。

ただ、それだけ。

それなのに、テノの手から魔力を受け取り、あっさりとコツを掴んで図書館に向かってしまった。

そんな凜の存在をどうしたものかと、頭を悩ませる。

テノの身分は魔法師団団長。位ではヒースには及ばないものの、この国では上位であり、立場柄情報は入手し易い。

そのテノの耳にさえ入ってこない情報。フェルディナントの屋敷の衛兵の方が詳しい存在。

陛下の側近のみに与えられた命令。

全てを隠そうとしていない所が不気味だが、確実に緘口令のひかれた情報に関わり合いのある人物だと確信していた。

「（リーンか・・・間違いなさそうっすね　　…でもなあ、ヒース様を敵にまわす度胸はないっすよ」

心の中で両手を合わせ、ごめんなさいを呟く。

寧ろ自業自得っす。黄泉路へはあんた等だけで行けばいいっすよ。と、テノは声には出さずに笑うと、いぶかしむ表情さえ浮かべず、悠然と微笑むヒースへと視線を向けた。

「（リーンさんなら、コツを掴んで帰ったっすよ）」

「（そっか。ありがとう）」

「（・・・怖っ）」

素直に礼を述べるヒースは、正直怖い。

流石に最後の本音は心の奥底に嚴重に沈めておくが、ヒースが意味ありげに笑ったのは気のせいであってほしいと、テノは浮かべて

いた笑みを引き攣らせた。

図書館までの道のりを歩きながら、想像力を働かせイメージを積み重ねていく。

ゆっくりと焦らず、使いたいモノを表現出来るように積み重ねたイメージを確固たるものへと変えていく。

「（オレは何を使いたいか）」

属性は聞かなかった。

ヒースに聞けば教えてくれるのかもしれないが、聞かなくても大丈夫という曖昧な、でも自分の中では確かな確信を抱きながら、凛は積み重ねたイメージを一つの言葉で纏め上げる。

テノが言っていた魔法はイメージ。

そのイメージ通りに変換さえ出来てしまえば、魔法の種類は無限へと変わるのだろう。

「オレが最初に使いたい魔法」

纏め上げた言葉とイメージを脳裏へと刻み、凜は図書館で書物を読み漁るが、あくまで本の知識は参考にする程度に留めておく。

本に書かれている魔法に縛られたら、逆にイメージが固定されてしまう。

その辺りは気をつけなきゃいけない事。

自分が使いたい魔法に似たものを参考にしながら、陣を構築していく。

これは書物を読んでわかった事だが、魔法は呪文を唱える場合と、魔方陣で発動させるパターンが存在するらしい。

凜が最初に使いたい魔法に関しては唱えるではなく、陣を構築する事を選んだ。

この世界に来てから、自分の意思以外で、自分の行動が決められてしまう時があった。

気を失ったり、何処かに引きずり込まれたり。

そういうのはもういいや、と思ったのが最初のきっかけ。

やっぱり、こんな状況で仕方ないかもしれないが、面白くはないのだ。

凜が使おうと思った魔法は”無効化”。

それがこんなに役にたつなんて、この時は思ってもいなかった。



自室で宙に陣を描きながらも、凜はその思考をとめる事はなかった。

杖や宝石　魔石や玉と呼ばれる類の石　等、媒介になるモノがあつた方が魔法は使いやすい。

大掛かりな魔法を使うには、長い呪文や魔方陣が必要。

「その都度描くつて手間だよなあ」

様々な書物を読んでみたけれど、大掛かりなもの程手順を省略する事は出来ないらしい。一度描けば、その陣は条件さえ整えば何度でも使用可能らしいが、陣が崩れたら最初からやり直し。場所を変える場合も同じ。

「印刷したい……それかパソコンみたいにコピーして貼り付け出来たらいいのに」

そうすれば便利だよなあ、と呟くと、日本から凜と一緒に移動してきた鞆の中からノートを取り出し、机の上へと広げる。

当たり前だが、この世界では使われていない日本語で文字を書いていく。凜以外の者が見たら、ただの子供の落書きに見えるかもしれない。今は、暗号に見える日本語を好んで活用した。

凜が試してみたいと思つた事が載つた本は、まだ見つけられていない。ひよっとしたらないのかもしれないし、他の誰かが既にやってはいるが、本にはなっていないだけかもしれない。

けれど、今はそんな事は気にせず、自分の試してみたい実験に集中する。

先日、ヒースが教えていた結晶化。それが役にたちそうだと、幾つか作ってみた。何個か作る間にコツが掴めてきたのか、最終的にはどんな形でも作れるようになり、形を変えたものを机の上へと並べた。

イメージとしては、金太郎飴。

結晶の中に分厚い魔方陣を作成し閉じ込める。使う時は切つて使えればいいなと思うが、本当に使えるかどうかはわからない。

本番で使えなかつたら意味がないのだ。

凜は時間を確認した後、実際使えそうかを試し始める。凜自身は初めて試みる事。実験の方法があつてるのかさえわからず、手探り状態で進めていく。

集中力が途切れ始めた頃、アラームの音が鳴り響いた。

鞆の中に入っていたキッチンタイマー。料理を作る際に便利だからと、異世界に来てしまったその日に友人から貰った物。

それがこんな形で役にたつとは思つてもいなかった。

ヒースやフェルデイントには秘密にしたまま、怪しまれないように不確かな実験を積み重ねていく。

無効化以外にも、封じ込める魔法や癒しの魔法も自身の魔力を結晶化したもの。玉ギョクに描いたりもした。が、やはり、その効果には不安が残る。

「やっぱり、そろそろ協力要請が必要かな……」

出来れば内緒にしたい実験内容。

だが、これ以上積み重ねた所でこの不安が払拭される事はないだろう。右手で無造作に髪をかき上げると、いつもは引き出しにしまいい込んでいた玉を、袋の中へとつめておく。

明日、起きたら見せてみよう。  
覚悟して、布団の中へと身体を滑り込ませた。

はずだった。

何故か凜は、真っ白の何も無い空間にぽつんと独りで立っていた。

眠りに落ちる前に感じた布団の柔らかさ。

それは幻だったのかと疑いたくなるが、頭を振りながらその考えを否定する。

これは、夢だ。

夢にはおかしいが、夢でしかない感覚。

「……身体が眠っている感じがする。だから夢のはずだけど」  
真っ白の何も無い空間のはずなのに、違和感を感じる。

何かがある。そんな違和感。

目には映らないが、凜はある一点を見つめた。それこそ穴が開くんじゃないかと思うほど、ジッと、見つめ続けた。

瞬間、空間が揺らぐ。

「……………」

塵気楼のように、そこに見えているはずなのに掴めそうに人の形をした何か。

その何かは段々と色を帯びていき、気がつけば、男が凜の目の前へと立っていた。

白金の髪を無造作に束ね、髪と同じ白金の瞳を凜へと向けたかと思つと、微笑を浮かべた。心底嬉しそうに。

「ここは夢であつて夢でない場所　狭間、と呼ばれる空間です。

凜様さえよければ手伝いをしたくて、この場所に招いてしまいました」

招いた事自体は強制だが、その後の選択は凜に任せるらしい男の言葉。

優しい眼差しを向けたまま、静かに、凜の返答を待っていた。

「オレは知らないのに、どうしてオレの名前を知っていて、凜と発音出来て様付けで呼ぶんだろう？とか、実験をしてた事を知ってるんだろう。夢の中にお邪魔できたんだろうとか、ね。色々疑問はあります。」

凜に向ける眼差しは優しすぎる程優しい男。

名前の事を言われても名乗る気はないのか、やはり口を噤んでいる。

状況から考えれば怪しい。

怪しい存在でしかない男。

それでも凜は、目の前の白金の色を持つ男に対し、警戒心を抱く事が出来ないでいた。アーフィイの時と同じ心理状態。

仮に、目の前の男が突然斬りかかってきたとしても、凜は男に対して警戒も敵意も持てないだろう。

本人にさえわからない感覚。

身に危険が及ぶかもしれないのに、凜はその感覚が不快でも不安でもないのだ。

「だけど……本当にあれで発動するのか、効果がまったくわからないんだ。

自分では出来てるつもりでも、玉として生成した魔力の結晶も不安だし。

それら諸々を手伝ってくれるなら嬉しいです」

凜の言葉に、男は満面の笑みを浮かべた。

手伝える事が嬉しい。そんな笑み。

それでも、一言加える事は忘れない。

「凜様は凜様です」

と、様付けに関しては譲る気はないらしい。

実験が進むにつれ、不便だと凜は手を止めた。

やっぱり、呼ぶ名前が欲しい。

2人っきりの空間で互いに呼びかける事は、それほど難しくはない。お互いがお互いを認識し、一対一だと言う事をわかっているの

だから尚更かもしれない。

だが、男が“凜様”と呼ぶのとは対照的に、凜は男に対して呼べる名前が無いからその都度迷って動きが止まってしまふ。

そして、男はどう思っているか知らないが、凜は男に対し、それ程親しい間柄ではないと思っている。だからこそ、敬称を付けて呼べる名前が欲しい。

「適当に命令して下さい」

凜の戸惑いを承知の上で、男が言った言葉。

「命令つて……初対面の、しかも手伝ってくれてる人をあごで使いたくなんかないです」

「気にしなくていいのに」

「何となく、気になるんです」

男の言葉に曖昧に、だが迷わず返した。

すると男は一瞬首を傾げたかと思うと、良い事を思いついたとばかりに今までとは違った表情を浮かべる。

「それじゃあ……凜様が付けて下さい。俺の名前」  
「ん？」

あっさりと提案された事に、今度は凜が首を傾げた。

名前を付けるといつても、アーフィイの事を仮でキミドリと言った事とは意味合いが違うような気がして、戸惑いの視線を向けてしまふ。

「気軽にいいですよ。仮、ですから」

男の口調や態度はあくまで軽いもの。

だが、凜にはそうは思えず無意識に男から距離をとる。

プレッシャーを感じたのか、じんわりと、背中に汗が滲む。

男の言葉通り、気軽に渾名をつける感覚でいいのかももしれない。

確かな事など何もわからないこの状況。それでも、凜は男に対し

ての名前は重要なのだと、警戒音が鳴り響く。

「名前を呼びたいと言ってくれたのは凜様ですよ？」

「……………」

口調や態度は丁寧だが、反論を許さない力強さも感じ、凜はもう一歩後へと下がった。この重圧で、どうして気軽なんて言葉が出るのかが甚だ疑問だ。

「思いついた言葉でいいんですよ？」

ね？と、凜との距離を縮めながら優しい声音を凜へと降らせる。

瞬間、男の言葉と共に、無造作に束ねられた白金の髪が凜の視界へと飛び込んでくる。

静かに揺れる白金。

懐かしい、その色。

殆どの存在が知らないけれど、それは、凜と似ている、色彩。

「琥珀」

無意識に、凜の口から言葉が紡がれていた。

琥珀、と……



無意識に自分の髪に触れ、男を見上げた。

「琥珀……いい響きです。」

凜様、俺の事はこれから琥珀と呼んで下さい」

名を名乗らなかった男は、自分の事は琥珀と、今迄で一番嬉しそうな笑顔を浮かべ、凜へと向き直る。

「さ。続きをしましょうか？」

琥珀が笑う。

全てが嬉しいと言わんばかりに、全身から感情を滲ませて。

こうやって見ると、琥珀の印象は幼く見える。

白金の短い髪。所々長く、後ろは無造作に束ねてあるが、横の部分だけが長い箇所には玉が色鮮やかな紐が巻かれ、琥珀が動く度に宙を舞う。

光の加減によっては、白にも金にも見える、かわった髪と目の色。

凜が一般的な女性の感覚を持つならば、琥珀と2人っきりの空間は耐えられなかったかもしれない。

それほどに、琥珀の容姿は整っている。

だが、そんな琥珀が相手でも凜は動じる事なく、琥珀の教えを一言も聞き逃さないように集中し、試していく。

どちらかというところ琥珀の言葉は、教えというよりはアドバイスに近いかもしれない。全てを教えるのではなく、凜自身に考えさせながら凜の魔法を完成させていく。

凜が肩で息をし始めた頃、何処から出したのかわからないが、琥珀の前にはテーブルが置かれ、その上にはお茶の準備がされていた。「休憩にしましょうか。このお茶、疲れがとれるんですよ」  
魔力の使用でいつもよりも動きが鈍くなっている身体を動かさず、凜は琥珀が引いてくれた椅子へと腰をおろす。  
始めは自分で椅子を引くつもりで、琥珀の事は気づかないフリをしようとしたのだが、琥珀は凜の目の前へと手を差し出し、気づかないフリが出来ないように自分が引いた椅子へと誘導した。

乾いた喉をお茶で潤してみる。

今まで飲んだ事のないお茶で美味しい。美味しい、が。

「（なんだろう…この隙のない感覚は…）」  
見た目のイメージだけでいうなら、琥珀は騎士だ。

しつかりとした肩に広い背中。綺麗というよりは精悍な、でも優男の印象を拭えないのは無駄のない引き締まった身体が、傍から見ると細く見えるからかもしれない。

そんな琥珀だったが、自分の容姿には余り拘りがないのか、動きやすさを重視した格好で着飾ってはいない。

「どうかしました？」

聞きたい事があつたら遠慮なくどうぞ。ね」

にっこりと、どんな事でも聞いて、と言わんばかりの表情。

尻尾があつたら振ってるんじゃないかと思える程の笑顔。

「（大きな……わんこだ）」

大型犬がいる。

ふいに、そんな言葉が降りてくる。

目の前の滅多にお目に掛かれない美形を、わんこ扱いでいいのか迷うが、美醜に興味のない凜には、自分に懐きまくっている大きなわんこにしか見えない。

それに、わんこにした方がこの妙な緊張感が解れる気がする。

「……色々疑問はあるんですが…あり過ぎてよくわからないので、図書館で調べます」

琥珀のは善意だとわかってはいるが、今回は何も聞かない事に決めた。

図書館の膨大な書物。毎日通った所で読みきれぬわけがなく、凜は聞くよりも先に本を読む事にした。聞けば楽だが、凜がこの世界に来てから何度か口にしたように、いつきに情報は詰め込みたくない。

すると、琥珀は残念そうに、それと同時に面白そうな色を瞳に宿すと、

「凜様のそういう所は大好きです。ただ……あの場所じゃ肝心な事は何一つわからない」

意味ありげな言葉を口にする。

だが、凜にはその言葉に心当たりがあった。

「……情報の隠蔽…か」

それは、図書館に通っている一つの疑問。

本を読んでいた時に、所々隠されている言葉があるのだ。あえて、言葉を濁しているといった感じに。

「そう。あえて、ですよ。俺が教えられる事は山ほどあります。凜様を知りたいと願うならこの世界の隅々まで」

「……」

琥珀の言葉に、興味がわかないわけじゃなかった。

だが、やはり凜の思いはかわらない。

「まだそこまで知りたくないです。

情報はあつても困らない。選択の幅も広がるとは思います…が、今の俺には必要のないものです。

琥珀さんの教えてくれた事だけで十分です。魔法の実験も、オリジナルの陣も、玉に関しても、本を読むだけじゃわからなかったですから」

凜の考えを肯定するように琥珀は頷くと、

「そうですね。俺も少しずつ知っていけばいいと思いますよ」

それは、琥珀の心からの言葉だった。それでも、凜が知りたいといえは止めない所か、本当に全てを教えるはくれるのだろう。

穏やかながら底の見えない深さを感じさせる琥珀の表情は、相変わらず笑みだった。

だが、琥珀はその動きを止め、穏やかな笑みを少しだけ奥へと引っ込めると、

「ああ…でもこれだけは言わせて下さい」

今までにない真摯な眼差しを凜へと向けた。

「色は、そのまま隠して下さい。この世界での色は、自身の象徴の力と直結します。

今では染める事も可能ですが…：自身を持つ色は染めるのでは得られない鮮やかさがあるので、わかる存在はわかります。色が現れる程強い力を示し、範囲によってはまた別の意味をもってきます」

「色と範囲…？」

凜の読んだ本には、魔法の種類によっては色が違う、といった事ぐらいしか書かれていなかった。魔法の種類によって色が違うのは

当たり前だと、たいして疑問にも思っていなかったが、それ以上の意味があるらしい。

「ただ…凜様」

ここで琥珀の声のトーンが低くなり、伏せている為その表情を伺う事も出来ない。

場が、今までにない程重たい空気に支配されるが、凜は琥珀から視線を逸らさずに見つめていた。

「傷つかないで下さい。俺はまだ傍観者なので、この程度の干渉しか出来ない存在ですが 貴方自身が傷つくなら………」

「琥珀さん？」

最後まで聞く事は出来なかった。

その前に周りの景色が歪み、映像がぶれ出す。

琥珀の声音は、波に吞まれて消えていった。

鳥の囀りやカーテンから差し込む日差しに眼を細めながらも、いつも通りの朝の風景がそこにはあった。

「…夢？ には思えないな。それに…」

琥珀の事が夢ではなかった証拠が、机の上や凜が寝ている布団の上に散らばっていた。琥珀に手伝ってもらいながら作った玉。それらには、重ねて閉じ込めた陣が薄っすらと浮かび上がっている。

凜の魔力が尽きるまで魔法の効果を確かめたり、陣の使い方を学んだりもした。その知識は確かに、凜の中で確実なものとして根付いている。だが、使い方は学んでも凜の知識はまだ拙く、図書館から借りた本を見ながら魔法の基礎の勉強を独学で進めた。

その勉強すら、琥珀に学んだ前と後では感じ方がまったく違って、魔法や陣の感覚が掴めるからこそ読み進めるのが面白くなり、何冊もの基礎の書物をおっさりと読み終えてしまう。

やはり、陣は大掛かりな魔法を使う時は必須。陣があった方が安定度が違うという理由から用いられるらしいが、個人でそれを使う存在は稀だという事もわかった。

それについては、既存の基本的な陣は使い勝手が悪いという事。威力のある魔法を込める事は出来ないという事。強い魔法を込められるオリジナルの陣を持つには高い魔力が必要だという事。その辺りから個人で作成する事は敬遠されているらしい。玉の精製が難しいという事も関係しているかもしれないが。

凜にとってみたら、鍵となる言葉を唱えるだけで発動する陣は使い勝手がいいのだが、使う条件を整えるのは大変らしいと、その時に初めて気づいた。その大変らしい陣を自由に使い勝手よく使えるようになったのは、琥珀の存在が大きい。琥珀が居なければ、凜の魔法は呪文を詠唱するものに偏っていただろう。

魔力で玉の中に陣を書き込んでいるが、本当はそれも難しいらしい。玄人向きの作業らしく、間違えて持ってきてしまった明らかに基礎ではない書物にそんな事が書いてあった。

「……陣は手書きでもいいんだ。大きな魔方陣は皆で協力して描くのかな。つと、そうだ。とりあえずこれを持ち歩くためには…テグスがあつたな。不恰好だけど仕方ないか」

鞆の中に入っていたペンチとテグスを使い、玉を腕輪や他のものに取り付けた。やはり見た目は不恰好だったが、長袖を着てしまえば目立たなくなる。

手伝いや図書館へ行く時間の合間をぬう様に、暫く凜の作業は続けられた。

そんな中、凜はいつものように厨房へと顔を出した。

朝食の準備が始まる少し前。料理長であるマークの姿を見つけ声をかける。

「おはようございます」

「おはようございます。リン様」

様付けはいらないと何度言っても、未だに直らない料理長。屋敷に勤める全員がそうなので、最近では諦めて何も言わなくなった。

「これ、この間のレシピです」

とりあえず先に本題のレシピをマークへと手渡す。

凜が食材の味を試しながら、地球の料理をこの世界の料理に合わせレシピを作成するので中々作れないが、出来たら料理長に渡し

てアレンジしてもらおうのだ。それに、新しい料理のきっかけにもなる。

「ありがとうございます。リン様のこれ、好評ですよ。今度本でも作っていいですか？」

「本？ 別にいいですけど……オレのレシピよりマークさんの味覚を優先して下さいね。オレじゃ自信がないので」

その辺りはやはりというか、異世界なのだ。生活をしていて味覚に差はないようにも思えるが、それでも自信なんてもてるはずがない。

「わかりました。その辺りは俺の味覚を優先させてもらいますね。本を楽しみにしてる奴が多くてね。完成したらリン様に初めに見てもらいますから」

「楽しみにしてますね」

その時の凜のイメージとしてはコピー本。印刷してホツチキスでとめて、背に製本用のシールを貼って終了。そのぐらいの認識だったのだが、後々、この世界の本というものを改めて認識させられるのだった。

厨房に顔を出した後は庭へと向かう。そこで、庭園の植物に水をまくのも凜の日課の一つだ。

その日課を終わらせ、凜は辺りを見回し一息ついた。凜としてはもつと手伝いたいのだが、説得の上、勝ち取った条件は一日一回のお手伝い。つまりは朝の水遣りのみ。

それが仕事ですから、という皆の意見と、ただ飯食いは嫌です、という凜の言葉。

結局、折れたのは使用人たちの方だった。

かといって、凜とは違いこれが仕事の人たちのやる事を取りすぎるといふのもどうかと思い、結局はこれで落ち着いたのだ。

そして今、朝の仕事が終わり、凜は使った桶を倉庫へと片付けた。この後はいつものように図書館で本を読む。フェルディナントから



貰った鞆を背負いながら、庭師のダルンの姿を探した。

「ダルンさん。図書館に行ってくださいねー」

枝の剪定をやっていたダルンに声をかけ、図書館への道のりを歩き出す。

琥珀が言っていた言葉。凜も感じた情報の隠蔽。だが、今はそれでも、図書館の書物の情報ぐらいは入手しておきたかった。

行く途中に空を見上げてみると、段々と曇り始めているような気がした。

この世界にきてから初めて、雨が降るのかもしれない。

「気持ちいいかな。酸性雨ではなさそうだし」

ふと、そんな事を考えた。

図書館の奥の方に、本棚に隠れた薄暗い場所に置かれた机。

そこが凜の定位置になっていた。この図書館を利用し始めてから一度も、凜以外の人が使っているのを見た事はない。そんな場所に即席のノートと本を並べ、この世界の情報を調べ始める。

目に付くのは、金と銀の双月と対の世界。

「  
読みふけようとした瞬間を狙ったかのように投げかけられた視線

視線の主を確かめてみれば顔見知り。」

「こんにちは、テノさん」

迷ったが、結局は凜から声をかけてみた。

「こんにちわつす。凜さんは勉強すか？」

机の上に並ぶ本と、束ねた紙に視線を落としたテノは、相変わらずの笑顔で聞いてくる。

だが、その視線は凜が作ったノートに興味深げに注がれていた。

「ノートっていうんですよ。オレの国で使われていたものなんです」

「へえ、珍しいっすね」

「この国は便箋ヴァインゼですしね。持ち歩くには便利ですよ」

内心、自室用と図書館用のノートは別々にしておいて良かったと思っただが、テノの視線は凜ではなくノートへと向けられたまま。その様に、漏れそうになる笑みを奥に留めながら、鞆からもう一冊ノートを取り出した。

「作り方は結構簡単ですよ。もしよければこれどうぞ。先日のお礼もかねて…受け取ってもらえると嬉しいですよ」

何冊か持ち歩いてきた未使用のノート。

断られる前に、先日のお礼という事を含めながら。テノの目の前へとノートを差し出す。指先に微かに触れるノートを手に取り、改めてそれを近くで見るテノの瞳は、何処となく輝いている。

多分きつと、こういうものが好きなのだろう。

テノとしては、先日のお礼は礼を受け取る程何かを教えたわけじゃないとは思っていた。が、ノートには興味がある。作り方は簡単らしく、これを見本にすれば作れるようになるだろう。

「……………こちらこそありがとうございます」

結局はノートの誘惑には勝てず、照れくさそうに頬を赤らめたテノが礼の言葉を口にするのだった。



凜と魔法師団団長・6 (前書き)

短めです。

ある意味、テノは研究熱心なタイプだ。

自他共に認める研究好きで、それが講じて文具集めなどもしているが、とりあえずそれについては他人には話してはいない。

「(…でも、絶対ばれたっす)」

しつかりとノートを掴んで離さない様を見て、わからない人間がいるだろうか。いや、いないだろうと、テノの脳裏には次々と言葉が浮かんで消えていく。

だが、誰にも話す気のなかった文具収集癖を揶られる品を、まさか凜が数多く所有しているだなんて思ってもいなかった。流石に予想外である。

持ち運びに便利なノートは然ることながら、凜が使っているペンも気になり、つい視線を向けてしまう。

「これは中に交換可能なカートリッジが入ってるんですよ。素材はプラスチックで、作り方はどうだったっけ。石油っていうものを確か分離させて作るんだっけ…ちょっと曖昧ですね」

苦笑を浮かべる凜に、テノはそんな事はないと首を横へとふる。「物質は魔法で調べられるっすよ。他国の技術をちよっと借りれば作れそうっすね」

態々インクにつけなくて良いという構造のペンは、書き物が多い身分としては便利そうだと思う。

「何本かあるので、分解して調べてみます？」

テノさんが調べられるならしてくれただ方が、オレとしては助かり

ますよ」

鞆に入っていたものを使い終えれば、凜も羽ペンのお世話になる。正直、それは面倒だなと思わなくも無いのだ。

「いいすか？ 保障はないすけど」

「いいですよ。出来たら嬉しいという感じなので」

何処となく、凜はテノに通じるものがあるなあ、なんて暢気にそんな事を思っていた。テノの反応は、まさしく凜が新商品を目の前にした時の反応に似ている。友人に笑われながらも、新しく発売された文具を購入していたのは、記憶に新しい。

「変わった手触りっすねー。樹脂から作れるっすかね〜。これは、ありがたく研究に回させてもらっつすね」

ノートよりはあっさりど、テノは懐にそれを収めた。

ノートとは違い、これは利害関係の一致という事で、貰ったという感覚が薄いのかもしれない。

「（ガラスでも魔道具で補強すればいけそうな気もするっすね）……って、リーンさんは勉強しに来てたんすよね」

机の上に所狭しと並べられた本とノート。

世界に関しての知識が得られる書物。

まるで、この世界の事を知らなかったかのような。もしくはもう一度調べなおすような選び方。

テノは本の山と凜を交互に眺め、意味ありげな表情を浮かべながら一冊の本を手に取る。

「良いものももらったすから、ちょっとだけ手伝わせて下さいっす」  
「……」

凜の無言を肯定ととったのか、テノは手にした本を一枚捲る。

捲られたページには、この世界の地図と名前が書かれてはいた。が、それよりも目を引かれたのは見開きの右側に描かれた地図。左のページをそのまま反転したかのような地図。

「どうして、このページが黒く塗りつぶされてるか知ってるすか？」  
対になった地図。

片方は白。もう片方は黒をベースに描かれているが、テノの言うとおり、黒い大陸のページには不自然な程の黒が使われ、今では薄っすらと形がわかる程度になっている。

「これは、俺たちの世界と対になっている世界クオロノエイっていうんすよ。鏡合わせの世界つす。100年程前からクオオ口とは連絡が付かなくなっただけだね」

意味ありげな言葉に、凜はテノが言った言葉を何度も繰り返して確認する。

「二つの世界は行き来出来たんですか？」

繰り返した後、テノに確認してみる。

「150年程前までは…すね」

「（何かありそうだよなあ…）難しい話しになってきますね。図書館では隠す事を決めた事実でしょうし。話して大丈夫でした？」

表情全体で笑みを作るものの、目の奥は決して笑ってはいないテノに、凜は言葉を重ねる。

「オレが今調べてたのは、この世界の主人よりも高位とされる存在なんですけど、その様子だとやっぱりないのかな」

琥珀が肯定した情報の隠蔽。

隠された高次元の存在と、もう一つの世界。

「興味がないって言ったら嘘になりますけど…これ以上はいいです。ありがとうございます。国名なんかはこの本を見ればいいんですよね」

「…気にしないでいいっすよ。これのお礼すから。それに 聞かれたくない話はそれなりの事をやってるんで、心配無用っす」

いつも通りに答える事を意識しながら、まるでヒースを相手にしているような居心地の悪さを感じる。

「（先日よりも磨かれてる気がするっす）」

こういう相手との駆け引きは止めようと、もう一度心にしっかりと刻み込みながら、テノは積まれた本の中から何冊かを取り、凜の前へと積み重ねる。

「これは国の特色や名産が載ってるす。こっちは魔法関連。これだけ目を通せば、こっちは暇つぶし程度でいいんじゃないっすかね」

テノが積み重ねた本と、凜が無造作に積み重ねた本を交互に見た後、軽く頭を下げながら礼の言葉を口にした。

「ありがとうございます」

「（ヒース様より素直っすね）」

凜の、ヒースに似ているようで似ていない笑みを受け、テノはそんな事を考えながら凜の元を立ち去る。そんなテノを見送った後、凜は目の前にある本の一番上の物を手に取り、ページを捲り始めるが、ある事に気づき無意識に首を傾げてしまう。

魔法に特化した国と魔法が衰退した国の文明の違い。

「（魔法に特化していない国の方が、地球に似てる…？）」

そこでまた違和感を感じ、別の本でその国の事について調べ始める。が、調べれば調べる程、言葉が浮かんでは消えていく。

《クオロノエイ》の事がわかれば、浮かんだ疑問は確信へと変わるのだが、今の凜に隠蔽された情報を調べる術はない。

テノが気まぐれにはいえ協力してくれたからだろうか。今日の調べ物は予想以上に進んだ気がするが、その分わからない事も増えた。

「魔法の恩恵に預かれる人間は減っている…か」

凜は自身の内側に流れる魔力を感じながら、誰に言うのでもなく呟く。



恩恵。自らの魔力を魔法に変換できる存在。地球では、物語りやゲームでのみ存在していた夢物語。魔法が当たり前だった世界でも、魔法が夢物語に変わりつつある事実には、凜の胸の内からは意味のわからない感情が溢れそうになる。

悲しいのか悔しいのか、よくわからない。  
空を見上げれば澄んでいる空気は全てのものを綺麗に見せてくれる。

「ああ……でも、魔法師団の人たちの変わった髪の色はそれなんだなあ」

大体は一部だけ、茶色ではない色を持つ存在。

それが、恩恵を預かった存在だとテノが薦めてくれた本に載っていた。

凜は、この世界の辿り着く先が地球とは違いますようにと、沈む夕日を見ながら願わずにはいられなかった。

まるで出口のない迷路に迷い込んだかのように。

《シイリノエイ》という世界は凜を呑み込んでいくかのような錯覚。

それでも、凜はこの世界での歩みを止める事はないと確信していた。

迷う事も考える事も出来ない事もなかった人生。

初めて迷い、考え、歩みを止めた。

歩みを止めた事が少し面白いと思う心が、凜の心の中に芽生え段々と大きくなっていく。

だからこそ、なのか。

未だに、凜は帰りたいとは思っていない。

黄昏時。

図書館を出た時の鮮やかな夕日の朱はなりを潜め、今では深い藍が辺りを包み込んでいる。

夜の帳が下りてくると、昼間とはまた違った色を見せてくれる庭園。金と銀の双月に照らされ、足元の草花が段々と色を変化させていく。

月に照らされ、淡く光を放つそれらの染色は、太陽の下で見たものよりも随分と薄く色づく程度。

地球では見た事のない光景に見惚れ、変化が終わるまでの僅かな時を楽しむ。それが、凜の日課の一つになっていた。

一度、帰りの遅い凜を心配してフェルディナントとヒースが迎えにきた事があった。それ以来、持たされたのは通信用の魔道具。こんな小さい物もあるんだね　と言ったら、知らなかった？　そうなんだよってヒースに笑われた事がある。

「(きつと、オレの知らない内にオレの事で使ったんだらうな)」「でなければ、ヒースはあんな風には笑わない。

まあ、いいかと気を取り直して、衣服についた埃を払うと、袋から通信用の魔道具を取り出す。

「さて…と、帰るかな」

取り出した魔道具に手を翳すと。声には出さずに言葉を紡ぎ始める。

「(ヒース。聞こえる？　今から帰るから、フェルには心配しない

でって伝えておいてくれる？」

わかったよ。伝えとく

魔道具に向かつて伝えると、凜の脳裏にヒースの声が響く。初めて使った時は驚いたが、何度か使う間にこの感覚にも慣れてしまった。

通信用の魔道具をしまうと、図書館で借りた本が入っている少し重い鞆を持ち上げ、肩へと掛けると、夜の闇を楽しむようにゆっくりと庭園を歩き始めようとする。が、凜から見える路地裏に幾つもの影が通り過ぎた。

明らかに人の影。

庭園に立つ凜には気づかなかつたのか、影たちは凜から遠ざかるだけ。

「そっぴえば……今日は街灯が点いていないな」

凜が立っている場所は庭園の中。庭園を抜けたその先にある街路には何故か明かりが灯っていない。後ろを振り返り、図書館から庭園へと続く街路を確認してみるが、そこはいつものように明るく、人通りもある。もう一度影が通った場所へと視線を向けてみるが、やはり、いつもとは違う光景が広がっているだけ。

「庭園が境界線だ」

見比べればわかるのだが、それだけではなく、何かがおかしいと脳裏に警報が響き渡る。恐らくというよりは絶対に、庭園から足を少しでも踏み出せば、凜も闇に吞まれどうなってしまうのかわからない。

多分だが、あの集団の目的が果たされれば闇は解除されるだろう。

「城内なのに大胆だよな」

アーフィイの時に感じた闇とは違い、目の前の闇には不快感しか

感じない。どうするかな、と、決められた動作のように首を傾げた後、凜はベルトに付けられた装飾品のように飾られた小さな玉へと手を伸ばし、親指と人差し指でそれを掴む。

「落ち着いて…大丈夫。使える」

掴んだ指を擦り合わせ、小さな玉を割る。

瞬間、凜の身体は玉に閉じ込められた魔法陣に包み込まれていた。

「ヘウクアシシカドナー  
《不可視乃光》」

その陣に刻み込まれた呪文を唱えると、凜の身体は光に包まれ闇へと溶けた。

《不可視乃光》は、外部から存在を隠す為の呪文。足元に浮かび上がった陣は、凜を中心に展開されている為、場所は固定されない構造になっている。

陣の呪文は唱えなくても展開は出来るが、唱えた方が効果と持続時間が違う。陣入りの玉を何個かを同時に叩き割れば、呪文を唱えた時と同様の効果が得られるが、唱える余裕のある時にそんな無駄な事をする必要はない。

続けて、腕輪に埋め込んである玉に意識を向け、不可視乃光と同様鍵となる言葉を唱えた。

「ムアエオロインセキラ  
《守護乃霧》」

使っている陣は、琥珀から教わった凜のオリジナルのもの。凜の中にいる魔力の形を陣にした、凜が最も効果を発揮しやすい形になっている。

琥珀の協力を得るまでは、本に載っている陣を使用していたのだが、琥珀の協力によって、凜は自分だけのものを手に入れられた。

後は、魔方陣の中心に、その魔法の核となる名を書き込み、周りにもう一つ円を加え、呪文を書き込めば様々な効力を持つ魔法陣が完成する。

凜が使用していた一般的な、比較的誰もが使いやすいものは本や

教科書には載っているが、それだと効果が相手にわかり易かったり、複雑な呪文を構築する事は出来ないという難点があり、自分だけの陣を手に入れられる魔力があれば、態々それを使う存在はいないらしい。

「さて…と。これでオレの護りは完璧だけど…どうしようかな」

ネックレスを首から外し、それに袋に入れてあった穴あきの玉を幾つか通し、左腕へと巻く。これに封じ込めた陣は、言葉によって玉から押し出して使用するタイプのモノで、ベルトに仕込んだモノとは違い割る必要はない玉。

「何となくほっておけないんだよなあ…この感覚は知り合いが狙われてるのかな」

通信用の魔道具の存在は脳裏に浮かんでいるのだが、何故かそれを使ってヒースたちに連絡を取る気にはなれず、それを鞆の中へとしまい込んだ。

今の凜は《不可視乃光》によって外部からその存在は完全に隠され、《守護乃霧》によってどんな干渉も受けなくなっている。

つまり、この闇の中を誰にも気付かれずに歩く事が出来るのだ。自分の力を過信するわけではなく、この玉たちについては協力者への信頼が勝っているのか、凜はこれが誰にも破られない事を解っていた。

だからこそ、一寸先も何う事が出来ない闇の中へと足を踏み出し、身を投じる。

瞬間、凜の身体に纏わりつこうとしていた闇は《守護乃霧》に阻まれ、凜の身体に触れる事無く霧散するが、《不可視乃光》によってそれは、誰にも気づかれる事なく行われ続けていた。

改めて辺りの状況を確認する為に視線を流すが、不自然に倒れている人たちを見つけて眉根に皺を寄せてしまう。

「眠ってるだけか……でも、あまり考えてないんだな」

発動と同時に眠らされたのか、受身も取れない状態で地面に伏した人の治療をしながら凜は歩いていく。殆どがかすり傷で済んでいたが、それは運良くといった所だろう。

「この世界に来てから怒りっぽくなったかなあ」

地球にいた頃は思わなかった感情。

こんな不快な闇はさっさと払ってしまおう。苛立ちに精神を冒されないように凜は深呼吸を繰り返した後、ベルトに手の平を当てながら思い浮かべる。

今必要な魔法は 探査。

すると、ベルトの奥の方から小さな玉が凜の手の平の中へと収まる。

「ティーンサーナイーオ  
《探査乃糸》」

玉の中の陣に籠めた魔法の名を紡ぐと、玉が光を帯び、その光を細く糸のように伸ばしながら凜の腕へと巻きつかせた。

凜の《不可視乃光》の範囲から出ないように、玉がある方向に動き始める。

「そう。この闇の理由を知りたい」

玉に語りかけると、玉の導きに従うように歩き始めた。

「人が少なくなってきたね」

《探査乃糸》に導かれるまま進んでいると、倒れていた人が疎らになり、更に歩いていくと人の影すら見えなくなる。

「人払いの魔法ってあるのかな。ありそうだね。想像力の問題だから出来そうだし」

独り言が多いなあ、なんて呟きながら、無意識に玉を握り締めた。

ただ、握り締めた玉は、攻撃用のものではなく護り主体のモノ。琥珀から教わりながら作った玉の中には当然、攻撃用のモノが多数ある。効果も狭間と呼ばれる場所で確認してみたから知っている。街中でも使うのに問題のない攻撃用の玉も多数存在しているのだが、何故かそれは、手に取る気にはなれなかった。



「まあ、傍観者で済めばそれが楽しね」

攻撃用の玉を手にとらなかつた理由を、凜はそう結論付けた。

濃い闇の気配を感じて、テノは悟られないように歩みをゆっくりしたもののへと変える。

「今日の晩飯は何かつすかねー。こういう場合は寮暮らしにするか迷うすね」

いつも通りに独り言を呟きながら、外には一切出さずに身体の内  
に魔力を溜め始めた。

「（純粹な闇じゃないすね。複合……質より量すねー）」

口笛を口ずさみながら、持っている鞆を振り回す。なんとなく。

「おっと」

何も考えずに振り回していたら、壁にぶつかって鞆の横に付けて  
いた玉が地面へと音をたて転がった。

それを拾うと、壊れた金具をどうしようかと頭をかき、仕方ない  
から上着へとしまい込む。

「（人通りがまったくくないすね）」

拾うと同時に辺りの様子も伺うが、人通りはなく、闇が広がるだ  
け。飲み屋が数多く存在する大通りのこの場所は、いつもだったら  
人で溢れかえっているはずの場所。ちらり、と横目で店の中を確認  
するが、そこには人らしき影が横たわっていた。しかも複数。

「（相手の思惑を考えると頭が痛いすかね）」

人払いに眠りに闇。それぞれの魔法の質は高くはないものの、それらを同時に行使する事から術者の人数の多さだけは伺える。が、甘いなあ、と無意識に笑みが漏れた。

ついさっき、鞆から落ちて上着にしまい込んだ玉に、溜めてあった魔力の一部を注ぎ込むと、それと連動させている瓶に仕込んである細かな玉が微かな音をたて始める。

「（《翔<sup>シュー</sup>》）」

連動させた玉に言葉を紡ぎ、辺り一帯の広範囲に飛び散らせておく。

相手の思惑を考えると、眠っている人々も、建物も傷つけてはならない。

そんなテノの立場をわかった上で、大掛かりな魔法を仕掛けてくるだろう。

目的は…と呟き、わかりきった事実にはテノの口からは笑いがもれた。

テノは断つたのだ。はつきりと。ヒースを敵に回す気にはなれなかったし、凜の事を調べて売る気にもなれない。

正直、ヒースの方が怖いというのもある。

「（どうせ傷つけたら…起こして俺のせいにする気すよね…師団長も甘く見られたっすよねえ）」

少し離れた場所で感じる魔力。飛び散らせた小さな玉に更に魔力を注ぎ込むと、複数の陣を一気に発動させた。

態々、前もって陣を練成しなくても、常に身に着けている無数の玉が飛び散り、陣のかわりを果たしてくれる。テノが好んで使う魔法の一つでもあり、その使い方は熟知しているが、今回はその内一つの陣を護る事に特化させ発動させた。

無数の小さな玉で一つの区域以上の範囲を覆いながら発動させた陣は、その中で動く術者の情報を事細かに教えてくれる。

「やっぱ数だけっすか」

口元を歪めながら笑い、自分の死角に形を潜める影たちに視線を投げかけた。

「最近の恩恵持ちの質は…随分下がったっすよねー。だから俺の探す魔力に会えないんすかね？ こーんなにレベルが低いんじゃね」

面白そうに、未だに姿を見せない影たちに向かって笑いかける。呪文の詠唱をしている事は感知しているが、やはり身近な部隊はテノに姿を見せる気はないらしい。

じゃあ、姿を見せさせればいいか、と右手を振り上げると、

「《爆》」

《爆》

《爆》

《停》

「

散らばせた玉が、テノの言葉に反応し次々と小さな爆発を起こす。爆発する場所、規模さえも注ぐ魔力で制御し、隠れている襲撃者たちを表へと引きずり出す。襲撃者の周りを爆発させ、炎を纏わりつかせた状態を維持されたまま転がるようにテノの前へと飛び出した小さな影たち。

それにテノが、もう少し魔力を込めれば、襲撃者たちは跡も残さずにこの世から消えるだろう。

「さて…と。ここまで一方的だと送り込んだ相手の頭を疑うつすね。どれだけ師団長って位をなめてるんすかね？」

ここに5人。少し離れた場所に2人が5箇所つすか。15人…：…他国でまだ産まれてるんすね。恩恵持ち」

襲撃者たちが動揺を走らせたのがわかった。が、テノは構わず続ける。

「あんた等をつまえた所で決定的な証拠にはならないすね。

いや。でも残念つすよ。貴重な恩恵持ち15人とさよならしなきゃならないなんて…：…本当に残念すよね」

冷たい光が瞳に宿る。

瞬間、テノの身体から金色の魔力が放たれた。

金色の魔力は、テノの魔力の象徴。

「さーてと…そんなに暗闇が好きなら　　光は貰ってやるっすよ」

残酷なまでに静かな声が、辺りに響き渡る。

状況確認としては、闇討ちを仕掛けた相手が予想以上に強くて、でも仕えている存在も怖くて逃げれない。かといって、闇を纏っている存在を逃がす気など更々ないテノ。

少し離れた場所で様子を伺っていた凜だったが、どうしようかと考えるように顎に手を持っていく。凜がここに来た理由といえば、この闇の正体が知りたかったのと、怪我人をだしたくなかったからだ。だが、この分なら凜の手助けなど必要なく、あっさりと終わらさう。

それに、手伝いをする気ではいても、相手はプロで凜は素人の違いがある。凜自身実践経験がないわけではないが、やはり、喧嘩とこの世界の戦いは根本的なモノが違っている。

場に吞まれないように、体中の空気を入れ替えるようにゆっくりと息を吐きだし、吸い込む。

《不可視乃光》の効果によって、凜の存在は誰にもばれてはいない。だからこそ、無理はせずに冷静に状況を確認する事に努めるはずだった。

「脳は焼かないっすよ」

だから安心していい。と、テノがにこやかな表情を浮かべ、穏やかに言葉を紡ぐ様が凜の耳と目に飛び込んでくる。

戦いの場とは思えないほどの、いつも通りのテノ。

いつも通り過ぎて、逆に今はソレを不自然に感じてしまう。

テノが体に纏わせた魔力に鋭さが混じった瞬間、闇を纏う影たちから悲鳴が漏れた。

悲鳴が、凜の身体を突き抜ける。

怯えた、幼い声。

綺麗事だけじゃ済まない世界。

わかってる。

でも、そんな事など一切頭を過ぎらず、凜は腕輪とネックレスの

鎖を巻きつけている左腕を前へと突き出し、言葉を紡いでいた。

「ティームクワールオカアーファイエ  
《沈黙乃枷》」

左腕の衣服の袖から覗くチェーンと玉と腕輪。材料の少ない所で無理やり穴をあけたりテグスで巻きつけたりしたそれは多少不格好だが、こんな時にそんな事を言っている場合ではないだろう。

凜はしっかりと想像力を働かせ、玉から魔方陣を押し出すイメージを固めながら言葉を紡ぐ。

陣を押し出す先は、影たちの胸の辺り。物体ではない陣は、闇をすり抜け身体へと陣を刻み込む。

「事情の知らないオレが手を出すべきじゃない、とは思っていますけどね。なんかほっておけなくて」

テノも、テノを襲った集団も、恩恵を預かる存在。

力が強い、弱いはあるが、体内から発せられる魔力で恩恵を預かっている事は凜でさえわかる。

恩恵を受けた存在の数は減っているらしく貴重だが、その貴重とは別の意味で凜は自分自身の何かが揺り動かされた気がしていた。

「その声は…リンさんですか？ 姿も存在も感じないですけど」

凜の声がした方角で場所はなんとなく分かるが、姿どころか存在を感じる事が出来ない。会う度に強まっていた魔力の波動もなし。

だが、襲撃者に刻み込まれた魔力から感じる波動は凜のモノなのは間違いようがなく、動かずに様子を伺う。具現された魔力の渦は消さないます。



「《解除》<sup>キオ</sup>」

《不可視乃光》だけを解除し、姿を見せた凜は改めてテノを真正面から見つめる。

「テノさん、彼らはもう魔法は使えません。しかも動けませんよ。その物騒なモノ、やめませんか？」

いつでも焼きつくせるように。その魔力は霧散されないままテノの手の中に収まっている。

「何か随分と強くなってるすね。良い先生でも出来たすか？」

凜の言葉には答えず、まるで挨拶でもするかのように気軽に会話を続けるテノ。

「さあ。どうでしょう?」

あえて答えないテノに気にした素振りは見せず、少しずつ距離を縮める。

「ヒース様じゃないすよね? そのいかにも手作りってヤツは……独学っぽいすけど、その陣は独学じゃ作れないすからね」

協力者がいないと、オリジナルの陣は作れないらしい。口伝か何かなのかと思うが、今、それを訪ねている雰囲気ではない。

「彼等 自業自得の面もあるけど、怖がってますよ?」

そろそろ弱い者苛めになっちゃてません? お互い引きそうにないし、かといってこの辺りの効果は切れそうだから時間はないし……どうします?」

命の危険があつたのはテノ。そして、従ってしまったのは彼等。今回は偶々テノの実力が圧倒的に上回っていたから、襲撃者に命の危険が出てきただけ。逆だったら、今頃テノは死んでいただろう。それを考えると良い気分はしなかったが、テノの魔法を強制的に

消す気にはなれなかった。

だが…

「彼等の身体に写した陣の効果は沈黙。魔力の拘束と肉体の拘束。効果時間は無制限。破るまで、彼等是指一つ自分の意思じゃ動かせません。」

それを踏まえた上で一つ、オレに貸し作りませんか？」

ある種の賭け。

テノが乗ってくれるかどうか。

凜は表情を変えないまま、テノの返答を静かに待っていた。

凜にとって、人の死は身近なものではなかった。

両親は、凜が物心つく前にこの世の存在ではなくなり、写真でしかその姿を見た事はなかった。

だが、凜には兄や姉が居た。大切に育てられ、寂しさを感じた事は一度もない。

両親が死んだという事実はあるが、それでも、凜にとって人の死というものは、テレビを通して見る、何処か現実味にはかける身近ではない事実だった。

その他人事だった死が、凜の目前へと当たり前のように立っていた。ただ、それは凜に対しては背を向けていただけ。それを凜は自分から駆け寄り、その背に追いついただけの話し。

「リーンさんは何で、殺されたくないんですか？」

関係ないすよね。見なかったふりをして帰れば他人事で、現実味なんてないただの日常の「こまっすよ」

まるで凜が殺されそうになっているかのようなテノの口調。

「そうですね。ちょっと前までそれは、現実味のない他人事でした。毎日のように死が伝えられているのに、オレにとってそれは直ぐに忘れてしまえる世界の一風景に過ぎなかった。

なのに、今回はその死を見たくないっていうオレの我が侷ですよ  
ね」

100%自分の為ですね。

笑いながら言葉を付けたし、テノの反応を待った。

「自分の為？」

「はい。自己満足っていうのかな。後は…オレは人の死に慣れてません。当たり前じゃないんです。

目の前の出来事じゃなかったら、あまり気にしないで直ぐに忘れろと思います。でも、目の前で人が傷ついたり死んだりするのは嫌なんです」

今回の件について、凜が自分から飛び込んできたという自覚はあった。

それは今更で、テノも突っ込んだりはしなかったが、凜を伺うような眼差しだけは向けていた。

「綺麗事で固めた偽善よりは好きっすけどねー」

命を奪うのは嫌です。掛け替えのない命なんですよ。

なんて言われたら、テノは右手に宿している魔力を即座に発動させていただろう。

人でなし、なんて言われたら心底面白くて笑ってしまう自覚もあ

る。

だが凜は、自分の為と言った。  
予想していなかった言葉に、少し興味がわいたのかもしれない。

テノは右手に宿していた魔力の形を変え、闇を纏った数人へとソレを放った。具現した魔力は殺す意志を持ってはおらず、凜はテノのする事を黙って見ていた。

テノの光に纏っていた闇を奪われ、姿を現したのは十代前半の子供たち。

その子供たちの首には黒い首輪が巻かれ、鎖がついている。

「飼ってるんすよ。恩恵持ちをね　　：他所の国で産まれた恩恵持ちは、化け物って言われる場合が多いすから、金さえ積みめば簡単に売るんすよ。」

ああ。この国でそれはないっすよ。陛下は名君すから。それでも、世界の軋みは止められない」

それを言ったテノの表情を伺う事は出来なかった。

テノは魔法を発動させ、子供たちの首に巻かれた首輪と鎖に被せるように陣を組んでいく。その時家の中に灯りがともる。

闇が晴れたのだ。

「範囲、人物指定、《不可視乃光》」

次々と灯りがともり、人々の声が大きくなっていく中、凜は迷わず魔法を発動させていた。このままだと、騒ぎの中心になってしまつだろ。騒がれるのは得策ではない気がしたのだが、テノの表情を見るとその判断は間違っていなかったらしい。

「さっきのすか。どうもっす」

凜が見てきたテノより、今のテノはぶっきらぼうな感じがした。こついう場面だからか、これが素なのか、凜にはまだ判断がつかない。

「とりあえず移動するっす。リンさんは……ついてきそうすね」

「お願いします」

迷うテノに、凜は頭を下げた。

すると、テノは何も答えず凜の足元へと魔方陣を発動させる。

「（小さな玉が沢山……）」

玉とっていいか分からない程小さな粒。それらが集まり、魔方陣を構成していた。

「（こついう使い方もあるんだ）」

使う魔法を固定しない、その場に合わせて変更出来るテノの玉の使い方。凜の足元に転がる砂のような小さな粒を視界に収め、改めてテノの底知れぬ何かを感じた。

テノの領域の上に立っていたらしい。テノがその気になれば、凜を拘束する事は簡単だったはずで、それをしなかったテノの真意を凜には量り知る事は出来なかった。

凜の足元に構成された陣が光を放ったかと思うと、その眩しさに目が眩み凜は反射的に目を閉じていた。

目を閉じていたのは時間にしてほんの一瞬。

瞼越しでも光の粒が目の前で踊っているかのように点灯を繰り返しているのだが、凜は足を踏みしめながら閉じていた瞳をゆっくりと開けた。

グラツと視界が揺れそうになるが、凜は気にせず辺りを確認する。

凜の目の前にはテノ。少し離れた場所には子供たち。その子供たちだったが、ざっと数えても10人以上。

テノと対峙していた子供たちは5人だったと確認していたが、他にも居たという事実には凜は視線をテノへと向けていた。

「15人すよ。面倒なんで、一緒に転送したす」

「.....」

凜は無言のまま、小さく頷く。

「場所すか？ 大丈夫すよー。陛下には許可貰ってるすから」

一体いつの間に、とも思うが、どうせ魔法が絡んでいるのだろうと凜はそれ以上は考えず、テノが陣を被せた子供たちの鎖に視線を向けた。

場所が場所だからだろうか。

罪人のような首輪と鎖が、凜の意識を不快にさせる。

無機質な場所。長方形の石が積み重ねられ、部屋のような空間はあるものの鉄格子で遮られ、窓もない。

「ここは丈夫なんすよ。監獄すから。リンさん、あの鎖...どう思うっすか？」

凜の思考を読み取ったかのようにテノが言葉を紡ぐ。

「契約...ですか？ 繋がれてる??」

監獄から意識を離し、ただ視界に収めているだけだった鎖と首輪に集中する。目を細め、テノの言葉の意味を見逃さないようにしっかりと見えない何かを確認していく。

すると、繋がれていない鎖の先が、何処かに向かって伸びていることに気づく。物体じゃない魔法の鎖。

物体の鎖と魔法の鎖の境目をテノは魔方陣で覆い、魔法の鎖を伝いながら元へと向かって光を絡ませていく。

その瞬間、凜の目の前で鎖に輝が入り、それと呼応するかのよう  
に子供たちの身体に裂傷がはしる。

「正解つす。この分だと本体を掴めるか微妙つすね」

魔法の鎖に絡み付いていた光は既にこの場にはない。子供たちを  
縛る鎖の先にいる人物に絡みついているのか、焦ったように鎖が壊  
れていく。

声を発する事も出来ず、鎖と同時に子供たちの身体も裂傷が入り、  
腕が落ちる。

「俺の光が到達する前に子供たちが死ねば、鎖は壊れるつすから」

「……」

テノの言葉の意味を、どういう気持ちで聞いていたのか凜にはわ  
からなかった。

ただ、不快で仕方なかった。

言いようもない、言葉に出来ない怒りが沸いてきて、身体が熱を  
持つ。

テノの魔法が大元を掴むより先に、子供たちを殺そうとしている  
鎖の主。

子供たちが死ねば鎖が壊れ、テノの放った光も意味を持たずに消  
えるだろう。



だからこそ、この鎖を通して殺そうとしているのだ。利用していた子供たちを。

癒しは作っておきましょうか。ね、凜様。きっと役にたちますよ

夢の狭間で会った琥珀の言葉が、凜の脳裏を掠めた。ひよっとしたら琥珀にはわかっていたのかも知れない。この事態が。

一歩足を前へと踏み出しテノの隣に立つと、袋にいれてあった大きめの玉をテノへと手渡す。

「増幅です。使ってください。」

この子達はオレがなんとかするので、そっちに集中してください」  
更にもう一歩足を踏み出し、袋から、もう一つ大きい玉を取り出す。

穴をあけて鎖を通した玉。鎖を手首に通すと、右手でそれを握り締めた。

これは、琥珀と一緒に作ってくれたモノ。玉の効率的な作り方を凜に教える為に、凜の魔力を琥珀は自身の魔力を使って導いてくれた。

だからこれには、琥珀の魔力が宿っている。  
その玉に、琥珀は癒しと増幅の陣を込めた。

玉を握り締めた右手を前へと突き出し、その上に左手を添えて魔力を注ぎ込む。

テノは何か言いたげな表情を浮かべたが、声をかける事無く凜に背を向けた。背中越しに感じるテノの魔力。

魔力の質が琥珀に似ているからなのか。それとも凜が渡した玉を使ったからなのか。何処か安心する気配に凜は全神経を子供たちへと向ける。

5人にかけて《沈黙乃枷》は既にその効力を失っていた。

自由を奪ったはずの四肢は引き裂かれ、臓物は床へとばら撒かれ、生きているのが不思議な状態。

でも、まだ生きている。

辛うじて……生きてくれていた。

「大丈夫。大丈夫にするから……」

誰に言うのでもなく、凜の口からは言葉が漏れた。

魔力を注ぎ込んだ玉に刻まれた陣は子供たちの身体へと刻まれ、  
凜の魔力の波動を受けて光を放つ。

全ての音が消え、凜の意識は外とは完全に切り離された。

凜様

その瞬間、琥珀が声をかけてくれたような気がした…。

全ての力を使い切ったのか、凜はその場に崩れ落ちるように膝をついた。

「……ッ」

指先一つ動かす事すら億劫で、無理に動かそうとすると痛みさえ伴う。この症状には心当たりがあったが、あの時は琥珀のお茶で一瞬で回復したが、今回はそうはいかないだろう。

子供たちの五体満足の様子を確認して、身体から力を抜いた。ト  
ン、と背に当たるのは冷たい石。

熱を持った身体に冷たい石は気持ち良くて、瞳を閉じる。

このまま眠っちゃいそうだなあ、なんて思っていたら、段々と意識が闇へと沈んでいく。

完全に闇へと沈む瞬間、背に誰かの手が触れたような気がしたが、それを確かめる気力はなかった。

「お疲れ様です。頑張り過ぎですよ」

聞こえてはいないけれど、テノは眠っている凜へと言葉を紡いだ。沈んだ意識は暫く浮上はしないだろう。

疲労で意識を手放した凜を抱き上げ、マントをひいた上へと横たわらせる。

「さて…と。ヒース様に連絡つすよねえ」

凜の衣服の中から存在を主張する魔道具。先ほどから煩い程魔力を放ってくるが、その波動に心当たりがあり過ぎてテノは頬を引き攣らせた。

魔道具を通して連絡を取ろうと試みているという事は、逆探知の効果はつけていないらしい。

「ヒース様正解つすー。今のリンさんにそれは危険すよ」

凜の魔法の腕前を知らないであろうヒースを思い浮かべ、納得するように頷きながら凜の衣服から通信用の魔道具を取り出す。

通常、通信用の魔道具は微かに光を放つだけで、ここまで存在感は主張していない。小指の先程の魔道具から放たれる朱と緑の魔力ヒースとフェルディナントのモノだが、テノはそれを自身の魔力で覆うと宙に浮かし、それから通信を開始した。

「どーもつすー。ヒース様、フェルディナント様。正気すか？」

次の瞬間、魔道具を通して攻撃的な魔力が放たれるが、それはテノの魔力によって防がれ霧散する。

「短気すね。相変わらず。別に俺が誘拐したわけじゃないすよ？」

通信用の魔道具を更に魔力で覆うと、2人の出方を伺う。

会話にならなければ、陛下に丸投げしようと思意するが、意外と冷静な声がテノの脳裏へと響いた。

わかってるよ。誘拐してたらそれは使わないでしょ。要点を纏めて報告してよ。いい加減、後ろでフェルが煩いんだ

「……」

攻撃的な赤い魔力の波動は収まる所か、更に威力を強めている。

面倒だなあ、とばかりにテノはため息を落とすと、要点を纏めながら報告し始めた。

「ここに来るのは、リンさんが起きてからにして下さいすよ？  
それまでに落ち着かせといて下さいす」

最後にそれだけ言い、一方的に通信を切った。  
はつきり言つて、恩恵持ちの子供たちを相手にしたり黒幕を掴んだ時よりも、今の数分のやりとりの方が疲れた。背中に嫌な汗をかいているが、この際それには目を瞑る。

「子供たちの治療…は必要なさそうすね。後は中身…すか」

外傷は凜によって完璧といつていい。が、問題は縛られていた中身だが、それはすぐに判断はつかず、テノは転移陣で子供たちを監獄から移動させた。医務室にでも転移させておけば、後は陛下が対処してくれるだろう。

五体満足で生きている事が奇跡なだけで、テノとしてはどうでも良かった、というのが本音だ。

とりあえず、意識を失った凜が気づいた時の為に疲労回復よ用の飲み物を用意しておく。

移動も考えたが、動かそうとすればその瞬間起きてしまうだろう。

「……あー…ヒース様たち行動が早いっすね」

凜が起きてから、という注意は効果があつたらしく、起きるまで上で待つらしい2人にテノの口からは苦笑しか漏れない。

何時起きるかわからないのに、ヒースやフェルディナントは待つ気なのだ。

「まあ、上で待つだけならいいですよ。眠りを妨げるなら怒るっすけどね」

凜に向けては優しく。

眠りを妨げる侵入者には冷淡に。

テノは俯いたまま口元に笑みを貼り付かせた。

ぼやける視界に働かない脳。

身体は動かす事が出来ないまま、ただ天井を眺めていた。

段々と気を失う前の事を思い出し、凜は自分の近くにある気配に視線を向けようとするが、それより先に気配の主が凜の横へと膝をつけると、金の色彩が凜の視界を掠める。

「テノさん…どうになりました？」

喉の感触がおかしい事もわかるが、それよりも子供たちの事が気

にかかる。

「大丈夫すよ。五体満足つす。今は医務室で寝てるんじゃないすかね。リーンさん、それよりちよつと失礼するす」

凜の承諾を得る前に、テノは背中に腕を回し起き上がらせ、壁が背にあたるように座らせる。

「辛いとは思うんすけど、これを飲んで下さいす」

「ん」

テノから水らしき透明の飲み物を受け取るうとしたが、手に力が入らず伸ばそうとした腕は重力に逆らう事なく落ちていく。

「更に失礼するっす」

そう言つと、テノはグラスを凜の口元へと持っていき、ゆっくりと唇を湿らせるように液体を喉へと流し込んでいく。

無味無臭の液体。水に近いが、その喉越しは水ではない。

コクコクと、いつもの倍以上の時間をかけて、グラスの液体を飲み干した。

「これで随分楽になるはずつすよ。リーンさん、お疲れ様す」

グラスを床へと置き、テノが困ったような笑みを浮かべながら言った言葉に、凜は思いついただけの言葉を返していた。

「テノさんも、お疲れ様です」

困った表情には理由がありそうだが、今はそこまで頭が働かない。



「ヒース様に連絡しといたつすよ」

それでも気遣う表情を浮かべる凜に、別の話題を投げかけた。

「あー…ありがとうございます」

一瞬視線を上へと投げ、次の瞬間には困ったようなやつちゃったような何とも言えない表情を浮かべ、凜は微かに頭を下げる。

公園で連絡したが、その後の事はすっかり忘れていた。

一体それからどれぐらい経ったんだろうと、首が動かない事も忘れて動かそうとしたらテノの手によって止められる。

「三時間すよ。リンさんと会ってから」

「怒られそうだなあ…」

三時間も音信不通にやっていたのかと、怒る二人を想像して凜は首をゆつくりと横へと振る。

「迎えに来るそうすよ。ヒース様きたら、その玉の事は報告した方がいっすね」

連絡をした時の2人の様子は話さず、テノは凜が使いこなしていた玉へと視線と話題を向けた。不恰好な、誰にも話さず独学で魔法を学んだ事がわかる装飾品。

「使い物になるかわからなかったから ……ていうのは通じないですよね？」

恐る恐る尋ねてみると、返事は別の場所から返ってきた。

「そうだね。君の魔法は魔法師団クラスだよ」

「……」

確認しなくても、その声の主が誰か ……なんて事はわかる。

それでも、凜の身体は本人の意思通りに動く事はなく、顔はテノの方に向けたまま言葉を返した。

「そうなんだ。気付かなかつたな」

「そうだろうね。初心者だから、加減がわからない」

ヒースの声音は当然心配の色が含まれていて、凜はせめて身体をヒースの方に向けようとしたが、それは別の手によって止められる。

「動かすな」

一言。静かな声音が真上から降ってきた。

それは、この世界に来て間もない頃、一回だけ聞いた事のある声音。

何処か影を含んだような、普段の彼からは想像がつかない程の淡々とした音。

「こういう時は俺かヒースを呼べ。そうすれば、リーンはこんな目には遭わない」

抱き上げられ、凜の視界はフェルディナントで埋め尽くされる。

「心配かけてごめんね」

フェルディナントの揺れる瞳を見た瞬間、考えるまでもなく凜はその言葉を紡いでいた。そして、痛まない程度の速度で腕を伸ばし、フェルディナントの頬へと触れた。

体温の高いフェルディナントの身体は驚くほど冷たく、表情は凍りついたかのように無表情になっている。

「オレは大丈夫。それに、誰も死んでないよ。それが、オレには嬉しい」

異世界に来てからそれ程時間は経っていないが、一つだけ判った事がある。

「（オレはもう…フェルの内側なんだ）」

探り合う関係だっただけに、凜にとっては予想外の真実。

そんな事に気付きながら、再び襲ってきた睡魔に視界が揺れる中、テノがフェルディナントの視界には入らない位置に立っているのが何故か凜の脳裏に深く刻まれていた。

凜と魔法師団団長・10 (後書き)

【凜と魔法師団団長】はこれで終了です。

## 幕間くテノのその後

監獄の中。

凜はフェルディナントに連れられ、早々に退場してしまい、残されたのはヒースとテノの2人だけ。

「で、リーンは何をしたの？」

辺りを一通り確認したヒースが、誰よりも状況を分かっているであろうテノに、有無を言わさない表情と口調で尋ねてくる。尋ねるといふより尋問に近い雰囲気なのだが、お互いがお互い、笑みを浮かべ穏やかな表情を浮かべる。

思っている事は一緒だろう。

「医務室見てきたよ。あの魔方陣。見た事ないけど誰のオリジナル？ まあ、このパターンから言うところリーンなんだろうけどね。魔力の残滓はリーンのものだったし。」

あれ、普通だったら死んでるよね。ねえ、テノ。詳しく話してくれていいよ。」

相変わらずの笑み。

そして、ヒースらしいものの言い方。

判断できる材料は揃っていても、それを繋ぎ合わせるまでには至らないらしい。それについて、テノは否定的な考えはしなかったが。

「（俺も見てなきゃ同じだったすよね）」

言葉にはしなかったが、ヒースはわかっているだろうと何も言わずに説明を始める。

「正解すよ。子供たちのこと」

テノは右手の人差し指で自身の胸の辺りをトントンと弾くと、  
「陣はリンさんのつす。ちなみに、一つの玉で同時にその陣を放つたすよ。後は姿を消す、防御、回復…つすかね。全て玉に刻んだ陣で発動してたつす。」

あの回復なんかは……下手すると死んでなければ復活出来るんじゃないすかね？」

五体満足の子供たち。

それらが、全てを物語っている。

「全然気づかなかったなあ。玉を作ってるのも…ね」  
ヒースの沈んだ声は珍しいが、それについてフォローする性格でもないテノは、淡々と思った事だけを口にする。

「さつきリンさんが言ってた台詞。本気なんじゃないすか？ 見たすけど、加減もわからないみたいだったつす。まあ、加減を知ってたらあそこまで魔力を他人に見せないすけどね」

目を細め、恍惚とした表情のままヒースに視線を流すテノ。

その奥に宿る光は警戒が含まれる事に気づいたが、ヒースはいつもの表情を崩す事はなかった。

「そうだろうね。知ってたら、あの魔力は隠すだろうね。あの魔力は 特別過ぎる」

凜が目覚めた後、ヒースは極めて冷静を装ってここに足を踏み入れた。

そこに居たのは、凜とテノ。

問題は、凜を取り巻いていた魔力。

魔力に気づいた時、表情や口調を崩す事はなかった面の皮の厚さに感謝しながら、ヒースは右手を握り締めた。

爪が食い込むが、今は気にならない。

「ヒース様ー。リンさんに感謝した方がいいっすよ。あの魔力は俺たちにとっては特別っすから……貴方を狙う存在のやる気はそぐっすよ」

肩をすくめ、テノはヒースから距離をとる。

「少なくとも俺は、貴方が怖いから　じゃない理由が一つ増えたっすね」

「……」

「リンさんはヒース様たちを護るっすよ。分かっている、俺はヒース様に喧嘩は売れないっすね」

無造作に髪を掻きあげ、凜が残した魔力の流れに手を伸ばし、魔力を取り込む。

やはり、凜の魔力はテノにとっては心地が良い。その時、テノの金の色彩がその範囲を広げた。が、掻き上げられた髪の変化は誰にも気づかれず、テノ自身も気づかなかった。

「医務室の子供たちはどうするの？」

テノが凜の残した魔力を全て吸収した後、ヒースは疑問の言葉を

口にした。

「脳以外を焼き切ろうと思ってたんすけどね。まあ…報告して後は任せるす」

こうして刺客という存在が生き残っているのが初めてで、生き残った刺客の対処なんて一切考えていないテノは、全てを丸投げした。あっさりと、迷わずに。

「そうだね。リーンは生存を望むかな」

「じゃないっすかね。だから俺は決めないすよ」

テノの読めない表情にヒースは相変わらずだな、と肩を竦めると外套を翻し姿を消した。フェルディナントが屋敷に着く前にやっておきたい事があるのか、迷わず転移を使ってその場から存在そのものを一瞬で消す。

いつものように、テノに言葉は無い。

それがヒースらしくて、テノは何もなくなった監獄に背を向け報告へと向かう。

初めて凜を見たときの感想といえば、容姿のいい人。人目を引くけれど、それだけの人。

凜の髪の色はテノとは違い恩恵を預かっているようには見えぬ、凜と言葉を交わした時もこの髪の色で魔力がある事に驚いた程度。

「俺の探す力じゃないっすねー」

結局、この一言で終わらせた。



図書館で見かけた時、積み重ねられた本にも驚いたがそれよりもテノの視線を釘付けにしたのは、見慣れない文具の数々。興味本位で声をかけ、話すテンポの良さに舌を巻いた。

そして、今。

限界まで使われた魔力の色は、テノが捜し求めるモノ。

テノ自身が受けている恩恵の、源の色。

その色を持つ魔力は全てにおいて特別だったが、金の色彩を持つテノにとってはそれを遥かに上回るモノだった。

「取り合えず報告。で、陛下はどんな判断をくだすっすかねえ」

今日の出来事を報告するが、報告した後の陛下の采配も楽しみの一つだった。

ただ、陛下の判断はテノの予想とは外れていたのは結構驚いたけれど。

全ての答えは、凜と陛下の謁見の後。

やっぱり謁見が必要な立場だったか、とか。

まだしてなかったのか、など。色々思う事はあるのだが、行動制限は思ったよりもされていなかったなので、その辺りだけはマシだったと思っていた。

自宅に戻ったテノは研究室に閉じこもりながら、今まで起こった

出来事をもう一度冷静に整理してみていた。

考えながらも手は動かしているのは慣れだが、今日の研究はいつもとはかなり違う。

凜から受け取ったノートとペンの研究。これに使い慣れているなら、この国で主に使われている羽ペンは使いにくいだろう。

ペンの成分を調べながら、材料の成分表と合わせていく。

「型に流し込んで成型して…カートリッジってヤツは魔道具で対応か…圧縮？ 押し出す力つすかねえ。まあ、取り合えずは魔道具対応で出来そうなんで、そっち優先す」

ノートもペンもなんとか形にはなりそうで、それをどうやって報告しようかと悩まなかった事で悩んでしまっ。

テノしかわからなかった研究所の内部は何時しか片付けられ、主が飲もうともしていなかった茶器や茶葉が置かれるようになるのは、もう少しだけ先の話し。

「もう少しあの魔力を近くで見たいっすよねー…ああ、そつす。玉っす」

フェルディナントやヒースの保護下に置かれた凜をどうやって外に連れ出すか。良い考えが浮かんだとテノは身なりを整えはじめ。陛下直属ではないが、陛下の管轄である魔法師団の団長をやっているテノは、他の者に比べてお目通りが叶いやすい。

凜の落としていった玉を大切に包み込み、懐へと忍ばせる。

陛下の許可はきつと下りる。

そう思うと、楽しみで仕方なかった。

数日前の夜、闇夜に紛れて暗殺を行おうとした恩恵持ちがいた。偶々集団に気づいた凜は首を突っ込み、限界まで魔力を消費して倒れたのだ。が、その後が大変だった。

チャラン、と音をたてるのは腰に下げられている鎖付きの小さな宝石。手の平に収まるストラップ程の大きさで歩く邪魔にはならないが、その効果を考えると凜の口からはため息が漏れてしまう。

「それ…ヒース様お手製すよね？」

声は神妙な割りに、表情は笑みを浮かべて何処か楽しそうに見えるテノ。

数日間寝たつきりだった凜がベットから起き上がれるようになった後、いつものように外に出ようとしたらフェルディナントが全力で阻んできたのだ。最終的には折れなかった凜にフェルディナントが折れたのだが、その際出された交換条件がこれだった。

「そうみたいです。なんかオレがある一定の魔力を使うと、ヒースが飛んでくるらしいです」

「あー…そりゃ過保護っすね。まあ…でも心配なんすよ。寝込んだんすからね？」

寝込んだ事を言われると押し黙るしかない凜だったが、気を取り直して机の上に並んでいた文房具を手取る。

「そうそうテノさん。これはペン先ごと交換できた方が簡単じゃないですか？」

「逃げたっすね。まあ…しょうがないっす。交換するカートリッジは、インクだけじゃなくてペン先もすね？」

凜に向ける笑みの種類は、からかうようなものから優しげなものに変わっていたのだが、テノが作った文房具の試作品に集中していた凜はその表情には気づかず、いつものように顔をあげテノの言葉に頷く。

テノ自身もそれを凜に気付かせる気はないのか、優しげな表情も一瞬だけで、直ぐにいつも通りの何を考えているか分からないと評判の笑みを顔に貼り付けながら凜の次の言葉を待つ。

「交換が楽なんですよね。手軽な感じがいいかなと」

「そーすね。手軽はいいすね。カートリッジだけだとインク漏れの心配もあるっすから、ペン先まで一緒に交換するのは良い案っすね」

凜も日本ではペン先まで交換出来るタイプのペンを好んで使っていた。インクのみのカートリッジ交換は蛍光ペンぐらいだろうか。

「後はここの金属部分…ペンとセットになってるものは通常タイプで、別売りで色々なデザインのとか作れないかな？」

「いいっすねー。限定も作れそうっすね。」

後ノートなんですが、リングノートってやつを試作品がこれっす」

テノが差し出したリングノートを手に取り、捲り具合やリングを確認する。手触りは、日本のものより遙かにいい。

「手触りが良いですね。ノートに関しては表紙の色やデザインを変えたり、ノートのマス目を変えたりしたら便利ですよ。後は用途別ノートっていうのかな？」

参考に見てみた家計簿や他の物をテノに見せると、テノの目が輝いた。どうやら研究者心を擲ったらしい。

「いいっすねー。用途別。この辺りは他の意見も参考にした方がいいすよね」

職種別ノートやデザインも専門家に任せたりと、詳細を2人で決

めていく中入り口の方に生まれた気配に2人はほぼ同時に顔を上げた。

「何してるの？」

顔を寄せ合いながら文房具について語り合う2人に水をさすように、ヒースが冷静な声音で2人に言葉を投げかける。

「どうしたんすか？」

「お疲れ様」

凜とテノが同時に片手を上げて挨拶すると、ヒースが嫌そうに眉間に皺を寄せながら2人へと近付いた。

「何でそんなに気があってるの？　そしてテノ。本題忘れてない？」

何処か呆れたような、いつものヒースらしい笑いが漏らしながらテノへと問いかける。

「まだつすよー。もうじき売り出すつすから、これも重要なんすよ」

そう言っつてヒースに見せるのは見本のノートとカートリッジ式のペン。テノが知り合いの魔道具技師と提携を結び、ペンやリングノートの必要な金具は形になった。

「確かに便利だけどね……玉の事は？　こっちはもう許可を取ったんだけど……ね」

冷やかな視線にもテノは相変わらず、怖いっすー、なんて言いながらも、怖がった素振りにはまったく見せない。

そんなテノを一瞥すると、ヒースは凜へと視線を向け、あっさりと本題へと入った。

「リーンがよければ、玉の作り方を教えてほしいんだ。玉さえ精製出来るようになれば、陣にも活用しやすくなるし、魔道具も作れるようになるからね」

「あ、ヒース様が言っっちゃったつす」

テノのブーイングに、

「言っつに決まってるだろ」

一刀両断したヒースの表情は、無表情に近い笑みを浮かべている。

その表情から相当きている事がわかり、テノはあっさりと凜へと向き直った。

「そうそうリーンさん。リーンさんの玉が見事だったんでぜひっす」  
ヒースの機嫌の悪さには触れず、話を進める事にしたらしい。

「…素人ですよ？」

手持ち無沙汰なのか両手の指先を絡ませながら、凜は困ったようにテノに言葉を返した。

「大丈夫っすよ。リーンさんの教えを、邪険に扱うのなんかいないっすから」

笑顔で言い切るテノの言葉に違和感を感じ、意味を聞こうとした所でヒースが言葉を挟んだ。

「良ければ受けてもらえないかな？ 許可は取ってあるから心配しなくていいよ。あー…後はちよつとだけど謝礼が出るかもね。これは気持ちだから期待しないで」

凜の疑問はヒースの言葉に遮られたが、あえてそれは言及せずには凜は頷いておく。謝礼という言葉にはちよつと心惹かれるものがあったのだが、それ以上に許可が下りたという言葉で受ける事を決めた。

「オレでよければ手伝っよ」

玉の精製の仕方なら、琥珀のやり方がまだ凜の中に残っている。

その教え方を手本にすればいいと思うと、少しだけ気が楽になる気がした。

試しにお腹の辺りに手を当て、魔力の流れを意識的に一箇所を集めてみる。すると、ほのかな熱を持ちながら凜の思った通りの場所へと集まってくれた。

「(うん……これなら大丈夫)」

凜の様子を確認しながら、テノがパンツと軽く音が鳴る程度に手

のひらを合わせ、顔を上げた凜へと笑いかける。

「じゃ、今から行ってみるっすか？ この時間なら一人に教えて終了っす。ヒース様も行くすか？」

机の上に所狭しと並べられた試作品の数々と、2人で出し合ったアイディアを書いた紙を鞆へと詰め込みながら、少し離れた場所に立っているヒースへと声をかける。

「俺は遠慮しとくよ。この後用事があってね」

職務中のヒースの用事は想像がつくが、あえて何も言わずにテノは微笑むと、

「知ってるっすよ。じゃ、リンさん。行くっすよー」

思わずあのヒースが無言になる事を、表情一つ変える事なくあっさりと言にした。

「……」

ヒースの関係者だけあって、テノも本当に良い性格をしていると凜が心底思ったのは、決して間違いではないだろう。

頬を引きつらせながら転移の呪文で移動したヒースを見送った後、残された二人は肩を並べながら図書館を後にした。鉢上になっている闘技場兼演習所に行くのかと思ったら、そのまま通路を通り抜けていく。

今回はどうやら場所が違うらしい。テノが向かった先は、凜が今まで一回も通った事のない場所。初めて歩く場所に凜は多少緊張した面持ちでテノの隣を歩いていった。普段なら初めて行く場所でも何とも思わないのだが、今回は周りからの視線が露骨過ぎて気になっってしまう。

凜自身、自分に注がれている視線なら軽く流せてしまっただが、それが全て隣に集中していると気になるのか、テノを確認するように視線を向けてみる。すると、穏やかな金色の色彩が目飛び込んできた。

「肩書きすよ」



魔法師団団長って響きに弱いんすよね。

なんて笑うテノに、凜は首を傾げる。

「そうですか？」

自分自身を見ているわけじゃない、と切り捨てるテノだが、十分に人目を惹く容姿をしているように見える。それに身長は、ヒースと同じぐらいかそれ以上。

「テノさんはかつこいいと思いますよ」

惜しげもなく凜に向ける優しげな笑み。

テノのそんな表情は貴重だという事を知らない凜は、その笑みも人目を惹くという事には気づかずに見たままの感想を口にする。

「リンさんに言われると嬉しいっすね」

まごう事なきテノの本音には気づかず、凜は不思議そうな色を瞳に宿したまま首を傾げている。

「(けどなあ…姉の言い分は正しかったのか)」

ヒースやフェルディナントとはまた違った美形のテノを眺めながら、凜は姉の言葉を思い出していた。

姉曰く。

異世界は美形が多い！

ゲームや小説を見ながら叫んでいたが、今の凜にその言葉を否定できる要素はない。むしろ、ここに来てから知り合う殆どが美形の部類に属するのだ。

それに、美形が多ければ多いほど凜自身が埋没する。日本では目立ちたくないと思う心とは反対に目立ちまくっていたが、ここでは他の人間の影に隠れて凜の存在が目立たなくなっているのが嬉しい。

そんな感謝の意味を込め、つい隣を歩いているテノを両手をこすり合わせながら拜んでしまう。無意識に。

「…リンさん」

「ん？」

「その手は止めてください」

困ったような声音に、凜は無意識に合わせていた手を下へとおろした。

「ああ…態度に出てたんだ。すいません。深い意味はないです」

心の中に留めておくつもりが、すっかり表に出ていたらしい。凜は肩に掛けてあった鞆の紐を、両手で握り締めた。拜み防止の仮対策である。無意識に効果があるかどうかはわからず、凜は意識しながら両手へと視線を落としてみた。

「リンさんも美形つすからね。視線の半分以上はリンさんですよ」完全に自分を蚊帳の外にしている凜に、テノが上の方から静かに声を降らせた。寧ろ、見るからに恩恵を授かっているテノが視線を浴びるのは当たり前で、一般的な色彩しか持たない凜が視線を浴びるのが珍しい。

それはつまり、純粹に凜の容姿が人目を惹く証拠なのだが、本人だけがそれを見事にわかっていない。と、テノは思っていた。

テノは知らないが、実際、凜がソレを分らないのは仕方ないといえる。日本では今以上の視線を集め、それが日常茶飯事になっていたのだ。半数以下の、あからさまに熱が籠っていない視線を向けられた所で、気にするはずが無い。

会話を楽しみながら長い通路を抜けた後、その先に広がるのは木々の緑が鮮やかな庭園。

景色を楽しみながら敷き詰められた石の上を歩いていると、テノが徐に指を持ち上げ建物を指差した。

「あそこっす」

テノが指を指した方向を見てみると、六角形の建物が視界に飛び込んでくる。白色の煉瓦が積み重ねられ、所々模様が掘り込んだ色付きの煉瓦がはめ込まれた、一度見たら中々忘れられなさそうな建物。

入り口に扉は無く、そのまま素通り出来そうだったが凜は足を止め、頭上に輝く玉を見上げた。

「正解っす。これが扉の代わりす」

テノが凜の手を取り、隣を歩くように建物の中へと足を踏み入れる。一瞬ビリッとした痺れるような感覚が背を通り抜け、凜は入り口を通った所で足を止めた。

「今のは??」

「防犯設備すね。許可ナシだと入れないんすよ」

「へえ…上だけかと思ったら、両脇の壁にも埋め込みであるんですね」

一定間隔で煉瓦に埋め込まれた色とりどりの玉。

目を細めながら出入り口を凝視してみると、細い線のようなものが張り巡らされている事に気付く。

「(ビリッとした正体はこれかな)」

許可を貰ってなければ即死だろうなあ、なんて呑気に呟きながら、凜はふと浮かんだ疑問の言葉をテノへと投げかけてみる。

「何でこの間は外を使ってたんですか??」

十分広い建物の内部。

この間見た人数程度なら、この広さがあれば十分訓練が可能だろうだろ。

「この間っすか? 太陽が良い感じに出てたっすからね。だから外だったす」

「太陽ですか?」

確かに天気は良かった気がする、と呟く凜に、テノは両手に自身の魔力を具現化させる。

「金色…」

それは、テノの髪の色と同じ色。

「そーす。俺の色は金　つまり、陽の恩恵を受けてるんすよ。なんで太陽が出てると調子がいいっす」

「へえ…」

金が陽の恩恵なら、白金の琥珀は何の恩恵なんだろうと、決して口には出来ない疑問を脳裏に浮かべながら、テノの魔力に手のひらを当ててみる。

ほのかに暖かい魔力は、確かに太陽の暖かさを連想させた。

「また後で…詳しく教えるっすよ」

何かを考え込んでいる凜に、テノは魔力を体内に戻しながらそんな言葉を紡いだ。

本当なら、凜が知りたいと望むならこの場で全てを教えてしまいたいというのが本音だが、師団長という位を授かっているテノは陛下の許可を得る義務がある。凜の立場が特殊だというのもあるが、許可を得た方が穏便に済むのがわかっていたからこそ、省略するつもりもなかった。

「教えてくれるのは嬉しいですけど…大丈夫ですか??」

大丈夫じゃないなら、きっと凜は聞かないだろう。

「大丈夫っすよ。大丈夫じゃなきゃ、話さないっすから」

それがわかっていたからこそ、いつもの態度を崩さずに平然と嘘をついた。

「(さて...と。どっという態度ならいつも通りに見えるっすかねえ)」

テノが凜を特別視している事。

今回は、気付かれなかった。

でも、次はわからない。

隠す気ではいるが、既に内に留まらず外に漏れている自覚がある  
テノは、いつまで続くすかねえ と、まるで他人事のように呟いた。

## シリノエイという世界・2

取り合えず陛下の許可を取って、ヒース様にそれとなく言って…。

そんな事をテノが考えているとは露知らず、凜は興味深げに室内を見回していた。思ったよりも人数が少ないなあ、と心の中で呟いてみるが、その理由に思い当たり口を噤んだ。

恩恵持ちが減っている。

それだけの事。

たったそれだけの事なのに、凜の心の中に影を落とす。

「（この世界もいつか…あの世界みたいになるのかなあ）」

魔法は物語りの世界だけ。

空想であり、想像の産物。

魔法がない世界がどんなモノなのか。

凜には容易に想像がついてしまう。

凜の感情が段々と沈んでいく事に気づいたテノは、気づかないふりをしたまま中にいる団員たちへと声をかけた。

「どんな感じっすかー??」

間の抜けたような、いつものテノの声。

「相変わらず進展は無さそうっすねえ」

ズバツと遠慮なく事実を口にするテノに、団員たちからは恨めしそうな眼差しが向けられるが、やはり本人は気にせずそれをあっさりと流した。

「そんなワケで助っ人っす。リンさんって言うんすけどね。

ちなみにすが、無礼な事したら……もれなくヒース様と俺が怒るっすよー」

にこにここと、人当たりの良さそうな笑みを浮かべたままの爆弾投下。

団員たちが姿勢を正したかと思うと、次々と拳手をして慌てるが、ままだにテノへと質問をぶつけていく。

「団長ツ、無礼の基準はなんですか!？」

「お仕置きはどんなふうですか？」

「どうして団長が怒るんですか？」

「ヒース様の客でしょ!？」

…と、次々とあがる声。

無礼を働く気満々なのか、それとも基準が不明確で怖いのか。

恐らく後者だろうと感じた凜は、パンツ、と1回手を叩いて室内に響かせると、自分へと全員の視線を集めた。

「オレが対処出来る範囲の事で、2人に頼る事はないですよ。

ヒースとテノさんが理不尽な行動に出るようだったら、逆にオレ

が怒るから大丈夫です」

シインと静まり返った室内。

それに頷くと、凜は改めてと自己紹介を始める。

「オレはリーンって言います。よろしくお願いします」

凜がぺこっと頭を下げると、上げていた手を次々と下げていく団員たち。

その様子を確認したテノが、足を一步前へと踏み出し凜の隣へと立つと、

「じゃー自己紹介は後で適当に。今日は時間がないっすからね……アンジェリカ。リーンさんに教わって下さいっす。

後は俺が見るっすから、再開っすよー」

「アンジェリカさん？」

「そうっす。今日は時間がないっすからね。彼女だけお願いするっす」

「わかりました」

テノの言葉に頷きながら、人の輪の中から外れてこちらにゆっくりと歩いてくる女性へと顔を向ける。

色素の薄い茶色の髪と目を持つ女性。

意志の強そうな、きりつとつり上がった眉と眼差し。腰の辺りまである髪を後ろで一まとめに縛っているが、その中に朱色の髪が混ざっている。

「テノ様」

キビキビとした口調。固さを感じさせるが、それがアンジェリカの容姿と似合っていた。その声音には迫力を感じるが、テノは慣れているのか気にしていないのか、細い目を更に細めて笑うと、  
「アンジェリカは惜しいんすよ？　なんで、引き出してもらった方



「がいいすね」

「……………」

彼女の不満げな眼差しを右から左へと軽く流すと、凜に頭を下げ、  
て団員たちの輪の中へと入っていく。

残されたのは、凜とアンジェリカ。

「……………」

アンジェリカに眼差しを向ける凜と、射殺しそうな眼差しをテノ  
へと向けるアンジェリカ。ひよつとして好かれていないかな。そんな  
思考が脳裏を過ぎるが、テノの判断を信じて凜はアンジェリカへ  
と声をかける。

「こんにちは、アンジェリカさん」

「……………」

ギギギ、と音をたてそうな程不自然に首を動かし、凜を見るアン  
ジェリカはやはり口を噤んだまま無言を貫き通す。

「オレの事はリーンでお願いします」

「……………」

「じゃあ、作りますか？」

「……………」

無言のままのアンジェリカ。凜を見たと思っていた眼差しは、凜  
の後ろの方の壁を見つめたまま動かさない。

女性からこんな対応をされたのは初めてで、どうしたものかと少  
し悩んでしまう。時間にしてさほど経ってはいないが、それでも周  
りからは気遣うような視線が向けられてしまい、それに気づいた凜  
がアンジェリカの表情を伺うが、やはりアンジェリカの表情はかわ  
らなかつた。

「（そっか。嫌われるのは初体験かな。どうしよう…）」

嫌いな相手から教わりたいか？と聞かれたら、凜なら即決はしな

いだらう。玉の件については、凜の場合は偶々声を掛けられただけであって、どうしても、という存在ではない。

つまり、アンジェリカがどうしても凜に教わる必要はないのだ。

テノに意見を求めようと、アンジェリカに背を向けようとした瞬間手首を掴まれる。それには正直驚いたが、びくついたので表に出なかった事に凜は胸を撫で下ろしながらアンジェリカを見る。

「細い手首だな」

だが、アンジェリカの口から紡がれた言葉は予想していなかったもの。性別を考えればこれは当たり前のだが、男と認識されると考えればアンジェリカのこの言葉は最もな事だといえるだろう。

「そうですか？」

性別は女。で、凜の手首は決して細い方ではない。

寧ろ、性別を考えれば、それなりに鍛えられた腕は太い部類に入る。

「ああ。細い」

キビキビとした口調で言われ、凜はもう一度首を傾げた。

テノやヒースと同じ魔法士というよりは、軍人といった単語が脳裏を過ぎるが、取り合えず凜はアンジェリカの次の行動を待った。

「（あ…フェルと同じ場所にタコがある。剣ダコかな）」

握力は自分と同じぐらいかな　と、暇になった思考でそんな事を考えていると、段々と腕に伝わる熱が高くなってきた事に気づいた。

凜の体温は低い。それに比べアンジェリカは標準。微かな温もり

だっただけのアンジェリカの手のひらが、今では高熱の部類に属するほど熱を持っている。

「（一気に熱をもったなあ…）」

少し怒ったように眉を吊り上げたまま俯いたアンジェリカだったが、頬に幾らかの赤みがさし、耳は真っ赤。

自分の起こした行動のその後がわからないんだと察した凜は、この状態のまま始める事にした。周りの団員たちの叫ぶ声を背景に、凜は掴まれていない左手を、アンジェリカの右手に添える。

「ツツ！？」

更に赤みを増した頬を気にする事無く顔をあげ、驚いたように凜を真っ直ぐに見つめるアンジェリカにっこりと微笑みかける。

「呼吸はゆっくり…」

凜の右手を掴んでいるのはアンジェリカの右手。その上に凜が左手を添えるという体勢の中、琥珀にしてみらったように魔力を導くアンジェリカの繊細な、絹糸のような魔力の波動を優しく包み込み、体外へと導きながら魔力に形を持たせていく。

「コントロールする事を意識し過ぎないで下さい。純度の高い魔力を一滴作ればいいんです。」

魔法を具現する直前 無意識で使えてしまうから、逆に玉の作り方が難しくなっちゃうんですね」

「……」

この世界で恩恵持ちは、呼吸をするように魔法を扱う。それこそ、魔力を魔法として具現する動作を自動で行えてしまうから、具現す

る直前で魔力を体内に留める、という事が難しくなるのだろう。

「慣れないと無駄な魔力が溢れます。玉にとって必要なのはほんの少しだけ」

「……」

相変わらずアンジェリカは無言だったが、凜はもう気にしない事にした。ただ、琥珀がしてくれたようにするだけ。

今、この手が振り払われていないという事がアンジェリカの答えなのだろう。そんな事を思いながら。

凜が導いたアンジェリカの魔力。

アンジェリカの魔力と、凜の魔力が混じった玉が、アンジェリカの手の平に精製される。

朱色と、白色が混じった玉。

呼吸を整えながら、凜は手の平の玉と繋がったままの体内の魔力を切断し、玉の形を纏め上げる。

それとほぼ同時に、コロン、と転がる玉。

純度の高い玉。

その存在を主張するかのように、玉自体が光を放っている。

「出来た…のか？」

「はい。アンジェリカさんの玉です」

手の平の上の玉を見つめたまま、信じられないとばかりに呟くアンジェリカに、凜は頷きながら言葉を紡ぐ。

その後、大切そうにそれをギュッと握り締めたアンジェリカに、凜は笑みを浮かべていた。傍から見ると、初めて玉を作ったアンジェリカよりも嬉しそうに、穏やかに。

### シイリノエイという世界・3

「今回はオレの魔力と混ぜたから斑だけど、次からは大丈夫だと思っよ」

完璧にコントロール出来れば、色は無色でも他の属性の力を帯びた色でもなんでも作れてしまう。自分の魔力の範囲が許す限りになっってしまうが、簡単に言えば、慣れてしまえばの一言で済んでしまう。

アンジェリカはそれに特に何か返事を返すわけでもなく、手の平の上にぽつんと控えめに置かれた玉を熱心に見つめ続けていた。

「（嬉しいんだろっなあ）」

そういえば、と思う。

凜が玉を作ってから然程時間が流れたわけではないが、それでも何故か懐かしいと思える程度には玉を当たり前のように精製出来るようになった。

それでも、初めて作る事の出来た玉は未だに、凜の大切なものとして肌身離さず身に着けている。

琥珀から見た凜も、こんな表情カオをしていたのだろっかと思うと、少しだけ気恥ずかしくなってくるが、ソレを表には出さずに凜はアンジェリカに微笑ましげな眼差しだけを向けていた。

微笑ましい眼差しには、やっぱり女の子は可愛なんだな。という凜の気持ちも混ぜてはいたのだが。

凜の眼差しを受けているアンジェリカだったが、自分の魔力の色

彩を有した玉を目の前に、周りの気配には気づかずに一人の世界に籠っていた。

「（白い魔力 … 綺麗だ）」

だが、自身の魔力の色彩である朱とは別に、輝かしいまでの存在を放っている白の色彩。この色は、アンジェリカが始めてみる色でもあった。自身が恩恵を受けている色彩を持つ至高の存在に近い者がいたアンジェリカは、テノほど白の色彩に焦がれるわけではないが、それでもやはり特別だと実感する。

最終的には初めて精製できた玉という感動を上回る衝撃。

ふと横を見れば、凜の微笑まじげな眼差しがアンジェリカの視界に入ってくるが、あえて見なかったふりを押し通して玉だけを見つめた。

「リンさん」

凜とアンジェリカの間に穏やかな時間だけが流れていく中、タイミングを見計らったかのようにテノが凜の名を音にのせる。

白に金糸の刺繍を施したマントを翻し、人懐っこい笑みを浮かべながら手招きをするテノの前髪の一部が、窓から差し込む夕焼けを浴びてキラキラと反射しながら光を撒き散らす。

「（テノさんのこれも綺麗だよなあ）」

どんな色でも綺麗だと思うが、テノの黄金の色彩を前にするとただ目を奪われる。これは琥珀の時も同様だったのだが、その理由には心当たりがあり、凜は気づかれないように唇をかみ締めた。

安堵か、それとも綺麗だと思えるのが嬉しいのか。

おそらく両方だとは思いますが、意識しながらテノの元へと足を伸ばすと、スツと伸ばされたテノの指先が凜の髪を弄ぶかのように頭を撫で始めた。

「ん？」

「なんとなくつすよー」

「そうなんですか？ くしゃくしゃになっちゃいますよ」

「大丈夫つすよ」

笑うと、乱れた髪をテノが指先を器用に使って撫でながら戻していく。ゆっくりと、壊れ物でも扱うかのように。

指先の動きが見えるわけでもないが、テノの指先が動くたびに居た堪れなくなってしまうのはきつと、気のせいではないだろう。

「（何か……むず痒い）」

される事にまったく慣れていない所為か、凜は俯いたまま視線を左右へと泳がせる。頬こそ朱色に染めなかったが、いつもはする立場の方で、されるのは初めて。

「（そうか…オレがした子たちが俯いてたのはこんな感じだったのか）」

今度からは気をつけようと、特にテノの手を拒むわけではなかったが、凜はひっそりと心の中で誓う。

ゆっくりと動くテノの指先だったが、凜が何も言わないのを良い事に髪の毛の乱れを直した後も、凜の頭を撫でるように手を動かしている。

そんな中、凜の内情を知ってか知らずが、居た堪れない空気を真っ二つにかち割ったのは他ならぬアンジェリカだった。

「テノ。まだ教わり途中だ」

むず痒いような居た堪れないような。そんな感情が渦巻く中、凜は見事に空気を壊してくれたアンジェリカに助かったといわんばかりの笑みを浮かべ微笑みかけようとしたが、途中で2人の間に流れる空気に気づき、笑みを形作ろうとしていた筋肉が途端に硬直したかのように動きを止める。

一触即発直前の剣呑な空気といえはいいのだろうか。

火花が散りそうな程の鋭い視線の応酬に、どうしたものかと悩ん



だ所である事に気づいた。てつきり近くにいたのはアンジェリカだけかと思っていたのだが、何時の間にもそこにいたのか、アンジェリカの後ろに隠れるようにして立っていた少年がジッと、視線を逸らす事無く凜を見つめ続けていた。

色素の薄い茶に、右側側面に水色のメッシュが入っている男の子。とはいっても、見た目では高校生ぐらい。

「こんにちは。俺はアラディンっていいいます。あの2人はいつもの事なので、心配しなくてもいいですよ」

少し高めの声で、アラディンが笑うように2人に視線を投げかける。

「そうなんですか？」

なんて答えていると、アラディンの右腕が凜へと伸びてきて、気づいた時には左腕の衣を掴まれて強制的に壁際まで連れて行かれていた。

「なんだろう？」

そんなふうな眼差しを向けてみると、アラディンは容姿に似合わず落ち着いた笑みを浮かべると、

「アンジェリカは真面目で、団長はいつもあんな感じなので、日常の光景なんですよ。まあ、大体はアンジェリカからですけど、残念ながら団長はまったく相手にしてません」

「あー・・・」

それは、見ていればわかる。とは言わなかった。

確かにアンジェリカの眉根は吊り上がり、眉間には皺が寄っているのだが、それとは対照的にテノの表情はかわらない。細い目を更に細くしたような笑みを浮かべ、両手をあげてまいったのポーズをアンジェリカへと向けている。

テノとの付き合いが短い凜でもそれはわかってしまう。軽く流されていると。

「もうじき終わりですけどね、アンジェリカは研修でしたし、玉も今日作れましたね」

「研修？」

アラデインの口から出た研修が気になり、改めてもう一度尋ねてみると、あっさりと頷かれた。

「本業は近衛です。剣を握ってる方が活き活きしてますよ」  
「へえ。そうなんだ」

凜の初めに感じた印象は間違っていなかったらしい。けれどまだまだ続きそうな二人の応酬に、凜は予定外に他の団員たちへと玉作りを教え始める。ちらり、と横目で確認すると、テノと視線が絡む。

初めは一人の予定だったが、どうやら二人目からも教えていいらしい。言葉ではなく態度で意思の疎通を済ませると、凜はアンジェリカにやったように魔力の波動を導いていく。

その間も隣りではアンジェリカの一方的な怒鳴り声が響いているのだが、内容を聞く限り終わりはまだまだ見えてはこないだろう。

一通り団員たちに教え終わった頃、漸く一段落ついたのか。それともテノが上手い事をいって切り上げたのか。

恐らくは後者だろうとは思ったが、何も言わずに凜は引きつりそうになる頬を手で押さえつけ、近づいてくる二人をジッと眺めていた。

どうやら本当にいつもらしく、先ほどの剣幕はどこにいったのだろつと凜が疑問に思ってしまうほど、平然とした表情を浮かべたテノが凜の前へと立つ。

「リーンさん、お疲れ様です」

相変わらずマイペースな空気を漂わせながら凜へと話しかけたテノに、どうしたものかと思いつながらもとりあえずそれに応える。

「お疲れ様です」

と、一言シンプルに。

テノの後ろを見れば怒りの為か顔を真っ赤にさせたアンジェリカがテノを睨みつけているのだが、どうやらソレを止めているのはアラディンらしい。

「（ひょっとしたら年上かもしれない）」

なんとなくそんな事を思い浮かべながら、テノに視線を戻すと相変わらずの穏やかな表情。

「疲れたっすよね。ホントお疲れ様す。じゃ、送るんで帰るっすよ」

「あ。いえ。オレはまだ大丈夫なんですけどね」

アンジェリカはいいんだろうか？

「あー。いつもなんで、大丈夫っすよー」

その言葉で更にアンジェリカの身体に力がいっただが、テノの態度は変わらず既にアンジェリカの事は脳の片隅にすら置いていないらしい態度で背を向ける。

アラディンも慌てた様子を見せない所をみると、本当に日常だと

は思うがそれでも女性にそんな表情をさせておくのは慣れない凜は、テノへともう一度視線を投げかけた。

「……わかったす」

凜の訴えかけるような視線を受け、ガックリと肩を落としたテノは距離を取ったアンジェリカの元へ向かって足を進め始める。

本当に、俺はリンさんに弱いつすよねえ。

そんな事を、テノが考えているとは思わずに、ただ、凜は安心してようにテノの背をおとなしく見送ったのだった。

## シイリノエイという世界・4

凜に見送られ、テノはアンジェリカの前まで歩いていきそこで足を止めた。本来ならありえないテノの行動にアンジェリカは固まっただかのようにその動きを止め、アラディンは面白そうに大き目の瞳を細めてテノを見つめた。

「リーンさんって……アンジェリカの好みっすよねえ？ 細くて儂げで肌なんか女性顔負けに綺麗で、でも実際は強いって ……ものすっごく好みっすよね？」

だが、テノから発せられた言葉にアンジェリカの石化は一瞬で解け、すぐさま詰め寄り襟首を両手を使って掴み上げる。

「ななな、何故それをつっ……！！！」

「分かりやす過ぎっすよー」

いつの間にか小声になった2人は、掴み上げられる程の至近距離で互いに鋭い視線を向けている。まさしく一触即発といった雰囲気。

「（しかし…珍しいな。コイツがこんな表情<sup>カオ</sup>を浮かべるなんて…）私の好みなどどうでもいいだろうっ！ ほっておけ……！！！」

アンジェリカ自身、テノのこんな表情や態度は珍しいと、寧ろ初

めてで珍しい所の話しではないとはわかっていても、口から出るのはいつもの言葉。それでも、今のテノには必要以上に踏み込むなど警報は鳴っているものの、アンジェリカは止まれずに掴んだ手を力を込めた。

「止まれないっていう性格はアンジェリカらしくて好感がもてるっすよ？ でも、っすね。リンさんだけは駄目ッすよ？」

いつもはにこやかに笑っているだけのテノが、珍しく瞳を開けて尚且つそれを細める。普段見慣れない表情だからなのか、いつも以上に感じる圧迫感にアンジェリカは無意識に、一分後ろに下がっていた。

「それなら、アラディンにしたらどうっすかね。ねえ……アンジェリカ？」

ゾクリ、と背筋にこれ以上ない程の嫌なモノが駆け抜けた。ここで、本当の意味で引かなければテノは敵に回りかねないと思わせるには十分な程の圧力。

いつもだったらありえなかったテノの豹変振りに、心当たりがないわけではなかったがそれでも言葉を失うには十分だった。

「あの魔力…か？」

「今更っすねえ。アンジェリカはさ……知ってるっすよね？」

意味ありげに言葉を紡いでいくテノに、アンジェリカは一つの疑問をぶつけてみる。意見一つ言うだけでこれ程に体力を使うはめになるとは思っていなかったが、今のテノ相手では仕方ないと気分を入れかえた。

「ならば、どうして手伝わせた？ 何故、関わりを持たせた？」

牽制するぐらいなら、と言葉を付け足すと。

「玉作りの先生は少ないっすからね。団員たちは大体同じ場所で躓いてて惜しかったんすよ。だから手伝わってもらったに決まってるじゃないっすか。」

アンジェリカは相変わらずおかしいっすね」

おかしいのはお前だと、言葉に出来ていたらどんなに楽だったか。

仕事に関しては、ある意味真面目な師団長になるから余計に性質が悪いと思うが、アンジェリカはテノが一途に思い続けていた事も理解出来ているからこそ、それ以上は何も言わずに黙っておく事に決めた。

ここで何かを言っても、笑顔でかわされるだけ。なら、これ以上踏み込むのは止めておこうと、アンジェリカは気を取り直して作っただばかりの玉を見つめた。

「白っすねえ」

「ああ。初めて見たな」

「ホントっすよねえ。でもリンさん、無色を作っちゃうんすよ。色の稀少さをまったく分かってないっすから」

凜と作った玉を見た瞬間、テノの意識が全てそっちに行ってくれて助かったと思いつつも、聞き捨てならない言葉にこれ以上ない程に眉を顰めた。

「知らないのか！？ どうして教えないッ？」

この世界で只一人の白の魔力の持ち主。白の魔力の持ち主が玉を作れば、もれなく超が付くほどの付加価値のある玉が出来上がるはず。なのだが、どうやら凜は無色を好んで作っている。

それは非常に勿体無い事なのだが、その理由を凜には伝えず本人だけが気づかない。

「教えるっすよ。その為に申請中すからね。まあ 教えるっすけどね」

何を写しているのかわからない虚ろな瞳でアンジェリカを見ながら、淡々と言葉を紡いでいく。

それに対し、アンジェリカも口を閉ざしたままテノを見つめていた。

アンジェリカとテノは世間的に言えば、幼馴染という関係だった。



テノは魔法。アンジェリカは剣。進んだ方向はある意味真逆で、顔を合わせる機会も年を追う毎に段々と減っていき、最近では城で月に1回程顔を合わせる程度まで減っていた。

だが、テノがここまで執着を見せた所を今まで、アンジェリカはただの一度も見た事はなかった。

産まれてから初めて見るテノの執着。

驚きはしたが、その理由は分からなくもなかった。

「（私たちはフェル様がいた。だから、テノよりは満たされてた）」

気持ちは分からなくもない。分からなくもないのだが…。

「（折角見つけた理想……少しぐらいはいいじゃないかっ）」

と、本音の部分では思わずにはいられない。

凜の耳には届かなかったが、2人の話が終わるまで凜は意識を集中させて玉作りに勤しんでいた。まだ感覚的にはあやふやで、少しでも作って安定させたいという意識からなのだが、いつの間にか話し合いが終わっていたのかテノが凜の真正面へと立ち、集まりかけていた魔力を人差し指で弾く。

「根を詰めちゃ駄目っすよ」

魔力の弾けた手に視線を落としながら、凜は苦笑を浮かべる。

根を詰めた自覚はあるのだが、それをテノに見破られているとは思っていなかったと笑う凜に、テノは困ったように表情を崩した。

「今日は帰るっすー。送るっすから。アンジェリカはアラディンが送ってっただんで、大丈夫っすよ」

先手を打って、凜が気にしそうな事を言われる前に言うと、テノは凜の横へと並んで歩き始めた。

「リーンさん、今日はありがとうっす」

2人で並びながらゆっくりと足を動かしながら、言葉を交わして

いく。

「お役にたてたのなら良かったです」

「たてた所じゃないっすよ。アンジェリカは素質はあるのに、魔力操作は本当に苦手だったんすよね。まさかあんなに短時間でアンジェリカが玉を作れるとは思わなかったすー」

「んー。けど、腰に下げた剣先は細かったですよね。ああいう武器使う人って針の穴を通せるような技術を持っているイメージがあるっというか」

手先が器用なような。と言葉を付け足すと、テノが苦笑を浮かべながら頬を掻く。

「それとこれは別みたいっすよ。アンジェリカの場合は近衛から預かってるんで、あんまり長時間魔法師団に留めておくわけにもいかないっすからね」

そのテノの苦笑に、凜も苦笑で返してしまう。

「オレはアンジェリカさん用だったんですね」

今日なら一人に教えてとは言っていたが、元からアンジェリカだけに教えて欲しかったんだなと思うと納得できる。

「他は対処出来るっすから」

凜の言葉に、あっさりと言うテノ。本当にアンジェリカだけに困っていた様子に、団員から聞いた話しを思い出してつい笑ってしまう。

「思い出し笑いつすか？　なんか色々と聞いたみたいすけど…。まあ、幼馴染っていう間柄っすけどね。その所為で俺と同調するのは嫌だとかヒース様は燃やしそっだとか言いまくってたんすよね」

「燃やす？」

「そーすよ。アンジェリカは火の恩恵持ちなんす。朱色が混じってたっすよね？」

テノの言葉にアンジェリカを思い浮かべてみれば、一つに纏めた髪の中に一房朱色の髪が混じっていた。

「綺麗でしたね。彼女に合っていましたし」

「恩恵を受けた属性に影響されるって言われてるっすよ。さて

…リンさん。ここからは相当真面目な話す」

周りに誰も居ない事を確認してから、テノは足を止めた。

その表情から笑みは消え、猫のようなつり目がちの眼を凜へと向ける。

音が消え、静寂が2人を包み込む。

コクンと鳴った喉の音が、妙に大きく聞こえた。

## シイリノエイという世界・5

こうして見ると、テノの瞳にも金色が混ざっている。

初めて気付いた瞳の色に目を奪われていると、上からテノの笑い声が降ってきた。

「正解つす。俺の属性は珍しいんすよ。“陽”の恩恵持ちつすからね」

言われた言葉に、凜は素直に首を傾げた。

「さっき聞いた、太陽のですか？」

ここに来る前にも言われたが、やはり太陽の恩恵というところからなくなる。アンジェリカのように火と言われるとイメージしやすいのだが、陽の恩恵が何かが頭の中で結びつかず、凜は考えるように視線を伏せた後テノへと戻した。

「太陽の陽つすね。前に高位の存在がいるって言ったつすよね？」

その恩恵を受けた人間が、こうして髪や目に色を授かるんすよ」

「……」

凜はもう一度テノを上から見つめる。

髪の毛のベースは茶色。だが、メッシュが入ったように金が混ざっている。そして、瞳の色は金。

言われてみれば色彩は太陽の色。

「この世界で、人はおまけなんすよ。その、高位の存在に生かされてる」

「……」

夕日に手を翳しながら、テノの淡々とした声が不自然に響き渡る。まるで密閉された空間で話しているかのような音の響き。

「高位者。人ならざる者。世界の創造者」

凜が視線を一周させた事に気付いたが、それでもテノは話しを続けた。相変わらず声音は一定で何の感情も籠っていないように聞こえた。

「始祖がいて初めて、この世界は様々なモノが生まれたっすよ」

「始祖：？」

そつえば、と声には出さずに呟く。

凜自身行動範囲は狭いが、それでもここに来てから一度も、神に關係する言葉を聞いた事なかった。日本みたくに八百万の神がいて、日本中に神社が点在しているとも思わないが、テノの言葉を聞くと高位の存在は地球にとって神様のような存在に思えてしまう。

「そーっす。始祖 …… リーンさんは何だと思えます？」

突然話しを振られ、凜は迷いながらも途切れ途切れに言葉を紡いでみる。

「始祖：ですよね。オレのいた所だと神様がいて、神社で奉つてあったりしたんですけど、ここみたいに身近じゃなくて。人の形で描かれている神様も多いんですけど…すいません。想像つきません」

お手上げ、とばかりに両手を上げた。

恐らく、基本的に地球の神とは違うとは思いますが、それが何なのかは想像がつかずに天を仰ぐ。

「リンさんの所も、面白そうっすね」

「…そうですね。神話が多いですよ。国によっても色々な神様がいて、やっぱりその神様の話がありますし。今度…話します。うん。多分、色々とあって面白いと思いますし」

凜の言葉にテノは約束つす、と笑みを浮かべると、改めて表情を真面目なものへとかえて凜を見つめる。

「この世界の始祖は … 竜、なんすよ。古代神・白竜」

「…白竜？」

予想外の始祖の存在に、一瞬言葉に詰まる。

「白竜は対である黒竜を作り、二竜が力を合わせて様々な色の竜を作ったんす。二竜に作られた色の竜から属性の竜が生まれ、力を持つ存在の誕生の余波を受けて精霊や魔族がこの世界に誕生したんすよ」

テノの口から当たり前前に語られる言葉にの羅列に、本当に異世界



なんだと実感すると同時に、凜の中に言葉では表しようのない不安が生まれた。

どうしてなのかは分からないが、胸の奥から沸きあがってくる。

「簡単に言うつつすね。オレの金は陽竜の恩恵の証なんすよ。まあ…今となっては既に絶えた竜族が多いんで、恩恵は減って自然は壊れていつてるっす。

こうなったら、竜族の先祖還りに期待するか、加護持ちの竜還りを期待するぐらいっすね」

この世界の重要機密であろう内容を一気に詰め込まれ、整理出来ない情報が凜の中に溢れていく。が、その中でも分かった事だけを纏めていく。

恐らく、凜の言いよの無い不安はきつと、始祖が白竜という事。

優しい眼差しを凜に向けているテノがそれを感じているかはわからないが、凜がある程度の答えを出すまで待っていてくれるようにも思えた。

「…いっぱいいいばいなんですけど、何となく、わかった事が増えました。先祖還りと加護持ちの竜還りについては後で考えます。言葉でイメージすれば、何となく分かるような気がしますし。」

それで…テノさんは陽竜の恩恵なんですよ？ 陽竜って…どの竜から生まれたんですか？」

色から属性が生まれた、と言葉の意味を考えると、今日会ったばかりのアンジェリカの属性が分かりやすいのかもしれないと思う。アンジェリカは火。火は赤。赤竜から火竜が生まれたのだろう。そこまで考え、テノのルートを考えた瞬間凜の頭は行き詰った。

「陽竜は、光竜から。光竜は、白竜から。そう考えると、対の黒竜もわかりやすくなるっすね」

テノの言葉に、凜は迷わずに頷いた。対で考えると、黒と白の竜は分かりやすい。

「人は書かれてないんすけどね。創世記に。まあ、人の事だからきつと勝手に沸いたっすね」

笑い混じりに紡がれる言葉に、凜は思わずテノを凝視してしまう。一瞬感じたテノの本音の部分に反応してしまったのだが、不自然にならないように視線を逸らそうにも、既にテノと見詰め合っている状態でそれは不可能だった。

「当たりっす。ま、その辺りは追々わかるっすよ。ああ、でも、リンさんは好きっすよ。それは、勘違いしないようにして下さいっす」

「大丈夫ですよ。色々世話になってますし。流石に、この状態でテノさんに微妙に思われていたら、オレでもへこみます」

テノの真摯な声音で言われた時、何故かリンさんだけはと聞こえた気がして戸惑ってしまふ。テノと会ってからまだ、それほど時間が経過したわけじゃない。

それなのに、テノは凜を中心にして行動してくれているという確信めいたものもある。それはまるで琥珀と通じるものがあり、凜はどうしてだろうと考える。が、その理由としてたった一つだけ思い当たる事があった。

色。

琥珀は白金。テノは金。

そして凜は、白。

「はい、リンさん。ストップっすー。眉間の皺が痕になったら泣くっすよ」

思考を中断させるように、テノの指先が凜の眉間へと触れ声が耳元で聞こえた。

「ッ！」

「くすぐったいっすよね。肩の力は抜けたっすか？」

息を吹きかけられた左耳を押さえつけたまま、とりあえずテノの言葉に力いっぱい頷いておく。

「もう、考えません。から、とりあえずこれは止めませんか？」

本当にくすぐったいんです、と泣き言を漏らす凜に、テノは晴れ晴れとした笑みを返すだけ。

「テノさんは平気なんですね…」

今までの空気を全て壊すようなテノの態度は態とだとは思って、流石にそれに逆らってまで思考を沈める気はないので変わった場の雰囲気に従っておく。

「平気ですよー。リンさんは苦手なんすね」

態とだとは思うのに、テノの笑顔が必要以上に楽しげで、凜は無意識にテノから距離をとっていた。

「ん？」

「さ、帰りましょうか。そろそろヒースから連絡が来る頃だと思いますし。ね？」

ジリッと距離を詰められる前に、凜の方からも話題を変える。とはいつても、そろそろ本当に連絡がきそうな時間ではあるのだが。

「（でも…竜がいるなら会ってみたいな）」

と、最後にそんな事を思い、凜はその思考に一時的に蓋をした。

流石にこれ以上遅くなると、本当にヒースが怖いと思いつつ苦笑を浮かべる。本当に、いつの間にかこの世界に慣れ始めている自分に違和感を感じる事もなく、ただ当たり前のようにそれを思う。

「ヒース様も、過保護すからね」

タイミングよくテノが苦笑交じりの言葉を紡ぎ、まったくです、とばかりに凜が頷いた。

## 幕間く新たな出会い

城内だけじゃなく、城外への外出許可が下りたのか三日前。

玉作成の手伝いと、レシピ集が売れた件での賃金という名のお小遣いをもらったのが二日前。

凜の持っていた文房具を基に、テノが開発した文房具の売出しが本日。

それを理由に外出理由をもぎ取った凜は鞆を肩にかけ、街へと足を伸ばしていた。目的地は勿論テノの知人の店で売り出されるといふ文房具の購入と、とある物を買う為。文房具に至ってはテノから一式貰えるらしいが、やはりこういうのは自分自身で買いたいと店を訪れ、記念とばかりに何点かを購入して店を後にした。

地球で使用していた文房具は馴染みがない所為か、行列が出来るような騒ぎではなかったが既に水面下で人気が広がっている為、売り切れるのは時間の問題だろうという話し。

「（良かった。開発だけしてもらって売れなかったらどうしようかと）」

実際はテノが興味をもったのだが、それでも開発に至ったきっかけは凜という事で、緊張しながらテノが準備してくれた資料に目を通したりしていたのだ。これで一息つけたと安心したようにもう一度店へと視線を向けた。だが、店に視線を向けた時に視界に何かが入る。

一瞬、見覚えのある色彩が視界を掠めたのだ。

「あれ…」

フードを被っているけれど、確かにあの色彩はと恐る恐る名を呼んでみる。

「アーフィイ？」

暗闇の中で見た姿。剣を向けられ、腹もたつたがそれでもその怒りは続かずに闇の中でキミドリさんと呼んだのはつい最近のはずなのに、日々の密度が濃い所為か随分と昔の事のようにも思えた。

「なっ！」

「な？」

呼ばれた名に反応してか、それとも凜の声に驚いたのか一気に拳動不審なつたアーフィイが肩を揺らして凜を指差す。

「何でここにいるんだよ！」

「街だからオレが居てもおかしくはないよね」

寧ろ初めて会ったのここだから。と言葉を付け足せば、確かにとアーフィイが頷く。やっぱり素直な性格なんだな、なんていう眼差しを凜が向けてみると、居心地が悪そうに身を振りそっぽを向くアーフィイの表情は気まずそうなもの。

「…広い街で、何でこの店の前にいるんだよ」

ぼそりぼそりと街ではなく範囲を限定して呟くアーフィイに、凜は買ったばかりの包みから文房具を取り出した。

「これを買いに来たんだ。アーフィイも？」

この店の前という事はそうかな、と予想をつけて聞いてみると首を横へと振られた。どうやら違うらしいが、アーフィイは雑貨屋の

前から離れずに気まずそうに視線をさ迷わせるだけ。最終的に何かを観念したのか、さ迷わせていた視線を凜へと向ける。

「知り合いが買いに来たんだ。結構書いたりするから、羽ペンよりこつちの方が楽だろ」

「そうだね。オレも便利だと思っよ」

知っているとは言えないが、同意はしておく。それに何かを感じ取ったのかアーフィイは怪訝な眼差しを向けてきたが、店先から男の声が響くとそれに手を上げながら応えていた。

淡々とした声音。タイプは違うがどうやら仲がいい相手のようだと微笑みを浮かべながら、凜は店先から離れる為に歩き出した。とある理由からもう会いたくないと思っっていた相手。

つい声をかけてしまったが、態々アーフィイの友達まで凜が知る必要はないだろうと、そう思いながら離れた。が、相手はそうは受け取らなかつたらしく突然伸びてきた手に外套を引っ張られ、後ろへとこけそうになる。

咄嗟の事で反射的に受身を取ろうとするが、それよりも先に外套を引っ張ったであろう腕が凜の背を支える。仰向けに近い状態で視界に広がったのは初めて見る青年。どうやら転ぶ寸前に受け止めてくれたらしいが、その理由は目の前のフードを深く被った青年だと思っくと、礼を言うべきかは少しだけ迷っう。

アーフィイと同じくフードを深く被った理由はこれかと、青年の色彩を見てそんな言葉が脳裏を過ぎる。

「（…黒だ。久しぶりに見る色彩）」

自分が置かれた体勢の事が外套を引っ張った理由とか、そんなものは全て後回しとばかりについて、懐かしい色彩に目を奪われる。だが、この色彩は凜にとっては馴染みのあるものでも、この世界ではほぼ在り得ないものだと思っ直す。それを考えると、これは関わるべきではないなと思っが何故か背に回された腕が離れる気配はな



い。

「あの時の、女か。確か…リーン？」

目を細め凜へと問う男に、凜は迷う事無く首を傾げる。あの時の女も何も、凜は目の前の男に会った記憶は無い。

「あ…あの時、コイツもいたんだ。同じ空間じゃないけど」

凜の疑問を感じ取ったのか、アーファイが補足をいれてくれる。

「ああ。あの暗闇の主？」

アーファイの言葉で思いついた事を言ってみる。

先日のテノの話しを聞かなければわからなかったが、聞いた後だとよく分かる。漆黒の髪と瞳を持つ存在が操る力。色彩が黒なら、闇はお手のものだろう。

「へえ…よくわかったな。あの時は確か、魔法を知らなかっただろう？」

感心半分と、興味半分の眼差しと声。その言葉であの時は青年の手の中にいたのだろうと実感させられる。

「勉強したからね。少しはわかるよ…で、助けて貰ったのは嬉しいんだけど、そろそろ腕を離してもらってもいい？」

未だに男の手は凜の背中に回されたまま離す素振りすら見せない。あの時会ったらしいとはいえ、言葉を交わしたのは今回が初めて。それなのに、距離が近い気がする。凜は迷ったように男から距離をとる。

「自己紹介がまだだったか。俺はクロイツ。見ての通り、色彩は黒だが属性は秘密だ」

「そうなんだ」

男　クロイツの言葉に、凜は興味なさげに呟く。実際、黒の色彩を持っていても持っていないなくても凜には関係ないのだ。逆に親しくなりすぎると困る相手だという自覚だけはある為、ある程度距離を取る事は忘れない。

「オレはリーン。もう知ってるとは思っけど」

だが、自己紹介をされたらやり返さなければと名乗ると、クロイツは面白そうな笑みを口元へと貼り付ける。そして、徐に凜へと手を伸ばしフードを右手の平で滑らせるように下へとおろした。

「だぁーっ。クロイツ！ お前は本当にクロイツか！？ 珍しいぞ。珍しすぎるだろっ。ちょっと俺に気遣いを持って。お前がこの店で買い物したいって言うから付き合っただろっ！」

その行動の意味を問うよりも先に、ほっっておかれたアーフィイが耐え切れずに叫んだ。友人の本来なら在り得ない行動の数々に許容量をあっさりを超えたらしく、辺りに気を配る事もなく注目を浴びる事も気にせず大声で叫ぶ。

「うわ…これはちょっと恥ずかしいなあ」

その声は注目を浴びるには十分で、他人のフリを決め込みたいがクロイツの指先は未だに凜のフードを掴んだまま。そしてアーフィイはそんなクロイツに対して指を指した状態で肩を上下に動かしている。

他人のフリは難しいらしいと凜が一瞬で諦めるとほぼ同時に、クロイツは左手の人差し指と親指をこすり合わせて音を鳴らす。それに反応するかのように、三人の体が闇へと呑み込まれその場から姿を消した。

まるで初めからそこには誰もいなかったかのように、痕跡すら残さずに消えた三人。何故か誰もそれを疑問に思うこともなく、すぐにいつも通りの風景へと変わる。

闇に呑み込まれ、凜は一人暗闇を歩き続けていた。

呑まれる瞬間まで凜のフードを掴んでいたクロイツの姿も、叫んだアーフィイの姿も見えない。

「あの時と同じだね。どうしようかな……早く抜け出さないと、ちよつと怖いな」

この闇の主はクロイツだとわかるが、呑まれた場所が問題だと思っていた。テノの知己の店の前でアーフィイが大声を出して注目を浴びた直後、闇の中へと消えたのだ。そこから戻る前に戻らないと思いつながら、凜は玉に視線を落とした後に考えるように瞳を閉じた。

脱出用の玉は作ってはあがるが、この空間で上手く発動出来るだろうかという不安もある。その不安もあるが、別の不安の方が大きいのかもしれない。

凜がある一定以上の魔力を行使すると発動するらしいヒースのお守り。その一定以上の魔力の基準を、凜は知らない。ひよつとしたら玉に魔力を注ぐだけで報告がいくんじゃ、というあの時の状況を考えればそんな疑惑は捨てきれないものの、玉に手を当てて覚悟を決めた。

「やってから考えようかな」

右手を前へと突き出し、玉を行使する為に呼吸を整えようとした瞬間、その腕を取られ後ろへと倒される。

「って…クロイツさん」

「二回目だなぁ、なんて呑気に呟きながらもクロイツを見上げる。ここだとフードが必要ないのか、顔を覆い隠すものはつけてはいない。」

漆黒の髪と眼の色。素晴らしく整った顔立ち。細身ながら無駄のない筋肉が付き、一房だけ長く伸ばされた髪に付けられた紅の宝石が良く似合っている。

「漆黒…」

暗闇の中でも分かる深い闇色。日本人と同じ黒かと思っていたが、こうして目にするると全然違うと思いつながら、凜は目の前にあるクロイツの長い部分の髪を指先で絡め取った。

「これが珍しいか？」

そう問われれば、凜は迷ったように首を横へと振る。

「黒は珍しくは無いですけど、ここまで綺麗な漆黒の髪は初めて見ました」

「そうか…」

凜の好きなように髪を弄らせるクロイツは微かに笑みを浮かべ、ゆっくりと腰を下ろす。その間も凜の背から腕は離さずもう一本の腕を使って凜を抱き上げると、凜を自身の膝の上へと座らせるようにおろした。

「（お姫様抱っこにこれは…相当恥ずかしい格好なんじゃ）」

距離は近い。体勢も恥ずかしい。こんな時こそ顔を真っ赤にしなから叫んでほしいとつつ込み役のアーフィイの姿を探すが近くに

る気配は無い。

「アーフィイは、ちょっと離れた場所に置いた」

凜の視線をさ迷わせる理由に気付いたのか、答えてはくれるが紡がれた言葉は予想外のもの。

「…何で、ですか？」

思わず凜が問えば、クロイツは薄い唇の端を上げて笑みを形作る。

「少し、二人つきりで話して確認したかった」

「確認…？」

そんな凜の疑問の言葉にはクロイツは答えず、弧を描いて表情全体で笑みを作った。先ほどの意味ありげなものとは違い、優しげな雰囲気さえ感じる笑み。

それに、違和感を感じた。

凜に向ける笑みが胡散臭い、といった理由ではなく、何処かで見たとような気がしたのだ。

「どうして…：…気付かないんだろっな。ああ、アーフィイのヤツは鈍いから仕方ないのか」

そんな凜の迷うような表情をクロイツの言葉に対してのモノだと思ったのか、疑問には答えずに別の言葉を紡ぎ始める。それはどちらかというと独り言に思えた。

当然疑問はあるものの、凜はクロイツの醸し出す雰囲気懐かしさを感じて何も言えなくなる。

「これ以上は怖いヤツからの妨害が入る」

クロイツの眩きが耳に入ると同時に、凜の背からはクロイツの腕が離れていた。その言葉の意味を尋ねたくても、やはりクロイツの空気はそれを許さずに笑みを浮かべた後、凜の目の前を指差す。

「出口はそこだ。今度は…俺が行こう」

その声を同時に、優しく背を押された。

振り向こうとするが足を踏み出した空間は太陽が輝くいつもの場所。最後に黄緑色の色彩が見えたような気がするが、既に出口は消えていた。

「……似てるといえば、琥珀さんか」

黒と白。雰囲気は対象的だったものの醸し出す雰囲気は似ているように思えた。そう思ったのは凜へと向ける眼差しだろうかとも思うが、問える存在の居場所すら凜は知らない。

「…とりあえず目的のもので買って、帰ろうかな」

凜の声が空気へと吸い込まれる中、暗闇の空間に残ったクロイツとアーフィイは向き合っていた。

「クロイツッ！ お前態とだろ。俺だけ離れた場所に放置しやがって」

凜が消えた歪みへと視線を落としながら怒気言葉を吐き出すアーフィイに、クロイツは迷わずに口元の端を上げながら笑みを作った。

「ああ。お前がいたら、照れて会話にならないからな」

二人つきりで話しながらその身体に触れた事によって確信が持てた。だが、目の前で真っ赤になって否定するアーフィイには何も告げずに、口元の端だけを上げるといふ笑みを浮かべクロイツは闇を隠れ家へと繋げる。目的のものも買えて、初めて会った瞬間から確かめたかった事も確かめられた。

偶然とはいえ今日の成果は中々だと、疲れ果てたアーフィイとは真逆にクロイツの表情には笑みが浮かぶ。

「はあ……つたく、色々意味わかんねー。お前はいつもより饒舌だし機嫌良さそうだし　魔法を知らないはずのリーンの魔力は安定してるし玉をじゃらじゃらつけてるし」

頭をボリボリと音をたてながら掻くアーフィイに、クロイツはそうか？なんてわざとらしく首を傾げながらもそれには気付いていたのかと感心するが、それとは別の思考で凜に触れていた手の平に視線を落とす。

「（安定には気付いても、この特別にまだ気付けないんだな。やっぱり黒や白じゃないからか……）」

それに、あの時クロイツに対してプレッシャーをかけてきた怖い存在にもアーフィイは気付いていないようだった。もし気付いていたのなら、いつも通りにながかりと肩を落としながら拗ねたように口を尖らせる事など出来なかっただろう。

「置いてくぞ」

そんなアーフィイを、普段の口数に戻ったクロイツが容赦なく小さめの出口を一つだけ作り置き去りにする。恐らく何かを叫んでいるだろうが、既に太陽の下に戻ったクロイツに届くはずもなく、放置を決め込みさっさと部屋へと戻っていく。

「……アイツ、ほつんと何なんだ。別に俺は照れてねーって……俺が行くって逢いに行くって事だろ？　やっぱアイツおかしいよな？　でもクロイツだったよな？　リーンに、何かあるのか……？」

クロイツの真意には気付かないものの、本来なら在り得ないクロイツの態度で何かを感じとったのか、最後に小さくアーフィイが呟くが、当然、その疑問に答える存在はいない。





幕間く新たな出会い（後書き）

11/6 文章を修正しました。

## 廻る齒車・1

異世界に来てから二ヶ月。

凜を取り巻く環境は変わったようにも思えるが、実際は狭い空間の中で日々を過ごしていた。

大体は図書館に顔を出したり、魔法師団に顔を出したりとしているのだが、それ以外の時間では借りている部屋の掃除をしたり料理を作ったりもしていたりする。自分の事だけでなく、世話になっている屋敷で何かをやらないと落ち着かないというものもあり、凜は自分が出来る範囲で邪魔にならないように仕事を手伝う。

初めの頃は、フェルディナントの客人に手伝いをさせるなどと恐縮した使用人たちから拒絶をされていた。元々、フェルディナントの使用人たちは代々屋敷に仕えている者たちらしく、それぞれの役割がしっかりしていたのもあるのかもしれない。

そこに一石投じる事となった凜は、根気よく協議という名の説得を続けた結果、朝の庭の水遣りの権利を入手したのだ。

家庭的な雰囲気を漂わせるフェルディナントの屋敷。

そこで二ヶ月の間にすっかり馴染んだ庭師であるニツチに声をかけ、いつものように水をまき始めた。が、つい最近始めた玉の実験で、手作業ではなく魔法で撒くという作業をする為にそれぞれに配置された玉と連結された大元の場所で腰を下ろし、対になっている玉をそれにあてる。

その瞬間、凜が手に持っている玉から大元の玉へと魔力が流れ込み、一斉に水が撒かれ始めた。イメージはスプリンクラー。しかも、魔力を流し込む為に必要な道具として、魔力を溜めておける玉を作った。これにより、魔法が使えない人間でもこの装置を使えるようにしたのだ。

「便利ですよ。本当に」

この広い庭園に水を撒くだけでも一仕事だったのだが、凜がこれを作った後は一瞬で済むようになった。しかも、流れる水の量は設定済みだから撒き過ぎる心配もない。

「便利になったのなら良かったです。撒くだけでも一苦勞ですしね」手伝った当初は、次の日に筋肉痛で悩まされた。桶に杓というセツトで学校の敷地内をゆうに越える庭に水を撒き続けるのだ。

ひたすら撒き続け、ある日目に付いたのは空いたスペース。そこでちよつとした家庭菜園を手伝ってもらいながら、凜は自室で玉作りに勤しみつつ地球の散水装置を玉式にしたものを作り上げた。

スペースを借りて尚且つ手伝ってもらったというお礼の意味もあるが、水撒きをして初めてわかる散水の大変さと筋肉痛に頭を悩ませ、必要にかられてアイディアを搾り出したというのも否定は出来ない。

「とりあえずこの玉はニツチさんに渡しておきますね」

紐に括りつけられた玉を渡し、説明を続ける。

「予備を屋敷の棚にかけてあります。魔力が尽きたらそれと交換して使って下さいね。補充はオレでもフェルでもヒースでも、魔力さえあれば誰でも出来ちゃいますから」

既に話しは通し済みで、色が変わった玉には魔力を注いで貰える事になっている。が、今は改良版に取り組んでいたりする。まだ形にはなっていないので内緒だが、人の手ずからではなく魔力が自動補給出来るような玉を作っているのだ。

ヒントはテノの言葉。

太陽が輝いていたから、野外で訓練をした。

目指すは太陽の魔力を取り込める玉。

夕食の後の時間を使い、ノートに纏めながらアイディアを書いたり実験を重ねていくのだが、先日文房具一式を購入しておいて良かったと心底思う。

思考が実験に飛びかけた所で、ニツチから声がかかる。

「リン様、そろそろアリサが待っている時間では」

アリサ、というのはフェルディナントで働く侍女の一人で、凧とは年齢が近いという事でこの屋敷に世話になりだした当初から何かと話す人物でもあった。

「あ…本当だ。ありがとうニツチさん。じゃあ、また後で」

頭を下げて屋敷へと戻っていく凧の背を見送りながらニツチが小さく呟く。

「本当に…リン様が女性だったらなあ」

魔力も高くて気配りも出来て、料理上手で屋敷の主だけではなく友人のヒースとも対等に渡り合える。

女の影すらない主にとってはこれ以上ない程の相手だと、使用人一同が思っているのだが如何せん、性別の壁は厚いと常々嘆いているのだ。

「お待たせ」

既に厨房で材料を準備して待っているアリサに声をかけると、瞳を輝かせながら振り返るアリサについ笑みが零れた。

どうやら、凧がガツチリと胃袋を掴んでいるのはフェルディナントだけではないらしい。凧自身は自覚はないが、フェルディナント

の屋敷の使用人だけではなく、先日売り出したレシピ集の虜になつた者も少なくはない。寧ろ第二段を切望されているのだが、それが凜の耳に届く事は当分ないだろう。

「今日はプリンを作ろうか」

結構手軽に作れるし、と呟く凜の言葉にも、メモとペンを両手に持ったアリサが真剣に頷く。早く作り出さないと料理には関係ない言葉も書かれそうだと、プリン作りを始めた。

この世界には冷蔵庫というものがない。初めの頃はそれが理由で色々とするものも諦めていたのだが、最終的には氷の陣を描いた玉を作れるようになったおかげで、冷蔵庫や冷凍庫らしきものも完成出来た。原理は概ね、庭の玉式散水と同じ。違う点といえば、冷蔵庫の方は常に魔力を使っているという所だろうか。

現時点では氷の陣が込められた玉と魔力を常に放つ玉をセットにして置いてあるが、この分でいくと交換時期は二ヶ月といった所だろう。

そんな冷蔵庫を一心不乱に見つめ続けるアリサに、凜は時間を確認した後、声をかけてみる。

「そろそろ、大丈夫かな」

「本当ですか！ 開けますね。開けちゃいますからね！」

声を弾ませ、最近では慣れた冷蔵庫の扉を開けて中からプリンが入ったトレーを取り出す。ぷるん、とプリンらしい揺れに、アリサの心も揺れたのかその場で立ち止まりジッとプリンを凝視していた。

「じゃ、作った人の特権で…試食してみようか。ね」

アリサの手からトレーをとり、その代わりとばかりにプリンの器

とスプーンを手渡す。驚いたように目を見開くアリサだったが、凜に頷かれるとスプーンで掬い、おそろおそると口元へとプリンを運ぶ。

口にいれた瞬間、再びアリサの瞳が輝いた。

「美味しいです！ この間のホットケーキやシュークリームやシフォンやマフィンと同じくらい美味しいです！ カラメルソースっていうのと一緒に食べると、また感じが変わるんですね」

「気に入ってくれたなら嬉しいよ」

というより、そんなに作ったつけ。と、ある意味餌付けの回数が多さに改めて驚く凜を他所に、アリサは一口食べては何かをメモへと書き残す。

だが、どうやら今回のお菓子も成功だったらしいとホツと胸を撫で下ろしながら、凜はトレーにプリンを三つとスプーンを用意すると、残りを配るように頼んでフェルディナントの部屋へと向かう。

現在、フェルディナントの部屋には珍しくヒースが訪れていた。

普段は職務終了後の夜。特に夕食時に顔を出す事が多いのだが、この時間に来たのは初日だけ。

それを考えると何かがありそうだったが、フェルディナントが屋敷にいる時に三時のおやつを持っていくのは既に恒例。ヒースも文句は言わないだろうとは思ったが、それでも遠慮しながら扉をノックした。

トントン、と音が響き渡った次の瞬間。

「どござ」

フェルディナントの声が聞こえた後、ゆっくりと扉を開けトレーを見せる。

「食べるよね？ 三時のおやつ」

開けた瞬間に感じ取れる緊張した雰囲気。普段の二人からは考えられない空気に、凜は足を踏み込む事を躊躇してしまいが、プリンに視線を落とした後は覚悟して二人の前へと歩いていく。

「今日のおやつは何？」

「とうかさ、最近屋敷で書類整理をするようになった理由ってこれじゃないよね？」

空気をいつものものに変えて、フェルディナントが机に手を置きながら身を乗り出すようにトレーを見つめる。そんなフェルディナントに凍えるようなヒースの声が突き刺さる。が、フェルディナントの視線は既にプリンだけに注がれている。

「プリンっていうお菓子。アリサさんと作ったんだ」

器とスプーンを手渡した後、妙な沈黙の中三人で食べ始める。凜の作る三時のおやつに慣れているフェルディナントはひたすら食べ、ヒースは食べながら感想を述べていく。

「これは？」

「カラムルソース。好みが分かれるけどね」

「へえ。俺はあった方が好きだね。フェルは…どっちも好きっぽいね」

チラリ、と視線を流せば既に食べ終わっているフェルディナントの姿が視界へと収まる。本当に胃袋をガツチリ掴まれてるよね、というヒースの呆れた声音に、凜はとりあえず笑っておいた。

おやつを食べ終わった後の和やかな雰囲気は一瞬で崩れ去り、再び緊張した空気が部屋の中を支配する。

そんな中、フェルディナントが机に置かれた一通の封筒へと視線を落とした。何も書かれていない白い封筒に、カードが一枚。カードにも文字が書かれているようには見えないが、それを見つめるフェルディナントとヒースの目は厳しい。

「オレ…も、いた方がいいのかな」

緊張が自分に向いている気がして尋ねて見たのだが、ハッと息を飲む二人を見るとその通りだったらしいと凜は改めて二人へと向き直る。

この二人がここまで緊張する理由を、凜は一つしか思い浮かばない。

「決まったんだ。いつ？」

真っ直ぐに見つめて問えば、フェルディナントの眼差しが揺れた後、決意の色を宿して凜を見つめ返した。

「明日…になった」

フェルディナントが言いづらそう、というよりは辛そうに言葉を紡ぐ中、それとは反比例するかのように凜の心が冷静さを取り戻していく。

元々、こういう話しだったのだ。その間に思いのほか情が移ったのだろうと思うが、凜は唇で弧を描き綺麗な笑みを形作るように心がける。

「うん。わかった。時間は？ 案内とかは二人がしてくれるの？」

淡々、というよりはいつも通りの凜に、ヒースが眉間を寄せる。

「あっさり…だね」

ヒースも何処か迷うように、瞳の奥を揺れさせながらも凜を見つめた。

だが、すぐさま自身の言葉を否定する。

「（違う。これは予想範囲内だ。リーンは覚悟をしていた。揺れたのは、俺とフェルだ）」



覚悟が足りなかったのは、フェルディナントとヒース。二ヶ月間続いたこの関係が居心地がよくて、ずっと続くんじゃないかと錯覚さえしていた。

どうなるかは誰にもわからないというのに。

ヒースは落ち着かせるように体内の息を外へと吐き出し、ゆっくりと酸素を体へと取り込む。

「この屋敷から行けるよ。時間は朝食を食べた後ぐらいかな」

平気なフリをして説明を続けるヒースに、無言のフェルディナント。ヒースよりも同じ屋敷で共に暮らしていた分だけ、言葉に詰まってしまったのだろうとは思う。それはわかるが、凜が覚悟しているのに突きつける側の態度がこれではと、ヒースはロッドを取り出しそれでフェルディナントの後頭部を殴りつけようとした。

「ッ!?!」

が、反射的に反応して剣で受け止めるフェルディナントに、ヒースはもう一つのロッドを振りかざす。だが、その一撃を左手で受け流すとヒースを睨み付けた。

「何を…?」

「辛気臭い顔をして黙ってるから、起こそうかと思って」

「人の事言える顔か?」

殺気立つフェルディナントに、真っ向から受けてたつヒース。このままいくと確実に血を見る事になるだろうと思った瞬間、凜の魔法が発動した。

「ッ!?!」

「フェル、ヒース。そろそろ止めようか? ありがとう、オレも、

二人の事は好きだよ。それは本当。だから、明日陛下に会って自分の立ち位置をしっかりと決めてこようと思う」

二人の苛立ちは予想以上に凜と親しくなってしまったから。それぐらいは凜にも分かる。だが、それでも、凜は陛下に会わない限りは客人という立場のまま。地球に帰れる帰れないなど色々考えるべき所はあるのだが、会わないと全てが始まらない。それぐらいはフェルディナントも、ヒースもわかってはいるのだ。

「…ああ。そうだな。喧嘩はしないから、戒めを解いてくれ」

「俺も約束するよ。リーン。ごめんね。ありがとう」

その言葉に、凜は嬉しそうに頷く。

二人は知らないが、凜にとってもこの関係は予想外だった。20年生きてきた地球ですら他人とこんな関係は築けなかったのに、フェルディナントとヒースとはたった二ヶ月で家族のような絆を感じてしまえるまでになっていた。

初めは互いが内面では探り、疑っていたのに何時の間にも。と思っ  
てしまうが。

「（まずいな…二人も気持ちかなり嬉しいのが…オレも重症だ）

音に出す事はない凜の本音。

どんな結果でも覚悟しているつもりだったのに、今更揺れてしま  
いそうだと、困ったなど、凜はそんな本音を奥深く沈めるように瞳  
を閉じた。



## 廻る歯車・2

いつもの時間に起きて軽めのジョギング。

軽く身体を動かしてから、備え付けのシャワーで汗を洗い流す。

この屋敷に世話になりだしてからの凜の日課。

凜にとってフェルディナントの屋敷は広く、部屋数は二十ほどあり、その全てにシャワー室が完備されている。

広いね。とフェルディナントに言った事があるが、そうか？ 狭いだろ。というあっさりとした言葉が返ってきた。

庭があつて離れ　こちらは使用人たちの住居らしい　があつて畑もあつて、これで狭いと言い切れる感覚は凜にはわからない。が、異世界だしな、という魔法の言葉で納得しておいた。

ここ二ヶ月ですっかり私物が増えてしまった部屋を見回し、凜の口元には笑みが浮かぶ。

初めはただの客室だった部屋。必要最低限のものがあるだけの殺風景な部屋。

だが、今ではフェルディナントやヒース、テノが色々と差し入れをしてくれるので、殺風景だった頃とはまったく別の部屋になっている。

衣服も増え、タンスも完備され、いつの間にか勉強机のようなものが部屋の隅に置かれ、その横には室内で出来る研究用の道具棚が置いてある。気がつけばこうなっていた、今ではすっかり凜の部屋になってしまった元客室。

そして、一際目につくものといえば、昨日の夜渡された今日の為の衣服。

謁見用のもの。凜の知らない決まり事や、陛下との謁見で普段着は駄目なんだろうなと受け取ったが、改めてそれを手にとってみる

と溜息しか出てこない。

手触りからして相当の品。

陛下に会う為に礼服を身につけるといふのはわかるが、こんな良い物で作る必要があったのだろうかと思わずにはいられない。

多少の収入があったものの、これを買うには及ばない凜の寂しい財布。

「（…財布の中身が乏しいって辛いなあ…）」

陛下に会うまでは凜の立場は不確かなもの。魔法師団でのアルバイトがある意味予定外だったのだろうとは思うが、とりあえず身が無事だったなら初めにアルバイトをしよう、と心に固く誓っておく。とりあえず、上質過ぎる生地には戸惑いながらも身につけ、鏡の前へと立つ。その際、髪の毛の根元を確認しながら安堵の息を吐き出した。どうやら上手く染まったらしい自分の髪の毛。

多少の収入がなければ、これもどうなったかはわからないが、本当は多少の収入もフェルディナントに渡すつもりだった。それは断られ、結局凜の懐に収まった。

今となってはそれで助かったのだが、やはり内心は複雑なまま。珍しく感じる緊張に、余計な事まで考えてるなあ、なんて呟く。だが、それでも時間は迫り、落ち着かないまま準備を終わらせた。

最後に部屋を見回した後、慣れ親しんだ部屋に背を向ける。

部屋は片付けなくていい、と言われた。

だから、あえて何もせずに部屋を出て行く。

「（けど…これだけはいいか）」

ここ一ヶ月の間に世話になった立ち入り許可証。そこには、知り合った人たちからのサインが入っている。

謁見の結果次第でこれは意味を成さないものになるが、それでも凜にとってみたら、この世界で一番大切なもの。

本当は陛下の事を聞きたかったが、それは怖くて聞けなかった。

一ヶ月も城内をうろつけば、様々な情報は耳に入ってくる。その

容姿や手腕を褒め称える言葉しか聞いた事のない陛下。

そして、この世界で稀有な存在であるという事も知っている。

竜返りに先祖返り。

力のある人間。よりも一段階抜きん出た存在。

「将来は……うん。いや、考えても仕方ないか。今はそういう話しじゃないし。よし、行こう」

珍しく声を出し、自分自身に気合をいれる。

その際、目に痛い程の純白の裾がちらつくが、そこはあえて考えない事にした。

考えれば、きっとあまりよくない結論に至る。それでも、自分の秘密事がばれたような気がして、この純白の衣は心臓に悪い。

「リーン、終わったか??」

その時、タイミングが良いのか悪いのか、ノックの音とフェルディナントの声が響く。

「終わったよ」

扉を開け、今回の衣服の披露をしながら凜は笑っておく。

「似合うな。うん。作って貰って良かった」

「フェルも似合ってるよ」

そういうフェルディナントの格好も、普段とは意匠が違い上質なもの。二色のマントは相変わらずだが、その生地 of 輝きが違うのだ。都城の格好は普段のやっぱり違うんだなと実感していたら、凜の目の前にはフェルディナントの手。

「ん？」

差し出された手に持たれた布袋。

押し付けるように渡され、それをフェルディナントの言われるが

ままに開けてみると……。

そこに包まれたのは肩に掛けるであろう二枚のマント。白と白金の二色。それぞれが金糸で縁取られ、細かな模様を刺繍されている。「白……が多いね?」

思わず口から出た疑問に、フェルディナントは泣きそつな笑顔を浮かべると。

「白はさ……リーンの魔力の色なんだ。」

白い魔力 レア中のレア。希少価値しかない魔力の色。この世界で最も高貴な色「

……」

テノから話しを聞いていなければ、フェルディナントの言葉に驚きしなかっただろう。今はもう白が特別な色という事を理解している。

琥珀の隠してください、という言葉の意味もわかった。

「けれど、それは置いといて……リーンに似合う色だと思ったんだ」

「そっか。ありがとう」

最後に言われた言葉に、素直に礼の言葉が口から溢れた。

きつと、フェルディナントにもヒースにも他意はない。

白の魔力を持っているから、というのは当然意識しての色選び。

それでも、似合うと思うから、という言葉に嘘はなく、真実だと凛は思っていた。

それでも後ろめたいと感じるのは、凛に隠し事があるからだろう。

「（気に入った相手だから、だろうなあ）」

だからこそ、隠している事に罪悪感を感じる。

別の意味で笑いが漏れそうになりながら、凛は自分に背を向けて

歩き出したフェルディナントの後に続き、重たい足を一步一步と動かした。



「リーン、こつちだ」

外に出るかと思っていたら、案内された場所は今まで足を踏み入れた事のない地下だった。

「この陣から直接城に行くんだよ」

フェルディナントの言葉に、この場で待っていたのかヒースが言葉が続ける。

「そうなんだ」

どんな構造になっているのか非常に興味深い、複雑すぎる魔法陣。こんな時でなかったら陣を解読するのも面白いのだが、如何せん状況がそれを許してはくれない。

「よく似合ってるよ」

円が五つ程重ねられた魔法陣を感心したように見ていた凜の耳に、ヒースの困ったような声が届く。

その直後に引っ張られる感覚。

いつのまにか目の前に立っていたヒースが、先ほど左肩につけたばかりの白と白金の二枚のマントを指先で弄ぶように挟んでいた。

「ありがとう。ヒースも選んでくれたんだよね」

礼を言いながらも、やはり胸をさすような痛みが走る。それは罪悪感でしかなく、ヒースと合流した事によってその感覚は収まる所が酷くなっているような気がした。

お互いが全てをさらけ出すような間柄でもないのに、どうしてこんなふうになるのか。答えは出ているのだが、凜はそれを言葉にはせずにあえて蓋をした。

言葉に出せば明確になる。言葉にしなければ、不透明なままで済む。だからこそこのままでいいのだ。

「（急ぐな　それは、いつもオレが言っていたよね）」  
表面上は変えない。いつも通りの凜のまま。

この世界にきて、地球にいた頃よりも表面と内面をわけるようになったという自覚はある。それは、この世界にとって凜は自分自身が異端だという事を解っていたから。後は、弱い部分を見せたくないから。

そう思っている自分に対して笑みがこみ上げてくる。  
とはいっても、弱さの見せ方も知らないのだが。

「フェル。ヒース。ありがとう。どうなるかわからないから、先に言うておくれ」

元々、一人で会う予定だった。  
だから心構えは出来ている。

それでも、登城の格好をして途中までとはいえ凜に付き添ってくれる二人に、感謝の言葉しか出てこない。

転送陣の前に立ち、二人を振り返る。  
「予言は不確定だったね。結果は、陛下に尋ねる事にするよ」  
最後に二人に微笑みかけ、あっさりと背を向けた。  
そしてそのまま右足を踏み出し、転送陣の中心部に足を置く。

結果が出るまでもう、後ろは振り返らない。

凜は二人から注がれる視線を痛い程感じてはいたが、それには応えずに陣の外にあった左足も内へと移動させた。転送陣の中に凜の身体が入った瞬間、陣から視界を埋め尽くす程の眩い光が溢れ出し、次の瞬間には凜の姿は消えていた。

当初の予定通り、残されたのはフェルディナントとヒースの二人だけ。

「なあ…ヒース」

「何？」

凜の立っていた転送陣の前で膝をつき、名残を感じ取るように手の平で陣の縁を撫でるように触りながら、後ろに立ったままのヒースへと声をかける。

「俺は、リーンの事は心配していない」

「そうだろうね」

「でも… 謁見後は俺の保護下から外れる」

「テノ辺りが名乗りを上げているかもね」

フェルディナントの待遇が悪いとは思っていないが、テノが凜の保護者になったのなら、今の比ではない程の待遇をされるのだろう。そんな光景があっさりと浮かび、つい苦笑いをもらしそうになるが抑え込む。

「そうか。悪いが、譲らない」

ヒースに背を向けている為、フェルディナントの表情はわからない。い。

けれど、いつも以上に淡々とした抑制された声音で、フェルディナントの心情が嫌という程解ってしまう。

「悪い　なんて思っていないのに、よく言っね」

多分、凜が立っていた転送陣を、今まで見せた事のない表情で見つめているのだろう。

凜がいる事が当たり前になってしまったのか。居心地が良すぎたのか。

おそらく両方だろうなという本音は口には出さず、ヒースは静かにフェルディナントの様子を伺っていた。

ヒースとフェルディナントは家同士の繋がりがあり、生まれた時からずっと共に過ごしてきた。家族同然に過ごし、フェルディナントはヒースにとっては弟のように可愛がってきたが、他人に対してこれ程までに独占欲を見せる姿は初めて見る。

「（兄として喜ぶべきか。それとも、よりによってと嘆くべき…か）

「迷うなあ。」

と、小さく呟いた言葉は、誰の耳にも届く事無く空気に溶けた。

眩しさのあまりにギョツと閉じていた目を、恐る恐る開けてみる。ここから先は、凜の知らない空間。しかも初対面の人間。

そして、この国の最高権力者。

2枚のマントを靡かせるように長い通路を真っ直ぐに歩き、行き止まりである壁の前で歩みを止める。

変哲のない、普通の白い壁。に見える場所。

「……多分、これかな」

薄っすらと宙に浮かび上がる文字。

その文字に手の平を翳すようにしてみれば、壁に線が入り扉へと変わる。

ゆっくりと自動で開かれる扉の隙間から見える光景に、ごくり、と喉が鳴る。重厚な雰囲気を漂わせた空間。

赤い絨毯がその雰囲気に拍車をかけているような気もするが、凜は絨毯に向かって足を踏み出す。靴を通して伝わる分厚い絨毯の感触。

一般人の凜にその感触は慣れず、この世界に来てから数え切れない程零した溜息をひっそりと吐き出す。

陣から壁までも相当の距離があったように思えるが、この赤い絨毯も先が見えない。明らかに建物とこの通路の距離はあってはいないが、地球とは違い魔法の存在する世界。凜には解らない細工が施

されていそうだが、やはり凜にはわからない。

もし無事に帰れたのなら、もう少し複雑な魔法を勉強しよう。そんな事を考えながら、この世界で初めて感じていた感覚を紛らわせる。紛らわせなければ、呑み込まれてしまいそうだ。

「（……しかしなんだろうな。この空間。これも魔法なのかな。それとも……）」

陛下と呼ばれる存在がいる空間だからだろうか。間違いないこの奥に陛下が鎮座する玉座がある。

「観察は、もう十分じゃないかな？」

この重苦しい空間に紛れ、探るような視線が向けられていた。初めて感じる感覚に呑まれていけば、視線には気がつかずにその場から動けなかっただろう。

何も無い空間に向かって声をかけるが、まだ、凜の瞳には先の見えない通路があるだけ。だが、視線の主を近くに感じると、凜は何もない空間を睨み付ける様に言葉を吐き出した。

その途端、開ける視界。

凜の前には、黒曜石の玉座に腰を下ろす 黒髪の若い男が一人。

「……………」

互いに顔を見合わせ、口を嚙む。

合わせた視線から、何故か互いに思う感情が同じなような気がして、それが凜を戸惑わせる。

だが、その沈黙を破ったのは凜ではなく、男の方だった。

「はじめまして、か。リーン……と、ここでは呼ばれているんだっ  
たな」

見た目からは想像がつかない落ちついた声。

だが、ここではと言われ、凜は目を見開いて男に視線を投げかけた。

リーンではなく、凜。

ここでは凜と発音出来ない為、リーンで通している。

確かにその通りなのだが、何故それを知っているのだろうかと、疑問しか湧かない。

「本来の音で名を呼ぶ権利は与えられてないからな。

まあ…解るまでは“リーン”で納得しておけばいい」

日本人で見慣れているはずの黒い色を纏う男。

見慣れているはずの黒い色を男が纏うと、まったく違う色に見える。それ程に質が違う黒色。

けれど初めて見る黒ではない。

小さく息を吐き出し、場と男に吞まれかけていた意識を引き戻す。琥珀とクロイツの顔を思い出せば、陛下の雰囲気吞まれる事はない。

「では、初めまして陛下。俺は鈴風凜と言います。ここではリーン、ですけどね」

凜は陛下に向かってにつこりと弧を描き、分かり易い笑みを浮かべた。

「はは。どうやってもリーンとしか聞こえないんだな。 ……は初めてだから、新鮮な体験だ」

明らかな凜の作り笑いに、陛下は心底面白いと言わんばかりに声を漏らしながら笑う。凜の場合作り笑いと言っても、それがほぼ生まれながらに備わったものであり、他者から見るとその作り笑いが本来の穏やかな笑みに見えるのだが、どうやら陛下には一切効果がないらしい。

だが、それは陛下だけではなかった。フェルディナントもヒースも、テノにも効果はあるように見えな

い。「…この世界の住人は、作り笑い探知機でもついているのかな…」  
心底不思議に思うが、どうやらその表情がまた陛下の琴線に触れたらしい。いつまで経っても止まない笑い声。

この声を聞いているだけで、勝手にだが陛下像を想像で膨らませて、柄にもなく緊張していた自分が馬鹿らしいと、凜は完全にいつもの落ち着きを取り戻す。

凜の心情を見計らったかのように、陛下も笑い声を納め口角を軽く上げるような表情を形作り、凜を玉座から見下ろした。手の平の上で転がされているような錯覚に陥るが、強ち間違いないだろう。

流石、賢君と名高い陛下。

どんなタヌキが隠れているか分からないと、凜は改めて背筋を伸

ばし、陛下を真正面から瞳にその姿を写しこむ。

沈黙 …… に支配される。

どちらからともなく口を開く事もなく、互いを見定めるようにただその瞳に相手を写すだけ。

これで何が分かるのか。  
探れるのか。

何も分からないまま、ただ相手を見てるだけ。

「……俺の沈黙に耐えられるんだな。それはそれで驚きだが……まあ、名乗らせといて俺が陛下のままじゃ拙いか。拙いな」

「…？ 別に気になりませんけど」

陛下の言葉に、凜は不思議そうに目を瞬きながら徐に言葉を紡ぐ。凜にとつてみたら、この世界に来た時から陛下は陛下だった。

特に個人名を気にするような間柄になったつもりもなければ、別に興味の対象でもなかった。一つ陛下の事を気にしていたといえれば、今後の事だけ。凜がこの後どうなるかの鍵を握っているのは、陛下だ。

それは、陛下に決めてもらうしかない。

「そう言うなって。誰も呼ばなくなつてどれくらい経ったかな……。まあ、関係ないだろうが一応名乗っておくか。俺の名はネイリール・ジャデーラ・キリイルナイラスだ。親しみを込めてネイと呼べばいいさ」

サラサラと手入れなどまったくいらぬような短くも長くもない闇色の髪を払いのけ、陛下 ネイリールは自信を覗かせる様な微笑を浮かべた。

「（成る程。この笑みで付いていく人は居そうだな）」  
自信溢れる表情。

この人についていけば何も心配はいらない。



その笑みだけでそう思わせるには十分な程の魅力溢れる表情。とは言っても、フェルディナントやヒースが絶対の信頼を寄せる理由は、この笑みだけじゃないだろうと思う。

絶対的な理由は、やはりネイリールが纏う闇色だろう。だが、真正面から堂々と観察していてふと小首を傾げたくもなる。

フェルディナントやヒースと同じく、一つの色彩をこれでもかという程身に纏っているのに、あの二人とは何かが違うのだ。

「……」  
凜の沈黙に、ネイリールが再び表情を崩して笑う。

「リーンは、俺の闇色」といつても闇闇の色が気になるらしいな  
「闇闇の色？」

「ああ。純粋な闇から生れ落ちた闇闇。決して真実の闇には届かない子のような存在だ」

「……」  
口を開きかけ、リーンは考え込むように口を閉じた。

思考はこれでもかという程動き続けているのが、浮かんだ考えは間違いじゃないのだろうと、凜は改めてネイリールの全身を視界へと収める。

ひよつとしなくても、今は重要な言葉を聞いている。それだけは間違いない。

「フツ…感じが良い、と言えはいいか？ ヒースやフェルとの違いを感覚だけで捕らえられる人間は稀だ。何せ、一般人には区別が付かないからなあ。」

あの二人と、恩恵もちの違いはついたとしても、俺とあの二人の違いは…な」  
意味ありげに間を空けられた言葉。

恐らくと言うより、絶対に凜はネイリールから疑問の答えを貰っている。

そして、何故かそれを疑問に思うよりも当たり前だと感じる自分

がいて、どちらかというところ戸惑っているのかもしれない。

「俺の加護は暗竜。対はテノの陽竜と言えばイメージは付きやすいか？」

ニヤリ、と人を食ったかのような意地の悪い笑みを浮かべ、ネイリールは玉座に背を付け悠々と腰掛ける。

テノは金色の髪を一部分に持つ、陽竜の恩恵を預かる人間。確かに彼が陽の輝きを持つとすれば、規模は違うもののネイリールは闇の輝きを持っている。テノがネイリールのように全てが金色になれば、まさしく対だろう。

「そうですね。テノさんの対、といえば納得です。陽竜の対だから暗竜。けれど、ネイさんはテノさんとは絶対的に違うものがある。」

それはきつと、フェルやヒースとも一線を駕しているんですね」  
なら、答えは一つしかない。

凜がそう言った瞬間、ネイリールの表情から色が全て見え失せる。まるで凜がその答えを言うのを待っていたかのように、その眼差しだけで続きを足す。

「ネイさんは……恩恵じゃない。加護でもない。それよりも近付いた存在 …… 受けるじゃなく、与える存在」

この答えはきつと、凜にとっては目を逸らしたかったもの。

でも、ネイリールは知っているのかどうかは分からないが、凜にはつきりと自覚させようとしているかのように、表情をなくしたまま続きを待つ。

無意識に、喉がなった。

口の中がカラカラと乾く気さえする。

きつと、ここで答えを明確にしなくても、時間の問題である事には変わらない。

「（……この世界で違和感がないはずだ）」

なら、この世界に凜を導いたのは声の主なのか、それとも凜自身なのか。

両方なんだろうな、なんて笑いながら、無表情を装っているネイリールと視線を合わせた。

「貴方は竜還りだ。加護持ちよりも竜に近付いた。いや、竜として蘇る事を約束さた……人間ですね」

こういう時は琥珀という存在を思い出す。

琥珀とネイリールにも圧倒的な違いがある。それは見た目とかそういう分かりやすいものではなく、ただの感覚的なものだが、あながち外れてはいないだろう。

凜のその言葉を待っていたかのように、ネイリールの表情が愉悦に変わる。

初めて自身の中の竜が認められたかのように、心底とばかりに歓喜が湧き上がったかのように見えた。

「正解。まあ、分かってたみたいだけだな」

「感覚的にですけどね。ネイさん」

「ん？」

頬が上気して微かにだが朱色に染まっていたネイリールが、何かを感じ取ったのか瞳に正気の色を戻らせる。

「オレは貴方の望むとおり、答えを出した。貴方も、オレの望む通り答えを言ってくれませんか？」

「……………」

言葉の端に感じる誰かの存在。

きつとそれは、凜の知っている存在。

そう言えば、今度は別の意味でネイリールの表情が楽しげなものへと変わる。恐らく、ネイリールにとってみたら予想範囲内だったであろう凜の言葉。

「ああ…そうだな。分かりきった答えを、言ってみようか？」

全てが呑みこまれてしまいそんな静まり返った空間。

時間の流れも何もかもから解き放たれたかのように、二人を縛るものは存在しないかに見えた。



一瞬だったのか。それとも長い時間だったのか。

感覚が失われるが、それさえも気にならない二人だけの空間。

凜はネイリールから視線を逸らす事は無く、ネイリールも凜を瞳に写したまま口角を上げた。分かりやすい笑みを浮かべ、玉座に背をもたれ掛からせる。

「元々、アイツも覚悟してただろうしな。待ち望んでいた、とも言  
うが」

焦らず、ではなく独り言のような呟き。

ネイリールの言葉に凜は答える事無く、ただ目的の音が発せられる事だけを待っていた。ネイリールの言う通り、元々分かっていた事実だった。

凜が受け入れなかっただけの話しなのかもしれない。

それでも、この世界の事を学ぶうちに凜の中に降りてきた。それだけの話し。

「……」

「……」

更に無言が重なり、ネイリールはゆっくりと散漫な動きで顎に右手を当てると、軽く息を吐き出す。

「俺は、竜になる事を約束された竜還りだが、この世界に純血種が存在していないわけじゃない」

「……」

室内に、然程大きくも無いネイリールの声が静かに響く。

「リーンは恩恵持ちではテノと親しかったか」

「そうだね。友達…だと思う」

「加護持ちじゃフェルとヒースか。テノとそれほど親しくならなかったらここまでではつきりとは分からなかったかもしれないなあ。まあ…アイツと接触したのが大きいんだろうが」

最終的に、今俺と会ったしな。

そう言って笑うネイリールだが、表情に余裕は感じられない。笑ってみせているだけ。

また、少し間が空いたかと思うと、ネイリールの表情から感情が消えた。

王の表情カオのと竜の表情カオが混ざり合ったような複雑な色を、感情を消えさせたはずの表情で表す。

次だと、思わず身構えそうになった凜は意識的に身体から力を抜いた。

分かりきった事実を聞くにしても、改めて言葉にされるのはやはり違う。

「リーンは琥珀、と名付けたんだっ たな。あの …」

最後の光竜を。

ドクリ、と心臓が嫌な音をたてた。  
柄にも無く、緊張し過ぎたらしい。

「純血の竜に名をつけられるのは、その竜よりも高位の存在。竜還りや先祖還りの純血竜じゃ、始祖に近い光竜に名をつける事は不可能」

わかるな？

この言葉の意味が。

そう、声には出さずに言われたような気がした。

竜還りは、加護持ちが竜として蘇る事を約束された存在。



純血竜の先祖還りは、微かに流れる別系統の竜の血が濃くなり、数代前の血筋の竜として生れ落ちる事。

先祖還りというだけで、例えば琥珀の上位の種族であったとしても名をつける事は出来ない。

「ふ……」

思わず、凜の口から笑いが漏れた。

どつりで、琥珀に名を求められた時に嫌な予感がしたはずだと思ふ。やはり直感は捨てたものじゃないんだなと笑えば、ネイリールが困ったように眉間に皺を寄せる。

「俺は竜還りだからリーンという存在が分かる。琥珀と連絡をとっていた、というのもあるけどな」

「……」

「俺や琥珀にとって……いや、気付いてはいないが全ての竜に関わる者たちにとって、リーンは……」

ネイリールが何かを訴えるように紡いだ言葉。

だが、それを遮るように、謁見の間に爆発音が響き渡った。

「「ッ!?!?」」

ありえない出来事に、咄嗟に凜は《守護乃霧》を発動させる。そんな凜を守るようにネイリールが音と凜の間に立ち、左腕を前へと突き出した。

「リーン。話しが途中になって悪かったな」

「いえ…」

まさか嚴重な結界に覆われている謁見の間に爆発音が響くなんて、流石のネイリールも予想していなかった事だろう。

「そして、今回の騒ぎの元凶には……本当にすまん」

「……？」

頭を下げながら疲れ果てたようなネイリールに、どうしたのかと問いかけるより先に、今度は爆発音ではなく声が響いた。

未だに爆ぜる火の音に負けず劣らずの声。

「父上ーッッッ！！ あの件は片付けておいて下さいと出立する前に約束してあったでしょうッッッ！！！」

声の大きさよりも、響いた言葉に瞳を瞬く。

「…父上？」

「……」

凜の疑問の言葉に、ネイリールは眉間の皺を濃くしながら口元を歪める。その表情は怒っているような困っているような何とも言い難いものだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2248/>

---

Aura - Lucent

2011年9月20日20時57分発行